合意性推定に関する研究

－社会的評価を受けやすい行動に着目して－

吉 武 久 美

目次

第 1 章
序論……1

1.0　問題の背景

1.1　False Consensus Effect（誤った合意性の効果）とは何か

1.2　FCE に関する研究

1.3　FCE の生じるメカニズム

1.4　先行研究の統合と問題の所在

1.4.1　信念的判断と合意性推定
— 個人的重要性に注目して —

1.4.2　社会的迷惑行為および向社会的行動と合意性推定

1.4.3　仮想的有能感と合意性推定

1.4.4　推定する対象集団と合意性推定

1.4.5　集団同一視と合意性推定

1.5　本研究の構成

第 2 章
信念的判断の個人的重要性が合意性推定に及ぼす影響……17

2.1　研究 1 の目的

2.2　方法

2.3　結果

2.4　考察

第 3 章
社会的評価が合意性推定に及ぼす影響……27

3.1　本章の目的
3.2　研究 2
3.2.1　目的
3.2.2　方法
3.2.3　結果
3.2.4　研究 2 の考察

3.3　研究 3
3.3.1　目的
3.3.2　方法
3.3.3　結果
3.3.4　研究 3 の考察
3.4　全体的考察

第 4 章
内集団-外集団が合意性推定に及ぼす影響……58

4.1　研究 4 の目的
4.2　方法
4.3　結果
4.4　考察

第 5 章
総合考察……72

5.1　本研究の意義
5.1.1　合意性推定の判断課題
5.1.2　合意性推定の対象集団
5.2　本論文で得られた知見
5.3　今後の課題と展望

引用文献……79
謝辞

付録

第1章
序論

1.0　問題の背景

自分と同じ判断や行動を多くの人たちがすると，自分の判断や行動は一般的なものであると何の根拠も無く考えることはないだろうか。たとえば，自分が好きな色と同じ色を多くの人も好んでいると考えたり，猫好きは多くの人が猫を好きだと考えたり，トマトが嫌いな人はトマトの嫌いな人は多くいると考えがちであったりする。人は，自分の判断や行動が他の多くの人々と同じで，共通している（合意が得られている）と考える傾向をもっているといえる。このように「自分の判断・行動は他者と共通している」と推定する現象をRoss, Green, & House（1977）は実証的に検討している。彼らは，この研究において，ある判断や行動に賛同する者が推定する当該判断（行動）に賛同する人の割合と，賛同しない者が推定する当該判断（行動）に賛同する人の割合を比較し，これを「False Consensus Effect（誤った合意性の効果）」とした。先行研究において，この現象の頑健性が示されている。我々は，多かれ少なかれ日常的に自分の判断や行動の合意性を推定しているのであるが，このようなありふれた思い込みが負の方向へと働くこともある。たとえば，道端に座り込むような周囲に迷惑な行為でも「みんなもする」と思い込むことで，迷惑なことであるという意識は低減することになる。また，イジメをしている人が周囲のみんなも同じ状況であれば自分と同じような行動をすると判断すれば，イジメをすることへの抵抗感が軽減されることになる。本研究では，合意性を多く推定するという現象を，False Consensus Effectを基に検討するとともに，仮想的有能感や個人的重要性，集団同一視といった個人差要因が合意性推定に及ぼす影響，および「自分の判断・行動は他者と共通している」と推定する際の「他者」が推定に及ぼす影響，そして，合意性推定の対象となる判断や行動に対する社会的評価の違いといった側面まで多面的に検討を行う。それにより，誰もが行う合意性推定といった日常的行動の負の側面を解明することの一助となることが本研究の目的である。次節では，False Consensus Effectについての説明を行う。

1.1　False Consensus Effect （誤った合意性の効果）とは何か

Ross et al.（1977）において，False Consensus Effect（以後，FCEと省略する）は「ある状況での自分の行動選択や判断は比較的一般的なもので適切なものであるとみな

す反面，他の選択反応を稀なことで不適切なものであるとみなす傾向」と定義された。そして，彼らは選択した自分の判断や行動について，多くの人が自分と同じ判断・行動を行うと過大に推定する（overestimate）ことを示した。具体的には，実験参加者に研究のためサンドウィッチボードをつけて学内を歩き回るように依頼し，この依頼に同意する者と不同意の者の両方において，自分と同じ判断・行動を多くの人が行うと推定することを明らかにした。このとき問題となるのは，実際の合意度ではなく，自分の判断・行動は自分と異なる判断・行動を選択した者よりも多くの者に選択されるとみなすことである。彼らの示したFCEの検証方法は次のとおりである。まず，ある行動（判断）に同意か不同意か，自分の判断を示させる。さらに，同意の者はその行動に自分と同じように同意の者と不同意の者の割合を推定する。このとき，2者を合計した割合が100%となるよう推定する。同様に，不同意の者は自分と同じ不同意の者と同意の者の割合を合計100%となるように推定する。この同意の者と不同意の者が推定した同意する者の割合をt 検定し，これにより明らかとなった差をFCE（誤った合意性の効果）とした（Figure 1.1）。

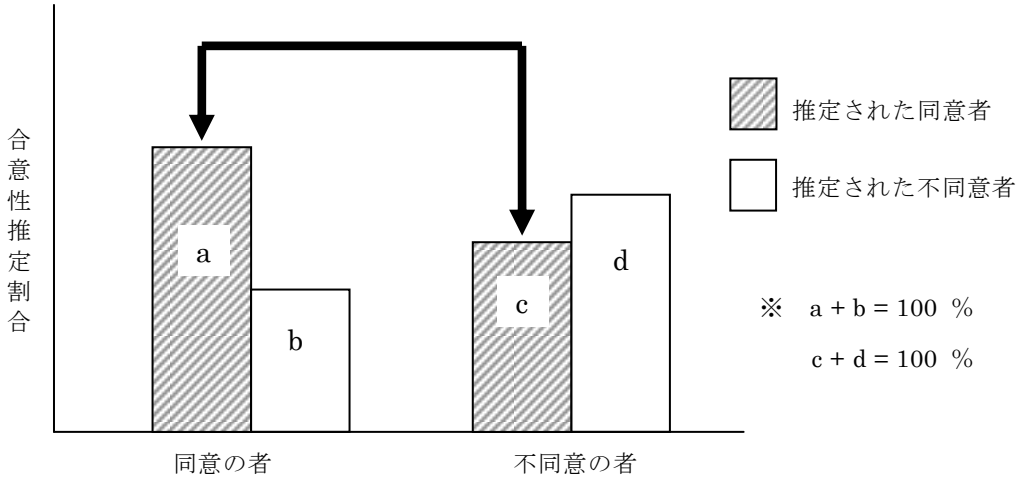


Figure 1.1　Ross et al. の FCE の検証方法

1.2　FCEに関する先行研究

Ross et al.（1977）において定義されたFCEは，他の多くの研究者によって，その検証方法を踏襲することで研究が行われ，様々な判断や行動を合意性推定の対象としている。また，検証方法については，先述の t 検定による検討だけでなく他の方法も用いた検討も行われている。

たとえば，宇宙計画の是非についての国民投票という仮想場面における選択や実際にサンドウィッチボードをつけて学内を歩き回るかについての選択（Ross et al., 1977），夏休みの課題図書を10冊の中から選択する（村田，1986），学生に自分が人事責任者であると想定させ，提示された二人の人物のどちらを採用するかの選択（田村，2005）といった行動選択について，合意性の推定が行われたものがある。このほかにも，実際の自分の見解や好み，政治的立場や個人的問題（e.g., 楽観的か，一人が好きか，死について考えるか（Ross et al., 1977）），自己の能力（e.g.,リーダーシップ能力，他者をくつろがせることができる（Campbell, 1986）），提示された状況に対しての二者択一（e.g., ハムサラダと卵サラダのどちらを食べるか，部屋の色を塗るならイエローとブルーのどちらか，フランス映画とイタリア映画のどちらを見るか（Gilovich, Jennings, & Jennings, 1983）），8つのバイアスの影響の受けやすさ（e.g., 成功と失敗の帰属，ハロー効果，新奇性（Pronin, Lin, & Ross, 2002））についての自分の判断に対する合意性を推定させたものなどがある。これら多くの先行研究において，様々な自分の判断や行動に対して生じるFCEが確認されているが，すべての判断や行動に対してFCEが生じているわけではない。

合意性推定の検証方法としては，Ross et al.（1977）で用いられた同意者・非同意者の割合を推定し，t 検定を行うのみでなく，7件法（全く同意しない～とても同意する）で自分や一般人・研究者の合意性を評定し，評定した合意性の総得点を従属変数，性別（被験者間）と自分や一般人などの対象（被験者内）を独立変数として分散分析を行ったり（Dudley, 1999），賛成する人の割合（合意性）を従属変数，自分の立場（賛成・反対）と態度の重要性を独立変数として分散分析を行ったり（Fabrigar & Krosnick, 1995），自己の立場（賛成・反対）と賛成に対する合意性推定値との相関係数を従属変数とした t 検定を行った研究（田村，2012）がある。このほか，実際の合意性と推定された合意性のズレを見なければ誤った合意性とは言えないとの主張から検証方法自体の問題を指摘し，当該調査の参加者が調査で用いられた判断や行動に実際に同意した人数

（実測値）と推定された同意者（合意性推定値）の差をTruly False Consensus Effectと定義し，その差を従属変数とすることで合意性推定を検討している研究もある（Krueger & Zeiger, 1993; Kruger & Clement, 1994）。

本研究では，Ross et al.（1977）の定義したFCEを基にした検討を行うとともに，他の検証方法によっても合意性推定の問題を検討していく。次の節において，先行研究の問題と本研究で取り上げる判断や行動の側面から合意性推定について述べることとする。

1.3　FCEの生じるメカニズム

Ross & Nisbett（1991）では，FCEは自己中心的帰属（egocentric attribution）と似た現象であり，社会的認知や帰属の先行研究において似た知見が報告されていることを示している（e.g., Holmes, 1968（attributive projection，属性投射）; Kelly & Stahelski, 1970）。さらに，彼らは，他の研究では自分の行動選択が合理的で規範的であるとする欲求を中心とした動機づけによる解釈が多い中，認知的プロセスの働きに注目したことを述べている。具体的には，Ross et al.（1977）では，FCEの生じるメカニズムとして次の3つを挙げている。（1）自分と類似した判断を行う人々との選択的接触，および結果的にその行動が最も思い出されやすいという利用可能性，（2）状況のあいまいさの解消，（3）自分の態度や行動の妥当性を保ちたいという自我防衛的動機づけの3つである。この研究では，サンドウィッチボードを着用し，キャンパスを歩くことの諾否に対するFCEが検討されている。彼らの主張によれば，参加者にとっては，ボードの着用を応諾した場合にはその姿を知人に見られること，また，拒否した場合には実験者を落胆させることが自我の脅威となっている。そして，その解消・低減のために，自我防衛的動機づけによるFCEが生じるとされている。換言すれば，知人にボードを着用した姿を見られることの恥ずかしさや実験者を落胆させることへの罪悪感といったことが，参加者にとって自我を防衛するべき事柄として捉えられている。また，Rossは別の著書において（Ross, 1977），FCEの生じるメカニズムとして，自身の研究であるRoss et al.（1977）で主張された自我防衛的動機づけよりも利用可能性やあいまいさの解消に注目している。これは，彼らが設定したサンドウィッチボードの着用依頼状況が，参加者にとって，自我を防衛すべき強い脅威が生じる危機的状況とは言いがたいことからも推察される。

また，村田（1986）は課題図書の選択においてFCEが生じるのは，「自分の判断・行動が最も効率的に利用できる情報となるため，同じ状況の一般他者は自分と同じ判断・行動を行うと推定しやすい」と指摘し，FCEの生じるメカニズムを自己の判断・行動の利用可能性に求めている。このほかにも，選択的接触や利用可能性がメカニズムとして指摘されている（Mullen, Atkins, Champion, Edwards, Hardy, Story, & Vanderklok, 1985; Sherman, Presson, Chassin, Corty, & Olshavesky, 1983）。FCEの生じるメカニズムとして,利用可能性やあいまいさの解消を指摘した先行研究は多く見受けられる。

合意性推定に関する先行研究の中で，動機づけに焦点を当てた研究として，つぎの3つを示す。新奇な場面における合意性推定の先行研究であるSherman, Presson, & Chassin（1984）は，自分の選択した行動が失敗であるとフィードバックを受けた場合，つまり，選択の失敗という脅威にさらされた場合には自分の行動を正当化し，自分の行動を社会的に支援するように動機づけられ，FCEを示すことを指摘している。さらに，Sherman et al.（1983）は，未成年者と成人の喫煙行動の合意性推定において，未成年者のみがFCEを示すことを明らかにした。すなわち，未成年者の喫煙行動のように社会的に望ましくないネガティブな行動では，喫煙する未成年者は自分の行動の正当化に動機づけられ，他者も喫煙すると多く推定したのである。また，Suls, Wan, & Sanders（1988）では，健康に関する行動・習慣（e.g., 1日に2杯以上のカフェインありのコーヒーを飲む，少なくとも週に3日は朝食を食べている）に焦点を当て，これら健康関連習慣の合意性推定の正確性に「行動の望ましさ」が影響を与えていることを示した。具体的には，望ましくない健康関連習慣について合意性を過大に推定する傾向のあることを明らかにした。

このようにFCEの生じるメカニズムとして，選択的接触や利用可能性，あいまいな状況の解消，動機づけの側面が指摘されている。本研究では，日常的に行われるネガティブな行動について検討することから，行為者は社会的にネガティブな評価を受けやすい行動を行うことで，他者の自分に対する評価が悪くなることを自分への脅威と捉え，自分の行動を正当化するために，自分と同じ行動をする者を多く推定すると考えられる。したがって，これらメカニズムの中でも，本研究では，動機づけ，自我防衛的な自己正当化による動機づけに着目する。

次節では，先行研究と本研究で扱った要因との関連について述べる。

1.4　先行研究の統合と問題の所在

FCE研究の多くは，Ross et al.（1977）も含めて，今まで経験したことのない新奇な状況を実験参加者に想定させ，合意性の推定を行わせている。このため，その判断・行動自体の多くが評価のしにくい,正誤の判断のつけにくい,あるいは判断の必要のない，あいまいなものであった。しかし，普段の生活を考えたとき，日常的に繰り返され，さらに,ネガティブやポジティブといった社会的な評価を受ける判断･行動（社会的行動）を行う機会は多いものである。たとえば，駐輪場所以外に駐輪する行為は周囲にマイナスのイメージを持たれる行為であるものの，通勤通学で自転車を利用する人の中には，毎朝のように歩行者の邪魔になる場所への駐輪といった迷惑な行為を繰り返す人もいる。一方，ボランティアに参加することはプラスのイメージを持たれる行動であり，日常的にこのような奉仕活動を繰り返す人も多くいる。したがって，本研究では，判断や行動に対する社会的な評価に焦点をあてる。社会的に評価を受けにくい信念といえる判断，そして，社会的にネガティブもしくはポジティブな評価を受ける社会的迷惑行為や向社会的行動といった社会的行動を取り上げ，そこで生じるFCEおよび仮想的有能感や個人的重要性，集団同一視，合意性を推定する際の他者が所属する集団が，合意性推定に与える影響について検討する。Figure 1.2 に本研究の全体像を示す。行為者とは「合意性を推定する者」をいい，その個人差要因として，仮想的有能感と集団同一視を取り上げている。判断の課題とは「合意性を推定する判断や行動」をいい，その個人的重要性や社会的評価に焦点を当てている。最後に，対象集団とは「合意性を推定するときに判断の手掛かりとする集団」をいい，内集団－外集団を用いた。

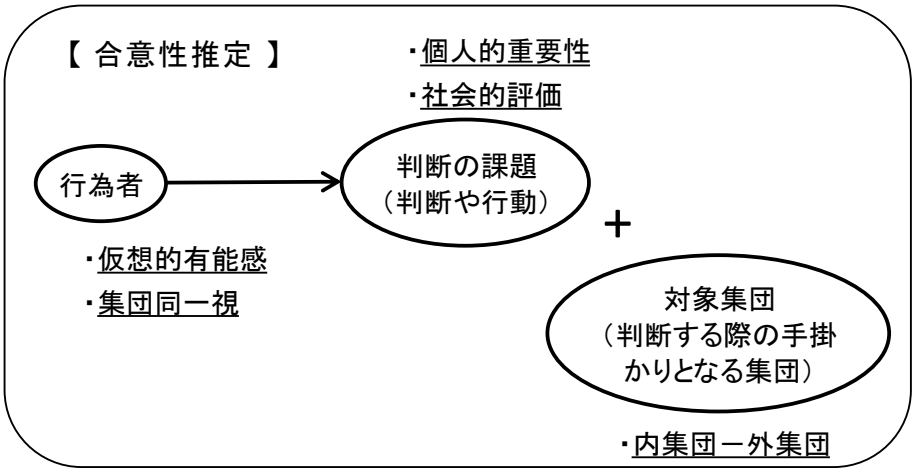


Figure 1.2　本研究で検討された要因の全体像

1.4.1　信念的判断と合意性推定 ― 個人的重要性に注目して ―

FCEの代表的な研究であるRoss et al.（1977）では，35課題の判断・行動に対する合意性推定を行っているが一貫した結果は得られていない。具体的には，「女性の社会進出への賛否」，「死について考える」，「黒パンと白パンのどちらが好きか」といった課題では合意性を多く推定し，FCEは生じているが，「一人と大勢のどちらが好きか」，「バスケットボールとフットボールのどちらが好きか」といった課題ではFCEは生じていない。彼らの研究で使用された課題を検討すると，その課題を個人的にどれだけ重要だと認知しているのか，そして，その課題が持つ社会的な評価の受けやすさの2点がFCEの生じ方に影響を与えていると考えられる。たとえば，女性の社会進出という課題をそもそも自分にとってさほど重要なことではないと考えていれば，自分と同じ判断の人が多くても少なくても，当人にとっては問題とはならない。つまり，自分と同じ判断の人を多く推定する必要がないため，FCEが生じにくいと考えられる。しかし，女性の社会進出に賛同することが社会的にポジティブな評価を受けやすいと考えていれば，FCEが生じやすいと予測される。

そこで，研究1では，課題の個人的重要性と社会的評価に焦点をあてることとする。まず，FCEと個人的重要性との関連性に関する先行研究として，Fabrigar & Krosnick（1995）は，提示された課題に対する個人的重要性が合意性推定に与える影響について検討している。彼らは，「中絶の合法化」，「銃規制」，「マリファナの合法化」への賛否に対する合意性推定などを課題として取り上げた。その結果，FCEは生じていたものの，その課題の個人的重要性とFCEとの関連は見られなかった。一方，Kenworthy & Miller（2001）は，所属集団の集団サイズが合意性推定に与える影響を検討する研究の中で，「死刑制度」，「同性愛者の権利獲得」，「マリファナの合法化」を課題として取り上げ，その重要性を高く認知している者は低い者に比べて，FCEが強く生じていることを明らかにしている。これら2つの先行研究では，FCEとその課題に対する個人的重要性との関連に一貫した結果は見出されていない。このような結果の要因の一つとして，課題に対する社会的評価が影響していることが考えられる。Fabrigar & Krosnickの課題である「中絶の合法化」や「銃規制」の判断は社会的評価を受けやすいと考えられる（e.g.，中絶の合法化に賛同することは社会的にネガティブな評価を受けやすい）。それに対し，Kenworthy & Millerの課題では，社会的な評価を受けやすい課題だけでなく，死刑制度への賛否など社会的な評価を受けにくい課題も含まれていた（著者である

Kenworthyらが所属する南カリフォルニア大学のあるカリフォルニア州では，現在でも死刑制度があり，死刑判決が下されている。そのため，ヨーロッパ諸国のような死刑制度への極端なネガティブ評価はないと考えられ，賛成・反対に対する明確な社会的評価は存在しないと推測される）。つまり，社会的に望ましいか望ましくないかといった社会的評価を受けやすい課題では個人的重要性の影響は小さいが，社会的評価を受けにくい課題では個人的重要性が影響を与えていたと考えられる。このように社会的評価の異なる課題をRoss et al.（1977）でも同時に扱っている。彼らの研究では，社会的な評価を受けやすい課題（e.g.，女性の社会進出や貧困問題への態度）と社会的な評価を受けにくい課題（e.g.，個人的な好みの問題）が混在していた。社会的な評価を受けやすい課題では社会的望ましさの影響を，また，社会的な評価を受けにくい個人の嗜好や個人的問題では，その課題の個人的重要性が合意性推定に影響を与えていたと考えられる。これらのことから，研究1では課題の個人的重要性が合意性推定に与える影響を検討するため，社会的な評価を受けにくい課題として信念的判断を取り上げる。

次に，信念的判断とはどういったものを指すのか，具体的な内容について述べる。我々の日常生活には，人の好みや主義主張といった外部からの評価（ネガティブ・ポジティブ）を受けにくい判断が存在する。このような判断は，個人的な信念の下に行われる判断であると捉えることができ，個人的な趣味の問題や社会的な信条といった様々なものが存在している。このような信念的判断は社会的な評価を受けにくいことから，先述したとおり，社会的望ましさなどの影響を受けることなく，判断の個人的重要性が合意性推定に影響を与えやすいと考えられる。研究1では，多種多様な信念的判断の中でも，自分の趣味や食べ物の好みといった個人的なことと関係する「個人的な信念に対する判断（以後，個人的信念と呼ぶ）」といえるものと，死刑制度に対する賛否や臓器移植のドナー登録承認といった社会と関連するものの善悪・正誤の区別が一概にはつけられない「社会に関連する信念に対する判断（以後，社会関連信念と呼ぶ）」といえるものを合意性推定の課題として取り上げる。

1.4.2　社会的迷惑行為および向社会的行動と合意性推定

日常的な行動の中には犯罪とまでは言えないものの周囲の人に不快な思いをさせる行動が数多く存在する。繰り返される常習的な場面において，その判断や行動が社会的に非難されるような行動についても誤った合意性の推定は行われると考えられる。たとえ

ば，毎朝，駐輪場所以外に駐輪をする人は，多くの人も同じような場所に駐輪すると思い，ゴミのポイ捨てをする人は自分以外の多くの人もポイ捨てをすると思っていると考えられる。このような不特定多数の人に迷惑をかける行動は，最近，その増加が市民生活に少なからず影響を与えており，行動が日常的に繰り返され，周囲の他者に不快感や悪影響を与えることが大きな社会問題となっている。実際，その防止のため，東京都など多くの自治体で常習的迷惑行為に対して迷惑防止条例を改正し，その罰則を強化したり，キャンペーンなどを実施したりして対策を講じているが，あまり改善されていないのが現状である（警視庁，2012 ; 東京都，2004, 2005）。これら迷惑行為には，落書き，迷惑駐車や駐輪，電車内での携帯電話の使用，ゴミのポイ捨て，図書館の本への書き込みなど多くのものが挙げられている。その中で，社会的迷惑行為は「行為者が自己の欲求充足を第一に考えて，他者に不快な感情を生起させる行為のこと」と定義され（斎藤，1999），多くの研究がなされている。出口（2004）は社会的迷惑行為に対する認知と頻度との関連を自意識や志向性の側面から検討し，迷惑認知と頻度との関連性に公的・私的自意識および社会・個人志向性が影響していることを明らかにした。このほかに，高木・村田（2005）は，社会的迷惑行為と社会規範の関連について検討し，迷惑行為者と認知者の注目する規範の相違が迷惑行為を引き起こしている可能性を示唆している。また，戸田（2007）は社会的迷惑行動の認知を一般迷惑認知と個人迷惑認知に分けて捉え，迷惑認知と社会的迷惑行動頻度や向社会的行動頻度との関連を検討し，世間一般の迷惑認知推定と個人の迷惑認知にあまり差がないことを示した。多くの社会的迷惑行為に関する研究の中にも，周囲の他者による合意性推定を検討したものがある。石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉（2000）は，自分以外の多くの他者もその行為を迷惑だと認知する（であろう）という判断を「社会的合意性」と呼び，ある行為を迷惑だと判断する際に，自分以外の他者がその行為をどのように認知しているのかを推定していることを明らかにしている。つまり，迷惑と感じる人は自分以外の多くの人も迷惑と感じると思っていることを示したのである。そこで研究2・3・4では，新奇な場面ではなく，日常繰り返される社会的迷惑行為を取り上げる。また，先行研究で扱われた迷惑の認知に関する合意性推定（迷惑と感じるであろうことを推定する）ではなく，迷惑行為に関する合意性推定（迷惑行為を行うであろうことの推定）が見られるかどうかを検討する。さらに，研究2・3・4では，社会的迷惑行為と対比する行動として向社会的行動を取り上げる。向社会的行動とは「外的な報酬を期待することなしに，他人や

他の人々の集団を助けようとしたり，こうした人々のためになることをしようとする行為」と定義されている（Mussen & Eisenberg-Berg, 1977 菊池他訳 1980）。この「他者のためになることを意図する」向社会的行動と「行為者が自己の欲求充足を第一に考える」社会的迷惑行為は対照的な行動ともいえ，社会的迷惑行為とは異なり，向社会的行動は社会的に承認されたポジティブな行動と考えられる。このように，社会的評価の異なる2つの行動における合意性推定の違い，FCEの生じ方の違いを検討する。

また，研究4では，ネガティブ，ポジティブといった社会的評価の異なる2つの行動（社会的迷惑行為と向社会的行動）を推定課題として取り上げ，内集団－外集団を合意性推定の対象とした場合に，合意性推定にどのような違いが生じるのか検討する。先行研究において，内集団成員にはネガティブよりもポジティブな形容詞を当てはめ（ラベリング・バイアス），外集団よりも内集団成員が望ましい行動を取ると期待（究極的原因推論のバイアス）（Howard & Rothbart, 1980）し，内集団は外集団よりもポジティブに評価されること（Waldzus & Mummendey, 2004）が示されている。これらから，社会的な評価を受けやすい行動について，内集団－外集団を対象として合意性を推定した場合，偏見や内集団ひいき的な合意性推定が行われると考えられる。このように，内集団－外集団を対象とし，社会的評価の異なる2つの行動における合意性推定の違い，FCEの生じ方の違いを検討する。

1.4.3　仮想的有能感と合意性推定

若者世代の特徴として他者軽視や他者蔑視を通して，根拠のない有能感を高める傾向の強さが指摘され，仮想的有能感という概念が提唱されている（速水・木野・高木，2003）。仮想的有能感とは，「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価，軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義されている。仮想的有能感は自尊感情とは異なる概念で，自尊感情の高低と仮想的有能感の高低の組み合わせによる類型化が行われている（速水・木野・高木，2004）。仮想的有能感の特徴である「他者を軽視すること」は，「他者への配慮を欠くこと」につながり，「社会のルールを軽視すること」いわば「社会を軽視すること」と考えられることから，仮想的有能感は社会的迷惑行為と関連があることも指摘されている（速水，2006）。また，「一種の防衛機制として，他者を軽視することで自信を取り戻そうとしている」とも指摘されていることから，他者を軽視する傾向である仮想的有能感は，自分の判断・行動の合

意性を推定する際に，その判断・行動が社会的に望ましいものであるか，望ましくないものであるのかによって合意性の推定に影響を与えることが考えられる。そこで研究1・2では個人差変数として仮想的有能感を取り上げる。仮想的有能感の特徴は単に他者を見下すだけでなく，一種の防衛機制の働きとして他者を見下すことも指摘されていることから，社会的な評価を受けやすい行動（社会的行動）については，仮想的有能感の高低によって合意性推定に影響のあることが考えられる。

1.4.4　推定する対象集団と合意性推定

自らと同じである「多くの他者」として，誰をイメージし，想定しているかは，現実場面においては，その状況によって異なっているだろう。人は，自らの判断や行動の合意性を推定するときに，他者として，世間一般の人々を考えたり，友人や家族など親しい人たちをイメージしたりしている。先行研究では，一般的な人（Jones, 2004），同じ出身地，出身大学に属する人（Ross et al., 1977），出身校やクラスメートなど身近な人たち（Critcher & Dunning, 2009; Gilovich, 1990; 村田, 1986; Sanders & Mullen, 1983）といった人々を想定している。このような合意性推定の対象は，いわゆる世間一般や内集団を想定しているということができる。社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論によると，人は内集団と信念を共有することに動機づけられるとされている（Turner, 1991）。合意性を推定するとき，その他者が自分にとって重要であると考えられる場合に，自分の取った判断・行動が彼らと同じでありたいと動機づけられることで，合意性を多く推定する。つまり，内集団を合意性推定の対象とした場合，内集団成員と同じでありたいとの動機づけから，合意性を多く推定すると考えられる。さらに，先行研究では，現実の社会状況に即したものとなるように，内集団と外集団を設定し，合意性推定の検討が行われている。内集団－外集団を，新入生－上級生，ライバル大学間，liberal-conservative といった政治的立場（Mullen, Dovidio, Johnson, & Copper, 1992），性別（Krueger & Zeiger, 1993）などにカテゴリー化し，内集団に対しては，多くの合意性を推定していることが明らかにされている。このように，内集団に関しては，自らと同じ判断・行動を行う人を多く推定する傾向の頑健さが指摘されている（Robbins & Krueger, 2005）。しかし，外集団については，合意性を多く推定していたり，少なく推定していたりと一貫した結果は得られていない。外集団に対する少ない合意性推定については，False Uniqueness Effect（以後，FUE と省略する）と指摘されている。FUE

とは，FCE と逆に，自分の判断・行動を稀で少ない反応であると考え，周囲の他者は自分とは異なる判断・行動であると合意性を少なく推定することをいう（Mullen, Dovidio et al., 1992; Suls & Wan, 1987）。自分のことを特別視した方向で合意性推定が行われることから，集団間の文脈においては，内集団ひいき的な合意性推定が行われ，外集団は自分の判断・行動とは逆のことをすると考えるのである。Mullen, Dovidio et al.（1992）の研究結果では，合意性を推定する課題が集団間の利害関係に影響する内容である場合に，外集団に対する FUE が生じていることが示されている。

先行研究では，寄付金の分配方法，政治問題，MMPI（Minnesota Multiphasic Personality Inventory），課題の成績といった様々なトピックに対して，合意性推定を行わせており，その合意性を推定する課題の内容についてはあまり検討されていなかった（e.g., Krueger & Zeiger, 1993; Mullen, Dovidio et al., 1992; 田村，2010）。そのことが結果に影響を与えていたと考えられる。そこで，研究 4 では社会的にポジティブやネガティブといった評価を受けやすいと考えられる判断・行動（社会的迷惑行為と向社会的行動）を合意性推定の課題とし，内集団－外集団を合意性推定の対象とした場合に，どのような違いが生じるのかを検討する。これにより，一貫した結果が示されていない外集団に対する合意性推定に新たな知見を得ることが期待される。

先行研究では，合意性推定を行う際に想定する対象として，一般他者という周囲の社会全体や実際に所属する大学や集団が取り上げられている。また，2つの集団の合意性推定にどのような違いが生じるのかを検討するため，実在の集団カテゴリーが利用され，内集団－外集団を設定している（e.g., Krueger & Zeiger, 1993; Mullen, Dovidio et al., 1992）。一方，実在の集団カテゴリーによる対象集団の設定方法については，集団に対するステレオタイプ的イメージや構成員との接触から影響を受ける可能性が指摘されている（田村，2006）。そのため，操作的に内集団－外集団を設定することで集団に対する合意性推定が検討されている（e.g., Clement & Krueger, 2002; 田村，2010）。このような対象集団の操作的設定方法は，新奇な状況を利用して合意性を推定させ，集団からの影響を捉えるには有効であると考えられる。しかし，合意性推定と内集団ひいきを検討した研究ではないものの，実在の集団と操作的な集団では，集団の地位差による内集団ひいきに異なる結果が見出されている（Mullen, Brown, & Smith, 1992）。また，本研究では，日常的な行動に対する合意性推定に着目し，その行動の社会的評価から検討を行っている。日常的な場面では，操作的実験状況とは異なり，我々は多くの情報の影

響にさらされながら，合意性を推定していると考えられる。そのため，本研究では，より現実に即した状況から検討することが望ましいと考えられる。これまで操作的な状況の中で行われてきた先行研究によって明らかになった合意性推定の頑健性を，現実的な状況においても示すことができれば，合意性推定の知見をさらに積み重ねることができると考える。これらのことから，研究4では，実在の集団による内集団－外集団の設定を用いることとする。

1.4.5　集団同一視と合意性推定

自らが所属する集団をより身近に感じていれば，ほかのメンバーと同じでありたいとの動機づけが強くなり，その集団内において，自らと同じ判断・行動の存在を多く推定することが考えられる。Morrison & Matthes（2011）は，所属意識の高い者は低い者よりも合意性を多く推定していることを明らかにしている。そこで，本研究では内集団－外集団を規定する要因の一つとして想定される集団同一視を取り上げる。集団同一視の高い者は，内集団の望ましい特徴を好意的に評価し，それによって，内集団への評価を高くしている。このことから，集団同一視は，人が望ましい特徴であるポジティブ行動（向社会的行動）について，内集団の合意性を推定するときは正の影響を与えることが予測される。一方，望ましくない特徴であるネガティブ行動（社会的迷惑行為）については，外集団に正の影響を与えることが予測される。つまり，社会的迷惑行為や向社会的行動の合意性推定には，そうした行動傾向の高さだけでなく，集団同一視の高さも影響を与えると考えられる。そこで，研究4では，内集団－外集団の規定要因と考えられる集団同一視を取り上げ，集団同一視が合意性推定に与える影響について検討する。

1.5　本研究の構成

（1）第2章

研究1：信念的判断の個人的重要性が合意性推定に及ぼす影響

研究1では，社会的評価を受けにくいと考えられる信念的判断に対する合意性推定を検討する。さらに，その判断の個人的重要性に焦点をあてる。信念的判断としては個人的信念と社会関連信念を取り上げ，その個人的重要性や仮想的有能感が合意性に与える

影響について検討する。

【本章で用いた論文】

吉武久美・吉田俊和（2012）False Consensus Estimation On Social Behavior―focus on individual importance―　応用心理学研究，38(Special Edition)，129-131.

（2）第3章

研究2：社会的迷惑行為と向社会的行動における合意性推定

研究2では，社会的評価を受けやすいと考えられる判断・行動に焦点をあてる。ポジティブな評価を受けやすい向社会的行動とネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為を取り上げ，これらの判断・行動に対する合意性推定を検討するとともに，研究1と同様，仮想的有能感の影響についても検討する。

研究3：ドライバーの交通ルールやマナーに対する意識が合意性推定に及ぼす影響

研究3では，ネガティブな行動を行ったことが明確になっている者を調査することで，自分の「判断・行動」に対する合意性推定をより正確に検討することが可能となると考え，ネガティブな行動を実際に行っていると考えられる自動車運転免許停止処分という行政処分を受けて講習会に参加しているドライバーを調査対象者とした。このような違反運転者と，一般運転者を比較することで，交通状況における社会的行動に対する合意性推定を検討する。さらに，交通ルールやマナーに対する態度や意識（マナー遵守意識，自己正当化意識）が交通行動に対する合意性推定に与える影響を検討する。

【本章で用いた論文】

吉武久美・吉田俊和（2011）．社会的迷惑行為と向社会的行動における合意性推定　応用心理学研究，37，1-10.

吉武久美・吉田俊和（2013）．ドライバーの交通ルールやマナーに対する意識が合意性推定に及ぼす影響　東海心理学研究，7，32-39.

（3）第4章

研究4：合意性を推定する対象集団の合意性推定に及ぼす影響

研究4では，合意性を推定する対象集団に焦点を当てる。具体的には，社会的行動についての合意性を推定する対象を内集団・外集団とした場合に，それぞれの集団に対する合意性推定の生じ方に違いがあるかどうかを検討する。同時に，集団同一視について

も検討を加え，合意性推定に与える影響を明らかにする

【本章で用いた論文】

吉武久美・吉田俊和・高井次郎（2014）．内集団 - 外集団に対する合意性推定の差異
―社会的迷惑行為と向社会的行動による検討―　（投稿中）

（4）第5章　総合考察

最後に，本論文で扱った合意性を推定する課題，合意性を推定する対象の側面から，4つの研究を通じて明らかになったことを考察する。それと同時に，本研究がこれまでの合意性推定研究にもたらした意義についても考察する。さらに，今後の課題として，自己正当化からの動機づけ，Truly False Consensus Effectの検討，合意性推定の行動への影響について検討する。

第2章

信念的判断の個人的重要性が合意性推定に及ぼす影響

2.1　研究1の目的

先行研究の検討から，判断・行動に対する個人的重要性と社会的評価の 2 つが合意性推定に影響を与えると考えられる。ポジティブやネガティブといった社会的評価を受けやすい判断・行動では，個人的重要性よりも社会的望ましさといったことによって影響を受ける。一方，社会的な評価を受けにくい嗜好性や志向性といった信念的判断（個人的な信念の下に行われる判断）は個人的重要性の影響を受けると考えられる。研究 1 では，信念的判断の中でも，自分の趣味や食べ物の好みといった個人的なことと関係する「個人的な信念に対する判断（個人的信念）」といえるものと，死刑制度に対する賛否や臓器移植のドナー登録承認といった社会と関連するものの善悪・正誤の区別が一概にはつけられない「社会に関連する信念に対する判断（社会関連信念）」といえるものを合意性推定の課題として取り上げる。

先行研究において FCE が頑健に生じていることから，このような社会的評価を受けにくい信念的判断においても FCE は生じると予測される。しかし，その判断課題に対する個人的重要性の高低によって，その生じ方は異なり，重要性の高い判断に対しては低い判断に比べ，合意性を多く推定することが考えられる。

また，研究 1 では，仮想的有能感が信念的判断の合意性推定に影響を与えるかについても検討する。仮想的有能感の高い者は他者を見下すことで自信を取り戻し，自己の安定を得ていると考えられる。よって，自分と同じ判断・行動の人を多く推定することで自分の安定が得られる場合には，合意性を多く推定するであろう。研究 1 で扱う信念的判断は，社会的な評価を受けにくい，中立的な項目である。しかし，その内容は特に個人の問題である個人的信念と，社会と関連する社会関連信念の 2 つに分類できるものとなっていることから，個人的信念と社会関連信念では仮想的有能感の影響は異なることが予測される。具体的には，仮想的有能感の高い者は，個人的信念については，自分の趣味志向は特別で他者とは違うと判断することで他者を見下すことができ，自信を持つことができる。そのため，合意性を多く推定することはないと考えられる。一方，社会関連信念については，周囲の目を気にし，自分の判断を多くの他者も共有すると予測することで自分の判断が妥当であると考えることができ，心理的精神的な安定を得られる（白井，1979）。それゆえ，合意性は高く推定される。研究 1 では，以下の仮説を検討する。

仮説 1：社会的評価を受けにくい信念的判断（個人的信念や社会関連信念）においても，合意性は高く推定される。

仮説 2：社会的な評価を受けにくい信念的判断（個人的信念や社会関連信念）に対して合意性が推定される場合，個人的重要性の低い判断よりも高い判断において合意性は高く推定される。

仮説 3：仮想的有能感の高い者は，個人的重要性の高い信念の場合に合意性を高く推定する。その効果は，個人的信念よりも社会関連信念において大きくなる。

2.2　方法

調査協力者：調査協力者は，A 県内の大学生 1～3 年生 3 クラス 235 名（男性 73 名，女性 161 名，不明 1 名）。平均年齢は，19.1 歳（*SD* ＝1.18）であった。

質問紙の構成：個人的な事柄に関して判断を求める個人的信念 17 項目，社会と関連のある事柄に関して判断を求める社会関連信念 15 項目，計 32 項目を Byrne（1971）の態度尺度を参考に作成し，信念的判断項目とした。

これら 32 項目について，調査協力者は以下のことに関して回答した。

（1）行動判断：当該信念に対する自分の判断を「好き」「好きではない」や「思う」「思わない」といった 2 件法で回答した。

（2）合意性の推定：各項目について，「一般的に，他の人は自分と同じように考えると思いますか」との教示のもと，0～100％の範囲で自分と同じ判断をする人の割合推定に回答した。なお，その際，自分と異なる判断の人の割合との和が 100％となるように求められた。

（3）個人的重要性：当該項目について，個人的重要性をどのように判断しているのかを「まったく重要でないこと」～「とても重要なこと」の 4 件法で回答した。

（4）社会的評価：当該項目に対して社会的にどのような評価がなされるかの判断を「社会的にとてもマイナスなこと」～「社会的にとてもプラスなこと」の 5 件法で回答した。

（5）仮想的有能感尺度：仮想的有能感尺度の version 2（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004），11 項目を「まったく思わない」～「よく思う」の 5 件法で回答した。

2.3　結果

回答に不備のなかった 213 名を以下の分析に使用した。まず，信念的判断項目 32 項目において，「好きー嫌い」「思うー思わない」といった自己の判断が，90%以上の高い割合で一方に偏った項目 9 項目を削除した。さらに，社会的評価を受けにくい中立的な項目を選択するため，残り 23 項目の度数分布表を作成し，それぞれの項目で，「社会的にとてもマイナスなこと（ネガティブ評価）」もしくは「社会的にとてもプラスなこと（ポジティブ評価）」といった極端な評価をした者が合計 20%以上となる項目 4 項目（個人的信念 1 項目，社会関連信念 3 項目）を除く，19 項目（個人的信念 11 項目：e.g.，小説が好き，社会関連信念 8 項目：e.g.，原子力発電は必要だと思う）を社会的評価の受けにくい中立的な項目として設定した。また，ネガティブーポジティブの評価が極端であるとした 4 項目（前出の個人的信念 1 項目，社会関連信念 3 項目）を社会的評価の受けやすい判断とし，統制項目として扱った。この統制項目は，仮説検証に用いた 19 項目以外においても，FCE の生じていることを確認する目的で用いた。仮説 1 の検証方法と同様に，統制項目 4 項目 t 検定を行った。その結果，社会的評価の受けやすい判断である 4 項目すべてで FCE の生じていることが確認された（スポーツが好き（$t(211)= 2.51, p < .05$）；エコバッグを利用するべきだと思う（$t(211)= 5.73, p < .001$），死刑制度は廃止すべきだと思う（$t(211)= 4.11, p < .001$），紛争問題を解決するための武力行使は仕方がないと思う（$t(211)= 6.06, p < .001$））。

次に，個人的重要性が「まったく重要でないこと」「どちらかといえば重要でないこと」のどちらかに評定された項目を重要性の低い項目，同様に「どちらかといえば重要なこと」「とても重要なこと」の項目を重要性の高い項目として，中立的な項目 19 項目それぞれについて調査協力者を高群と低群に分類した。

さらに，信念的判断（全体 19 項目）・個人的信念（11 項目）・社会関連信念（8 項目），それぞれについて，個人的重要性の高低で「自分と同じ判断の人」の割合推定平均値を算出した。平均値，標準偏差を個人的重要性高低別に Table 2.1 に示す。また，仮想的有能感（11 項目）については，因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果，固有値の推移（3.72，1.26，1.01…）と解釈可能性から，先行研究と同様に一因子として扱った（$\alpha = .80$，$M = 32$ で高低に群わけ）。

仮説ごとの結果を以下に示す。

［仮説 1］

社会的評価を受けにくい中立的項目 19 項目について，FCE が生じているのかを確認するため，Ross et al.（1977）で行われた分析方法に従って t 検定を行った（e.g.，「死について考える」という項目に対し，「考えると回答した人の推定した考える人の割合」と「考えないと回答した人の推定した考える人の割合」を t 検定した）。その結果，23 項目中 18 項目で合意性を多く推定しており，FCE の生じていることが認められた（Table 2.1）。FCE が生じていた項目の内訳は，個人的信念 11 項目中 7 項目，社会関連信念 8 項目中 7 項目であった。以上のことから，仮説 1 は支持されたと考えられる。

［仮説 2］

仮説 2 を検証するため，それぞれの判断に対する合意性推定平均値を個人的重要性高低によって t 検定を行った。信念的判断（全 19 項目）・個人的信念（11 項目）・社会関連信念（8 項目），それぞれについて，合意性推定の t 検定の結果を Table 2.2 に示す。それぞれの判断において，個人的重要性の高低で有意な差が見られたことから仮説 2 は概ね支持されたと考えられる。

Table 2.1　該当項目を肯定する者・肯定しない者の判断課題に対する合意性推定の割合と標準偏差および t 検定結果

			肯定する人推定		
			肯定する者	肯定しない者	t 値
個人的信念	1	SFが好き	62.81 (14.89) 124	53.84 (12.74) 89	4.60 ***
	2	吉本新喜劇が好き	64.73 (14.63) 142	57.34 (12.69) 71	3.63 ***
	3	外国映画が好き	63.63 (14.65) 157	58.93 (13.38) 55	2.10 *
	4	クラッシック音楽が好き	42.16 (15.10) 115	42.76 (15.11) 98	0.29
	5	現代アートが好き	53.64 (16.32) 106	50.75 (16.49) 106	0.20
	6	時代劇が好き	42.34 (13.06) 59	41.39 (14.84) 153	0.67
	7	小説が好き	61.01 (14.06) 132	56.72 (13.56) 81	2.19 *
	8	犬と猫なら、犬が好き	59.81 (11.07) 144	52.09 (13.12) 69	4.48 ***
	9	大勢でいるよりも、一人でいるほうが好き	43.53 (18.01) 89	39.93 (15.86) 123	0.13
	10	死について考える	64.90 (23.57) 179	38.24 (20.83) 34	6.15 ***
	11	こだわっている色がある	60.66 (20.03) 109	43.80 (15.50) 104	6.90 ***
社会関連信念	12	公立小中学校の統廃合は必要	52.81 (12.06) 95	45.09 (15.48) 117	3.98 ***
	13	クリエイティブな(何かを創り出すような)仕事に就くべきだと思う	54.18 (14.13) 91	51.86 (14.36) 122	0.24
	14	同性愛婚を認めてもよいと思う	50.74 (17.32) 154	33.64 (18.80) 59	6.17 ***
	15	裁判員制度は必要だと思う	54.04 (15.06) 72	39.75 (17.59) 140	5.88 ***
	16	Web上での匿名性は必要だと思う	72.93 (17.05) 193	53.60 (15.75) 20	4.86 ***
	17	薬のインターネット販売続行を認めるべきだと思う	59.50 (15.80) 90	45.19 (16.47) 123	6.37 ***
	18	尊厳死を認める	55.38 (17.13) 186	48.11 (11.34) 27	2.14 *
	19	原子力発電は必要だと思う	62.21 (17.16) 161	53.98 (17.33) 51	2.98 **

注1）上段：平均値，（ ）内は標準偏差　下段：N
注2）*** $p < .001$，** $p < .01$，* $p < .05$

Table 2.2　判断別，個人的重要性高低の平均値・標準偏差と t 検定結果

	個人的重要性			
	高	低	t 値	
信念的判断	59.04	53.81	7.61	***
（全 19 項目）	(9.53)	(7.11)		
個人的信念	57.35	53.08	3.39	***
（11 項目）	(18.36)	(8.03)		
社会関連信念	56.70	50.34	4.00	***
（8 項目）	(16.04)	(17.40)		

注 1）（ ）内は標準偏差
注 2）*** $p < .001$
注 3）$N = 213$

［仮説 3］

仮説 3 を検証する前に，個人的信念と社会的信念の両者を含む信念的判断についても検討を行い，社会的評価を受けにくい信念的判断における個人的重要性および仮想的有能感の影響を確認しておく。その後，仮説 3 を検証するため，個人的信念と社会関連信念についての検討を行う。

1）信念的判断（19 項目）

信念的判断に対する合意性推定平均値を従属変数として，2「個人的重要性高低（被験者内要因）」×2「仮想的有能感高低（被験者間要因）」の 2 要因分散分析を行った（Table 2.3）。分散分析の結果，交互作用は有意ではなかった。個人的重要性の主効果は有意で（$F(1,211) = 57.80$, $p < .001$），重要性を高く評定した者（59.05）のほうが重要性を低く評定した者（53.81）よりも，合意性を多く推定していた。一方，仮想的有能感の主効果は見られなかった。

2）個人的信念（11 項目）

個人的信念に対する合意性推定平均値を従属変数として，2「個人的重要性高低（被験者内要因）」×2「仮想的有能感高低（被験者間要因）」の 2 要因分散分析を行った（Table 2.3）。分散分析の結果，信念的判断同様に交互作用は有意ではなかった。個人的重要性の主効果は有意で（$F(1,211) = 11.41$, $p < .001$），重要性を高く評定した者（57.34）のほうが重要性を低く評定した者（53.08）よりも，自分と同じ判断の人を多く推定して

いた。一方，仮想的有能感の主効果は見られなかった。

3）社会関連信念（8 項目）

社会関連信念に対する合意性推定平均値を従属変数として，2「個人的重要性高低（被験者内要因）」×2「仮想的有能感高低（被験者間要因）」の 2 要因分散分析を行った（Table 2.3）。分散分析の結果，交互作用は有意ではなかった。個人的重要性の主効果は有意（$F(1,211) = 15.97$, $p < .001$）で，重要性を高く評定した者（56.74）の方が重要性を低く評定した者（50.38）よりも，自分と同じ判断の人を多く推定していた。また，仮想的有能感の主効果は有意（$F(1,211) = 13.28$, $p < .001$）で，仮想的有能感の高い者（56.49）は低い者（50.63）よりも，自分と同じ判断の人を多く推定していた。

個人的重要性の主効果は，信念的判断全体においても，個人的信念，社会関連信念においても見られた。このことからも仮説 2 は支持されたと考えられる。一方，3 つの判断，いずれの従属変数においても個人的重要性と仮想的有能感の交互作用は見られなかったことから，個人的重要性と仮想的有能感に関連はなかったといえる。さらに，仮想的有能感は社会関連信念においてのみ主効果が見られ，信念的判断と個人的信念においては見られなかったことから，仮説 3 は一部支持されたと考えられる。

Table 2.3 仮想的有能感と個人的重要性による平均値・標準偏差および分散分析結果

	仮想的有能感				F値（自由度）		
	高		低				
	個人的重要性				主効果		交互作用
	高	低	高	低	仮想的有能感	個人的重要性	
信念的判断	59.26	53.60	58.84	54.02	.00	57.80***	.37
	(10.72)	(8.18)	(8.25)	(5.91)		(1,211)	
個人的信念	56.12	52.76	58.55	53.40	1.07	11.41***	.51
	(19.68)	(16.99)	(8.71)	(7.34)		(1,211)	
社会関連信念	59.81	53.17	53.67	47.59	13.28***	15.97***	.86
	(13.52)	(17.71)	(15.30)	(18.89)		(1,211)	

注 1）*** $p < .000$
注 2）上段：平均値，下段：標準偏差と自由度
注 3）$N = 213$

2.4　考察

研究 1 では，一概には社会的な評価（正誤）のつけにくい信念的判断においても FCE が生じることを確認し，さらに，その判断の個人的重要性および仮想的有能感が合意性推定に影響を与えていることを明らかにすることを目的とした。

研究 1 で使用した信念的判断は，個人に関連する信念 11 項目（個人的信念）と社会と関連する信念 8 項目（社会関連信念）の 19 項目からなる。これら信念的判断項目および統制項目 4 項目の計 23 項目について，FCE が生じているかどうかを確認したところ，23 項目中 18 項目で FCE が生じていた。すべての項目において FCE が生じていたわけではなかったが，比較的，高い割合で生じており，社会的評価の高い判断だけでなく信念的判断においても FCE が生じていたといえる。これは，先行研究で示されている FCE の頑健性が，研究 1 においても確認されたといえ，仮説 1 は支持されたと考えられる。

次に，個人的重要性は信念的判断項目においても，個人的信念項目や社会関連信念項目においても影響を与えていることが明らかとなった。個人的にその信念・判断を重要であると高く評定した判断は，低く評定した判断に比べ，合意性を多く推定していることが示された。これは，先行研究の結果を支持するものであり，さらに，先行研究では，その一貫性が認められていなかった個人的重要性の影響が，社会的な評価を受けにくい個人的信念・社会関連信念といった信念的判断において，一貫して認められたものである。加えて，社会的評価の受けにくい信念的判断において，よりはっきりと個人的重要性の影響が見られると予測していたことから，統制項目 4 項目についても個人的重要性の影響を検討してみた。この統制項目は他の信念的判断よりも社会的な評価を受けやすいと考え，研究 1 で扱った信念的判断の中から設定した項目である。その結果，重要性の高い判断（56.47）は低い判断（42.44）よりも多く合意性が推定されていた（$t(212)=5.55$, $p < .001$）。つまり，個人的重要性の影響が小さい（もしくは，見られない）と予測していた統制項目においても個人的重要性が影響を与えていた。故に，仮説 2 は概ね支持されたと考えられる。研究 1 では，統制項目は個人的信念 1 項目，社会関連信念 3 項目と項目数が少ないものの，その 4 項目の平均値を利用して個人的重要性の影響を検討した。しかし，これら 4 項目の社会的評価はポジティブ評価 1 項目，ネガティブ評価 2 項目，そして評価が分かれた項目が 1 項目となっており，統制項目の社会的評価は一定ではない（Table 2.4）。そこで，Table 2.4 に示した 4 項目の個人的重要性別の合意性

推定値を見てみると，ネガティブ評価の項目（項目 3，4）の値では個人的重要性の高い方が合意性推定は高く，社会的望ましさの影響が示唆される。社会的にネガティブな評価を受けやすい判断･行動では,個人的重要性の影響を受けにくい可能性が考えられる。

仮想的有能感の影響は,信念的判断の中でも個人的信念では見られなかった。しかし，社会関連信念においては，高有能感者（56.49）が低有能感者（50.63）よりも，自分と同じ判断の人を多く推定していたことから，仮想的有能感が社会関連信念に対しては影響を与えていたことが明らかとなった。よって，仮説 3 は，社会関連信念においてのみ支持されたと考えられる。社会と関連していると考えられる判断（e.g.,「裁判員制度は必要だと思う」「原子力発電は必要だと思う」）については，その合意性推定に仮想的有能感が影響を与えていたが，個人的信念（e.g., 外国映画が好き）に関しては，仮想的有能感の影響は見られなかった。これは，仮想的有能感の高い者が社会を軽視しつつも社会を気にしていることの現れであり，社会的評価が曖昧で，かつ社会と関連している事柄においては，他の人々も多くが自分と同じ判断を共有すると推測することで自己評価を高揚させていることが考えられる。

Table 2.4 統制項目 4 項目に対する個人的重要性高低別の合意性推定平均値と各項目の社会的評価

	個人的重要性		社会的評価（%）	
	高	低	ポジティブ	ネガティブ
1. スポーツが好き	72.55 (125)	68.18 (88)	37.09	0.00
2. エコバッグを利用するべきだと思う	78.34 (157)	65.93 (55)	24.41	22.07
3. 死刑制度は廃止すべきだと思う	39.34 (153)	48.95 (60)	4.23	17.37
4. 紛争問題を解決するための武力行使は仕方がないと思う	44.06 (160)	49.42 (53)	1.41	35.68

注）（　）内，$N = 213$

第3章
社会的評価が合意性推定に及ぼす影響

3.1　第3章の目的

第3章では，社会的評価が合意性推定に及ぼす影響について検討する。先行研究で扱われた判断・行動は，それ自体が評価しにくい，正誤の判断のつけにくい，あるいは判断する必要のない，あいまいなものとなりがちであった。また，合意性を推定する判断課題を社会的評価に基づく側面からの検討もあまり行われていない。しかし，日常的にはネガティブやポジティブといった社会的な評価を受けやすい判断･行動（社会的行動）に対する合意性を推定する機会も多いと考えられる。まず，研究2で，大学生を対象とし，日常的に行われやすいネガティブおよびポジティブな判断や行動を合意性推定の課題を用いて検討する。次に，研究3では，より現実的な状況を捉えることを試みる。具体的には，社会的にネガティブな評価をされやすい判断・行動を実際に取っていたと考えられる自動車運転免許停止処分という行政処分を受けたドライバーと行政処分を受けていないドライバーを対象として検討する。

3.2　社会的迷惑行為と向社会的行動における合意性推定（研究2）

3.2.1　研究 2 の目的

研究 2 では，特に，合意性推定の課題として，日常的に行われ，社会的な評価を受けやすい判断・行動を取り上げ，誤った合意性が生じる過程を明らかにする。この検討を通して, 社会的迷惑行為のようなネガティブな社会的評価を受けやすい行動においては, ポジティブな向社会的行動よりも多く合意性を推定することを明らかにし，自我防衛的動機づけに基づく，誤った合意性の推定がネガティブ行動において，行われやすいことを実証する。

さらに，研究 2 でも仮想的有能感を取り上げる。仮想的有能感の特徴は単に他者を見下すだけでなく，一種の防衛機制の働きも指摘されていることから，社会的な評価を受けやすい行動（社会的行動）に対しては，仮想的有能感の高低が合意性の推定に影響を与えることが考えられる。具体的には, Figure 3.1 に示すような影響過程が考えられる。まず，仮想的有能感は社会的迷惑行為といったネガティブな評価を受けやすい行動の行動傾向および社会的迷惑行為をする人の割合推定（以後,「迷惑推定」とする）に正の影響を与え，一方で向社会的行動といったポジティブな評価を受けやすい行動の行動傾向

および向社会的行動をする人の割合推定（以後，「向社会推定」とする）には負の影響を与えると考えられる。次に，社会的迷惑行為を行いやすい行動傾向は迷惑推定に，向社会的行動を行いやすい行動傾向は向社会推定に正の影響を与えると考えられる。

以上のことから，次の 4 つを仮説として検証する。

仮説 1：社会的評価を受けやすい判断・行動（社会的迷惑行為や向社会的行動）においても，あいまいで新奇な状況における判断・行動と同じように合意性は高く推定される。

仮説 2：社会的行動の中でも，ネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為の方が，ポジティブな評価を受けやすい向社会的行動に比べ，合意性は高く推定される。

仮説 3-1：仮想的有能感は迷惑推定に正の，向社会推定に負の影響を与える。

仮説 3-2：仮想的有能感は迷惑傾向に正の，向社会傾向に負の影響を与え，間接的に他者が行う迷惑推定に正の，向社会推定に負の影響を与える。

注）仮説 3-1，3-2 は Figure3.1 を参照

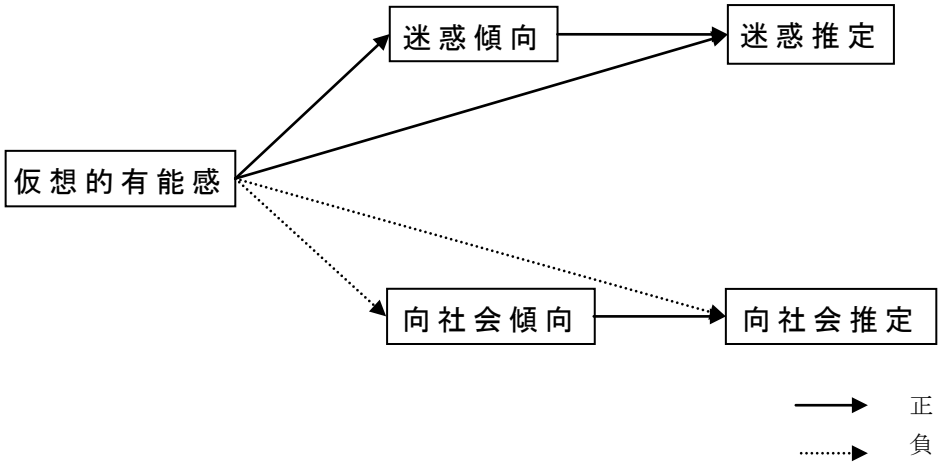


Figure 3.1　仮想的有能感が合意性推定および行動傾向へ及ぼす影響過程の予測図

3.2.2　研究 2 の方法

調査協力者：調査協力者は，A 県内の複数大学の 1～4 年生 217 名（男性 121 名，女性 94 名，不明 2 名）。平均年齢は，20.1 歳（*SD* = 2.75）であった。

質問紙の構成：自己の行動経験を問う項目として，以下の 36 項目を利用した（Table 3.1）。社会的迷惑行為として，吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折（1999）で使用された迷惑行為の一部に若干の修正を加えたものと日常繰り返される迷惑行為を追加した計 15 項目を用いた。向社会的行動として，菊池（1998）の向社会的行動尺度大学生版の一部に若干の修正を加えたものと，より一般的な向社会的行動を追加した計 12 項目を用いた。さらに，FCE が Ross et al.（1977）の設定した新奇であいまいな状況においても生じていることを確認するため，統制項目として，Ross et al.（1977）で利用された正誤のあいまいな判断・行動や，自己の選択した行動に明白な正答のない判断・行動を 8 項目作成した。

（1）行動判断：社会的迷惑行為と向社会的行動について「することがある」「することはない」の 2 件法で回答するように求められた。また，統制項目 8 項目に対しても「思う」「思わない」や「考える」「考えない」といった 2 件法で回答を求められた。

（2）合意性の推定：各項目について，「一般的に，他の人は自分と同じ判断・行動をすると思いますか」との教示のもと，その割合を 0～100%の範囲で回答を求められた。同時に，回答の合理性を確認するために，自分と異なる判断・行動する人の割合も 0～100%の範囲で回答し，両推定の和が 100%とするように求められた。

（3）仮想的有能感尺度：Hayamizu et al.（2004）で作成された仮想的有能感尺度，11 項目（e.g.,「話し合いの場で，無意味な発言をする人が多い」「世の中には，常識のない人が多すぎる」）を使用し，5 件法で回答を求められた。

3.2.3　研究2の結果

分析には回答に不備のなかった 205 名（男性 111 名，女性 92 名，不明 2 名）を以下の分析に使用した。さらに，6 項目については，参加者の行動判断選択が「することがある」「することはない」のどちらか一方に 90%以上の高い割合で偏ったため，以下の分析から除外した。本研究で用いた統制項目については，8 項目中 7 項目で FCE の生じていることが確認された（Table 3.1）。

Table3.1 統制項目に対する行う者・行わない者の合意性推定の割合と標準偏差および t 検定結果

	する人推定		
	行う者	行わない者	t 値
死について考える	72.99 (22.66) 181	49.75 (21.76) 24	4.74 ***
2030年までに地球外生命が発見されると思う	51.35 (20.63) 55	36.73 (18.87) 150	4.79 ***
大勢でいるよりも，一人でいる方が好きだ	43.75 (17.34) 108	41.66 (13.94) 97	0.96
10年以内に女性の首相が誕生する	57.52 (16.04) 89	36.40 (16.98) 116	9.04 ***
石油が枯渇する前に，代わりとなるエネルギーが開発される	63.50 (15.87) 166	42.87 (16.98) 39	7.21 ***
犬と猫，どちらが好きですか	57.06 (9.53) 120	54.22 (10.07) 85	2.05 *
老後に，年金をもらえると思う	59.12 (18.89) 144	40.13 (17.26) 61	6.75 ***
自分の健康について心配する	78.64 (14.88) 176	64.24 (19.88) 29	3.73 ***

注1） 上段：平均値，（ ）内は標準偏差　下段：N
注2） *** $p < .001$，** $p < .01$，* $p < .05$

仮説ごとの結果を以下に示す。

［仮説 1］

Ross et al.（1977）の分析方法に従って，項目ごとに，社会的行動を行う者と行わない者による当該行動を「する人の割合」推定について t 検定を行った。社会的迷惑行為 12 項目と向社会的行動 10 項目の計 22 項目中 19 項目で FCE の生じていることが明らかとなった（Table 3.2）。これにより，社会的迷惑行為や向社会的行動といった社会的行動においても，合意性を多く推定していることが明らかとなった。つまり，先行研究と同様に FCE が生じていることが示された。

Table3.2 行う者・行わない者の判断課題に対する合意性推定の割合と標準偏差および t 検定結果

			する人推定		
			行う者	行わない者	t 値
社会的迷惑行為	1	ゴミのポイ捨てをする	63.13 (24.65) 39	37.13 (17.90) 166	6.21 ***
	2	赤信号のときに横断歩道を渡る	63.08 (20.87) 155	37.74 (20.53) 50	7.49 ***
	3	授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	72.30 (20.07) 151	47.09 (18.71) 54	8.06 ***
	4	メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	66.33 (19.44) 126	44.58 (21.99) 79	7.20 ***
	5	歩道を自転車で走行する	86.25 (13.63) 183	57.05 (25.06) 22	5.37 ***
	6	駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める	64.49 (17.86) 130	41.15 (18.14) 75	8.96 ***
		図書館で借りた本を貸出期限を過ぎても返さない	44.17 (19.78) 64	24.23 (17.45) 141	7.27 ***
		電車やバスなどの車内で，友だち同士大きな声でおしゃべりをする	59.31 (18.31) 102	40.46 (15.14) 103	8.04 ***
		ごみ収集日以外にゴミを出す	48.71 (19.80) 21	27.94 (17.92) 184	4.98 ***
		音楽や映画などを不正にコピーしたり，ダウンロードしたりする	67.42 (21.40) 118	45.59 (23.46) 87	6.93 ***
		電車の中やレストランなどで，携帯電話で話をする	54.44 (21.00) 63	35.87 (17.66) 142	6.55 ***
		他人の自転車を倒したときに，倒したままにしておく	54.25 (15.16) 44	38.65 (16.59) 161	5.63 ***
向社会的行動	7	子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る	64.05 (16.00) 161	42.30 (17.68) 44	7.81 ***
	8	ボランティアに参加する	40.43 (15.49) 61	39.81 (17.63) 144	0.24
	9	環境のことを考えて，エコバッグを利用する	63.47 (17.28) 133	48.90 (15.87) 72	5.92 ***
	10	知らない人でも困っている人がいると助ける	48.58 (19.02) 120	40.13 (18.62) 85	3.16 **
	11	後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	50.95 (19.86) 98	35.68 (18.29) 107	5.73 ***
	12	おつりが多かったときに，それを伝える	58.54 (21.42) 127	34.82 (20.46) 78	7.83 ***
	13	見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる	65.97 (16.91) 182	51.35 (15.03) 23	3.95 ***
		ゴミの分別をする	69.80 (16.79) 183	55.55 (19.29) 22	3.70 ***
		バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	50.24 (18.66) 164	46.32 (23.00) 41	1.15
		体調が良いときは，献血に協力する	30.92 (19.07) 26	35.17 (19.50) 179	1.04

注1） 上段：平均値，（ ）内は標準偏差　下段：N
注2） *** $p < .001$，** $p < .01$，* $p < .05$
注3） 番号のある項目を弁別力の高い項目として，後の分析に利用した。

次に，社会的迷惑行為もしくは向社会的行動のどちらかに弁別力の高い項目を抽出するため，分析に使用した 22 項目に対し，多重コレスポンデンス分析を実施した（Figure 3.2）。コレスポンデンス分析の結果から社会的迷惑行為として弁別力の高い 6 項目（α = .78）と向社会的行動として弁別力の高い 7 項目（α = .81）を選び，これらの項目群に対しても合意性を多く推定しているかを明らかにするための分析を行った。

社会的迷惑行為 6 項目の中でその行為を「することがある」を選択する率の高い者を社会的迷惑行為の「高傾向者」，低い者を「低傾向者」とし（M = 3.8 で高低に群分け），同様に，向社会的行動についても 7 項目中でその行動を「することがある」の選択率の高い者を向社会的行動の「高傾向者」，低い者を「低傾向者」とした（M = 4.3 で高低に群分け）。これら行動傾向別による合意性推定の平均値と標準偏差を Table 3.3 に示す。迷惑行為の高傾向者と低傾向者が推定する迷惑推定の t 検定，および向社会的行動の高傾向者と低傾向者が推定する向社会推定の t 検定をそれぞれ行ったところ，高傾向者の方が低傾向者よりも割合を有意に高く推定していた（t (203)= 9.21, p < .001，t (203)= 4.99, p < .001）。このことから，社会的評価を受けやすい社会的行動（社会的迷惑行為と向社会的行動）においても，合意性を多く推定していることが明らかとなった。つまり, FCE は個別項目ごとだけでなく行動傾向群においても生じていることが明らかとなった。以上のことから，仮説 1 は支持されたと考えられる。

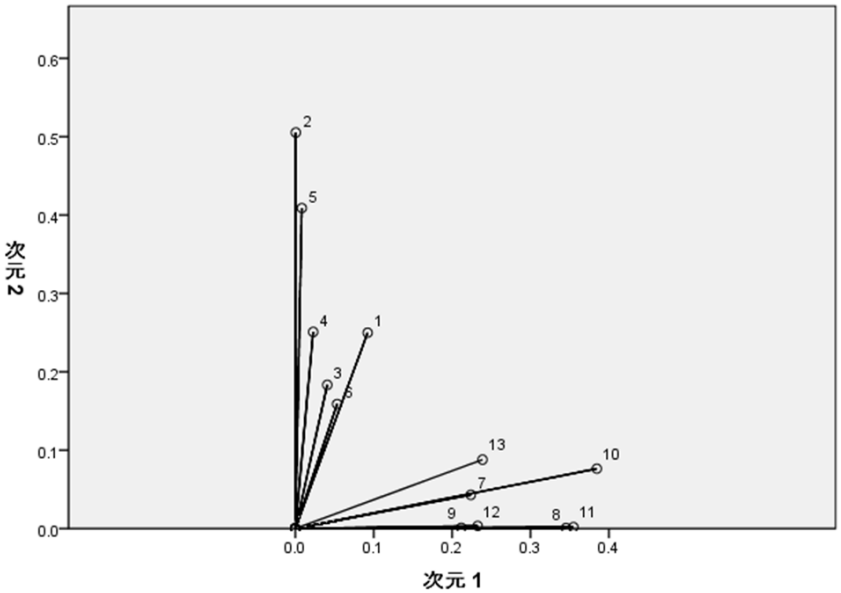


Figure 3.2　多重コレスポンデンス分析の判別測定結果

Table 3.3　行動傾向別，迷惑推定と向社会推定の平均値・標準偏差

		迷惑推定	向社会推定
社会的迷惑行為	高傾向	65.16	51.52
	n ＝134	(9.73)	(9.01)
	低傾向	51.11	51.23
	n =71	(11.52)	(11.49)
向社会的行動	高傾向	59.94	54.94
	n =95	(11.54)	(9.14)
	低傾向	60.66	48.38
	n =110	(13.02)	(9.58)

注）上段：平均値　　下段（　）：標準偏差

［仮説 2］

仮説 2 を検証する際，社会的迷惑行為の高傾向者が見積もる迷惑推定と向社会的行動の高傾向者が見積もる向社会推定は,母集団が異なるため直接比較することはできない。そこで，ネガティブもしくはポジティブな行動の行動傾向が合意性推定に与える影響の強弱を検討することで間接的にではあるが仮説 2 の検証を試みた。社会的迷惑行為と向社会的行動それぞれの行動傾向が迷惑推定と向社会推定に与える影響の強さを検討するため，共分散構造分析を行った。Amos 7.0 for Windows を使用し，Figure 3.3 のモデルに従って分析を実施した。結果，迷惑傾向から向社会推定，向社会傾向から迷惑推定のパスが有意ではないため，モデルからこれらのパスを削除し，モデルの再検討を行った。Figure 3.4 に示す最適モデルが得られた。モデルの適合度指標は，$\chi^2(2)=.960$（$p=.61$），$GFI=.998$，$AGFI=.988$，$CFI=1.000$，$RMSEA=.000$ であり，十分な適合度が示された。迷惑傾向から迷惑推定への直接効果は $\beta=.58$，一方，向社会傾向から向社会推定への直接効果は $\beta=.42$ であった。以上のことから，迷惑傾向が迷惑推定へ与える影響は向社会傾向が向社会推定に与える影響よりも強いことが示された。従って，仮説 2 は概ね支持されたと考えられる。

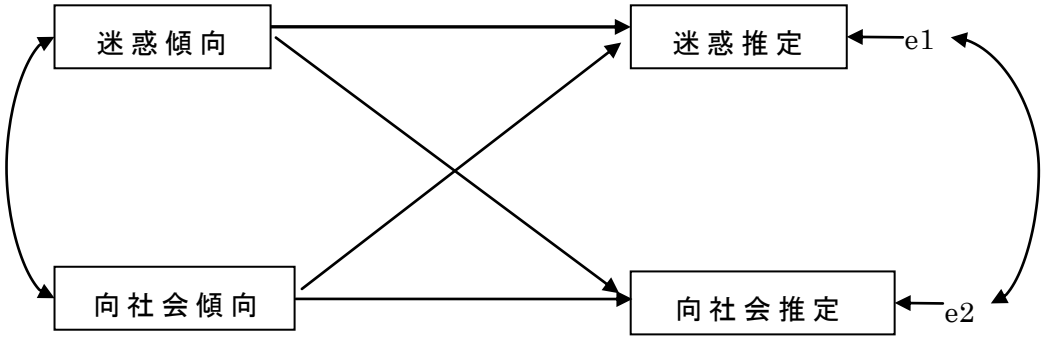


Figure 3.3　行動傾向が合意性推定に及ぼす影響過程の予測図

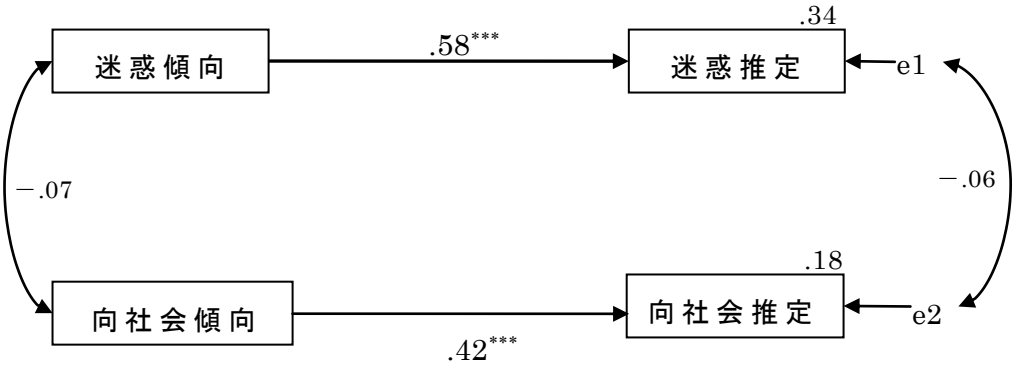


Figure 3.4　合意性推定に及ぼす影響過程　（N= 205）

注 1）** $p < .01$, *** $p < .001$
注 2）変数，右上の数字は決定係数

［仮説 3-1，3-2］

まず，仮想的有能感 11 項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値の推移（3.52，1.46，1.01，0.90…）と解釈可能性から，先行研究同様に一因子として扱うこととする（α = .78）。次に，迷惑推定と向社会推定に対して，仮想的有能感が与える影響を検討するため共分散構造分析を行った。Figure 3.1 に示す仮説モデルに従って分析を行った結果，Figure 3.5 に示す最適モデルが得られた。モデルの適合度指標は，$\chi^2(2)=.324$ ($p=.85$)，$GFI=.999$，$AGFI=.995$，$CFI=1.000$，$RMSEA=.000$ であり，十分な適合度が示された。なお，Figure 3.5 は煩雑さを避けるために誤差変数を表記していない。仮想的有能感は社会的迷惑行為傾向に正の影響を与えると考えていたが，パス係数は $\beta=-.01$ （p = .94）で有意ではなかった。しかし，他のパスについては全て有意であり，かつ，その正負は予測どおりで，仮想的有能感は迷惑推定に正，向社会傾向および向社会推定には負の影響を与え，迷惑傾向および向社会傾向はそれぞれ迷惑推定・向社会推定に正の影響を与えていることが明らかとなった。以上のことから，仮説 3-1 は支持され，仮説 3-2 は一部支持されたと考えられる。

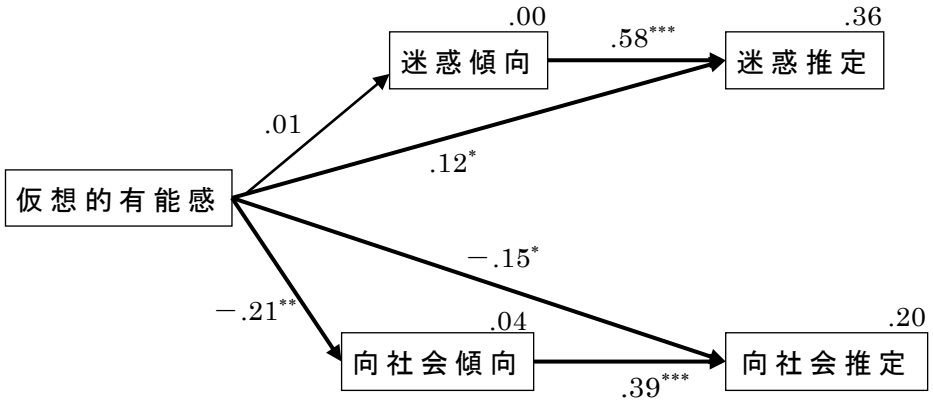


Figure 3.5　合意性推定および行動傾向へ及ぼす影響過程（N= 205）

注 1）* p < .05，** p < .01，*** p < .001
注 2）変数，右上の数字は決定係数

3.2.4　研究2の考察

本研究では,社会的な評価を受けやすい行動である社会的迷惑行為や向社会的行動(社会的行動）に対しても FCE が生じていることを確認し，さらに，その発生メカニズムとして，あいまいな状況の解消や自己の判断の利用可能性だけでなく，自我防衛的動機づけによる正当化の存在を明らかにするとともに，仮想的有能感の合意性推定への影響について検討した。

先行研究同様に，社会的行動（Table 3.2 の社会的迷惑行為と向社会的行動）についても FCE の生じていることが明らかとなった。このことは，FCE の頑健さを確認するとともに，新奇であいまいな状況だけでなく，日常的に繰り返される社会的行動に対しても FCE が生じることを示している。さらに，社会的迷惑行為と向社会的行動の高傾向者・低傾向者では，高傾向者の方が低傾向者に比べ，自分と同じようにその行動をする人を多く推定していた。したがって，仮説 1 は支持されたと考えられる。行動傾向の影響は，社会的迷惑行為と向社会的行動の両方で同様に見られ，当該行動を行いやすい傾向の高い者は低い者に比べ，自分と同じ行動をする人を多く推定していた。迷惑行為にしても向社会的行動にしても，その行動を行いやすい傾向の者は，自分がよく行う行動と同じ行動を他者も行うと考えていることが推測される。

次に，社会的迷惑行為と向社会的行動それぞれの行動傾向が迷惑推定と向社会推定に及ぼす影響を検討した。社会的迷惑行為傾向は迷惑推定に，向社会的行動傾向が向社会推定に影響していることが示された。迷惑傾向が迷惑推定へ及ぼす影響（β= .58）は向社会傾向が向社会推定へ及ぼす影響（β= .42）よりも強く，決定係数も.34 と.18 で迷惑傾向から迷惑推定への説明率の方が高かった。つまり，迷惑行為をする傾向の高い者は迷惑推定を，向社会的行動をする傾向の高い者は向社会推定を多く推定しているが，行動傾向が合意性推定に及ぼす影響力については社会的迷惑傾向の方がより強いことが示されたといえる。これにより，仮説 2 を支持する証左が示唆された。すなわち，迷惑行為の高傾向者は，ネガティブな行為を行っていることに対する正当化への動機づけが高いため，社会的迷惑行為においてより影響力が強かったと推測される。合意性を多く推定することは，自分を多数派であると認知していることだと言い換えることができる。Illusory Correlation（錯誤相関）の研究において，多数派（大集団）を優れた集団，少数派（小集団）を劣った集団と認知する判断傾向（白井，1979）や集団サイズと集団の好ましさとの関連（杉森, 1993, 1995）が示されている。それ故，多数派であることが，

自分の判断行動を正当化する裏付になると考えられる。要するに，迷惑行為を行いやすい傾向の者は，自分の判断・行動と同じ他者を多く推定し，自分を多数派であると思うことで自分の判断・行動の正当化を行っていると考えられる。研究 2 では，仮説 1 で FCE が生じていることが明らかとなり，さらに仮説 2 において社会的にネガティブな評価を受けやすい迷惑行為について行動傾向の影響が強く示されたことから，FCE の生じるメカニズムとして自己判断の利用可能性だけでなく，自我防衛的動機づけによる正当化も影響を与えていることが示唆された。

最後に，社会的行動に対する仮想的有能感の影響は，社会的迷惑行為と向社会的行動で異なることが明らかとなった。迷惑推定については仮想的有能感から直接正の影響が示され，向社会推定については直接効果として負の影響が，間接効果として向社会傾向を経由しても示された。これらの結果から，仮説 3-1 は支持され，仮説 3-2 は部分的に支持されたと考えられる。すこし飛躍した言い方をすれば，仮想的有能感の高い者は，向社会的行動のようにポジティブな評価を受けやすい行動をする人は少数であり，多くの人はそのような行動は行わないと推定することで他者を見下し，自己の保全を図っていると考えられる。しかし，社会的迷惑行為については仮想的有能感からの直接的影響は認められたが，仮想的有能感と迷惑傾向の関連は見出されなかった。これは，社会的迷惑行為といったネガティブな行動を行うことのインパクトの強さを示している。つまり，仮想的有能感の高低に関わらず，迷惑行為を行いやすい傾向の者は自分のネガティブな判断・行動の正当化や迷惑行為のインパクトの強さから，社会的迷惑行為をする人を多く推定することが考えられる。

3.3　ドライバーの交通ルールやマナーに対する意識が合意性推定に及ぼす影響（研究3）

3.3.1　研究3の目的

研究2で取り上げた社会的評価を受けにくい判断課題に対する自分の判断・行動の回答は，社会的望ましさの影響を受けることが予測されたため，研究2では「することがある」「することはない」の2件法を用い，回答への抵抗感に配慮した。しかし，ネガティブな行動を行ったことが明確になっている者を調査することで自分の「行動」に対する合意性推定をより正確に検討することが可能であると考えられた。そこで，研究3では，より実際的な場面におけるネガティブな行動を検討するため，ドライバーに焦点をあてる。その中でも，自動車運転免許停止処分という行政処分を受けたドライバー（以後，違反運転者と呼ぶ）と行政処分を受けていないドライバー（以後，一般運転者と呼ぶ）を比較する。ドライバーの交通行動に対する合意性推定を検討することにより，現実場面に即したネガティブ行動に対する合意性推定の検討が可能となると考えられる。

運転免許停止処分者講習

研究3で扱う違反運転者は，運転免許停止処分を受け，かつ，運転免許停止処分者講習を受講した者である。講習を受講するかどうかは任意であるが，費用は自己負担となる。講習期間は最大2日間で，運転免許停止期間別に短期・中期・長期のクラスが存在する。このように，受講者は，金銭的時間的に多大なコストを払う必要がある。しかし，受講すれば免許停止期間を短縮できるメリットがあるため，毎年多くの者が受講する。平成22年度には，免許停止処分者約47.5万人中39万人に達している（警察庁，2011）。また，免許停止処分は行政処分であり，軽微な違反の蓄積から重大な違反まで，種々の違反行為を行ったことで停止処分を受けている。

交通行動におけるネガティブ行動およびポジティブ行動

我々が自動車を運転するには，自動車運転免許証を取得し，さらに道路交通法（昭和35年6月25日制定，法律第105号）に従わなければならない。法定速度が決められ，一旦停止や一方通行など，交通上のルールが法規範として定められている。そのため，交通法規に則していない運転行動は，社会的にネガティブな評価を受けやすくなる。しかしながら，法定速度を厳守している者や黄色信号で交差点に進入した経験のない者は皆無であろう。交通法規に厳格に沿った行動を取り続けることは困難を伴う。なぜなら，多

くの自動車が行き交う中で，ドライバーのおかれている状況は非常に変わりやすいものだからである。危険を回避するためには，ドライバーは交通法規のみならず，状況に則した運転をすることが求められる。このことから，交通行動には明文化されていない，慣習的なルールやマナーが多く存在していると言える。たとえば，思いやりの気持ちで進路を譲る（新井，2001）といった向社会的行動がマナーとして挙げられる。また，交通行動は自動車社会である日本において，社会的に重要な行動である。そのため，ポジティブやネガティブといった社会的な評価を受けることが考えられる。そこで，研究3では，交通法規に捉われず，慣習的なルールやマナーを含めた交通行動を取り上げる。

社会的にネガティブな評価を受けやすい交通行動（以後，ネガティブ行動と呼ぶ）として，交通法規に反した行動が考えられる。例として，信号を守らない，速度違反をする，飲酒運転をするなどがあげられる。交通法規に反した行動は，必然的に，ネガティブな社会的評価を受けやすい。しかし，社会的望ましさ（Edwards, 1953）の影響から，交通法規に反した経験を自己報告し，さらに，違反行為の合意性を推定するには，抵抗があろう。たとえば，一旦停止で停車しないことは，交通法規違反であることから，止まらなかった経験の報告に躊躇することが考えられる。そこで，交通量の少ないことを状況として設定することによって，一旦停止で停車しなかった経験を報告しやすくする。このように，研究3では，交通法規の違反行為に状況を設定し，日常的な行動に則したものとしてネガティブ行動を扱う。具体的には，「一旦停止場所でも止まっていなかった」といった行動に，「交通量が少ない道では」という状況を設定する。これにより，交通法規に反し，社会的にネガティブな評価を受けやすい行動であるが，自己報告しやすくなると考えられる。

一方，交通法規に則した交通行動は，社会的にポジティブな評価を受けやすい行動（以後，ポジティブ行動と呼ぶ）である。交通法規に則した行動である「赤信号では停止する」を考えてみると，停止することでネガティブな評価を受けることは稀である。急停車などの限られた状況でしかネガティブな評価を受けることはない。しかしながら，赤信号で停止することは，原則，取らなければならない行動である。そのため，ポジティブな評価を受けるというより，当たり前な行動と言い換えることもでき，ポジティブな評価を受けにくいことが考えられる。また，交通法規に則した行動では，ネガティブ行動とは逆に，行っていないことを報告しづらくなることも考えられる。そこで，研究3では，交通法規に則した行動からではなく，慣習的なルールやマナーに沿った行動の中

から，ポジティブな社会的評価を受けやすいと考えられる行動をポジティブ行動として取り上げる。具体的には，「なかなか店舗から出られない車のために減速する」「ブレーキランプの故障や半ドアの車を見かけたら教える」といった行動で，交通行動における向社会的行動といえる。

交通ルールやマナーに対する意識

自動車社会には，交通法規が存在し，交通行動を規定している。さらに，多くの自動車が円滑かつ安全に走行するために，交通法規とは別に，望ましいとされる行動やマナーが存在する。社会集団において，望ましいとされる一般的な期待を社会規範という（Staub, 1972）ことから，交通行動におけるルールやマナーも，社会規範の一つということができる。近年，社会規範に対する意識の低下が指摘されており（文部科学省，2008），迷惑行為や非行行為の増加の要因であるといわれている。このようなことから，交通ルールやマナーに対する意識が，交通行動や合意性推定に影響を与えていることが考えられる。研究3では，交通ルールやマナーに対する意識の中でも，次の2つに焦点を当てる。1つに，交通ルールやマナーは守らなければいけない，守る必要のあることだとの意識を挙げる（以後，マナー遵守意識と呼ぶ）。マナー遵守意識は，交通ルールやマナーを守らなければならないものとし，規範を守ることに重きを置くと捉えることができる。さらに，交通ルールやマナーを守れないのは自分だけではない，守れないことは仕方がないとの意識を挙げる（以後，自己正当化意識と呼ぶ）。自己正当化意識は，交通ルールやマナーに従えないことへの言い訳と捉えることができる。

違反運転者は，ネガティブ行動を取り，社会的制裁である運転免許停止の行政処分を受けている。したがって，一般運転者と比べれば，マナー遵守意識は低いと考えられる。その遵守意識の低さが，ネガティブ行動の多さやポジティブ行動の少なさに影響していることが予測される。一方，一般運転者でも，交通ルールに反する行動を取ることはあるが，行政処分を受けるほどではない。したがって，マナー遵守意識は違反運転者より高いと考えられる。マナー遵守意識の高さは，ネガティブ行動の少なさやポジティブ行動の多さを生じさせていることが予測される。

一方で，我々は幼少期から交通安全教育を受け（警察庁，2011），交通ルールやマナーの遵守意識を育んでいる。また，子どもの道徳性や規則意識の発達に合わせた教育の必要性が指摘され（石川，2011；内山，2000），心身の発達段階に応じた教育が行われ

ている（内山，2008）。そのため，一般的に，ルールやマナーに反する行動はネガティブに評価される。違反運転者が，ネガティブな自らの行動を合理的に捉えるには，自己を正当化する意識を持つことが効率的であると考えられる。それゆえ，違反運転者は一般運転者に比べ，ネガティブ行動傾向が高いので，自己正当化意識を強く持つことが予測される。

ネガティブ行動とポジティブ行動の合意性推定

自分と同じ行動の人を多く推定する傾向については，その頑健性が指摘されている（Campbell, 1986; Kruger & Zeiger, 1993; Morrison & Matthes, 2011; Ross, et al., 1977; 田村，2010）。研究3においても，この傾向が示され，ネガティブ行動およびポジティブ行動に対する合意性推定は，行動傾向によって影響を受けると考えられる。先述したように，一般運転者に比べ違反運転者の方が，ネガティブ行動傾向が高く，ポジティブ行動傾向が低いと考えられる。したがって，違反運転者は，一般運転者よりもネガティブ行動の合意性を高く推定することが予測される。また，一般運転者の方が，違反運転者よりもポジティブ行動の合意性を高く推定することが予測される。

また，交通ルールやマナーに対する意識によっても合意性推定は影響を受けると考えられる。研究3では，マナー遵守意識と自己正当化意識が合意性推定に与える影響をそれぞれ検討する。

まず，マナー遵守意識は，違反運転者と比べた場合，一般運転者の方が高いと考えられる。一般運転者は，自らはルールやマナーに則した行動を取っていることから，マナー遵守意識がポジティブ行動の合意性推定に強い正の影響を与える。一方，一般運転者は，自己の行動を基準として，ルールやマナーに反した行動を取る違反運転者のような者を一般的には少ないと考えるであろう。そのため，ネガティブ行動の合意性推定には，マナー遵守意識が負の影響を与える。

次に，自己正当化意識は，ルールやマナーに従えないことに対する自己肯定であることから，ポジティブ行動よりもネガティブ行動に与える影響の方が顕著であると考えられる。違反運転者は，ネガティブ行動を続けていた自らの行動を正当化するため，ネガティブ行動を一般的に多くの人が行っていると考える。したがって，ネガティブ行動の合意性推定に強い正の影響を与える。一方，一般運転者は，違反運転者に比べて，ルールやマナーに則した行動を取る。したがって，ネガティブ行動の合意性推定に，自己正

当化意識はそれほど強い影響を与えないであろう。

以上のように，交通ルールやマナーに対する意識は，違反運転者と一般運転者によって異なり，自動車運転時の行動傾向や，交通行動に対する合意性推定に与える影響も異なることが考えられる。そこで，Figure3.6，3.7のモデルを設定する。違反運転者と一般運転者で，ルールやマナーに対する意識が行動傾向や合意性推定に与える影響の違いを検証する。具体的には，違反運転者は自己正当化意識の影響を，一般運転者はマナー遵守意識の影響を強く受けることが考えられる。

以上のことから，次の5つの仮説を設定する。

仮説1-1　違反運転者は，一般運転者よりもネガティブ合意性推定が高い。

仮説1-2　一般運転者は，違反運転者よりもポジティブ合意性推定が高い。

仮説2-1　違反運転者は，ネガティブ行動傾向およびネガティブ合意性推定に自己正当化意識の正の影響を受ける。

仮説2-2　一般運転者は，ポジティブ行動傾向およびポジティブ合意性推定にマナー遵守意識の正の影響を受ける。

仮説2-3　一般運転者は，ネガティブ行動傾向およびネガティブ合意性推定にマナー遵守意識の負の影響を受ける。

注）仮説 2-1，2-2，2-3 は Figure3.6，3.7 を参照

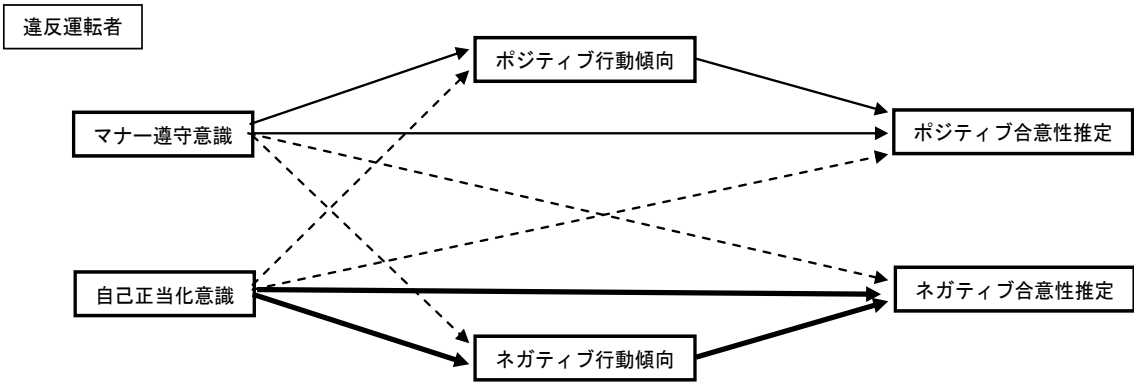


Figure 3.6　違反運転者のルールやマナーに対する意識が行動傾向および合意性推定に及ぼす影響の予測図

注）実線は正，破線は負の影響を示し，太さは影響の強さを表す

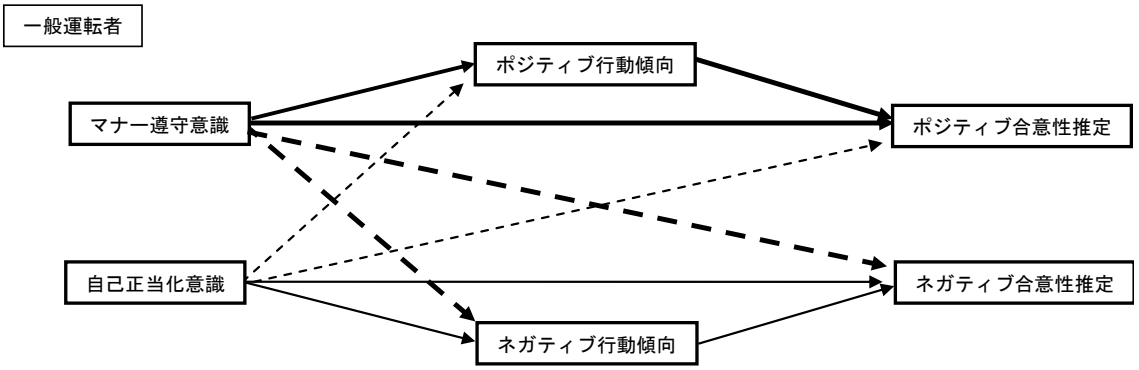


Figure 3.7　一般運転者のルールやマナーに対する意識が行動傾向および合意性推定に及ぼす影響の予測図

注）実線は正，破線は負の影響を示し，太さは影響の強さを表す

3.3.2　研究3の方法

調査協力者：調査協力者は，日常的に自動車を運転する244名（女性83名，男性161名）。平均年齢は，44.05歳（*SD* = 14.36）であった。このうち，回答に不備のなかった203名を以下の分析に使用した。違反運転者は，愛知県内の交通安全講習所において運転免許停止処分者講習を受講した101名（女性14名，男性87名，平均年齢40.24，*SD* = 11.25，平均運転歴20.92年，年間平均走行距離23,103km）であった。一方，一般運転者は，東海地方（愛知県内多数）に住む大学生およびその親族や知り合いで，日常的に自動車を運転している102名（女性54名，男性48名，平均年齢47.47，*SD* = 10.31，平均運転歴26.30年，年間平均走行距離9,302km）であった。

質問紙の構成：「交通ルールやマナーに関する調査」と題した質問紙に回答した。交通行動におけるネガティブ行動10項目とポジティブ行動10項目，計20項目を用いた。ネガティブ行動は，3大違反とされている「信号無視，飲酒運転，スピード違反」（藤本・東・内山・坂口・山口・神田・高木・今井・榎本・喜田，2004）を含め，作成した。

（1）行動判断：当該行動について，自らの行動を「気をつける」「 気をつけない」や「駐車する」「駐車しない」といった2件法で回答を求められ。

（2）合意性の推定：各項目について，「一般的に他の人は自分と同じように行動すると思いますか」との教示のもとに，自分と同じ行動をする人の割合を0～100%の範囲で回答を求められた。自分と異なる判断の人の割合との和が100%となるように求められた。

（3）交通ルールやマナーに対する態度や意識：交通行動と交通ルールやマナーに対する態度や意識の項目は，大学院生3名および交通安全講習所職員の協力を得て，選定・作成を行った。交通ルールやマナーに対する態度や意識について，5件法（よくあてはまる－まったくあてはまらない）で回答を求められた。

調査実施方法：違反運転者に関しては，運転免許停止者処分講習の実施場所である交通安全講習所で行った。短期・中期・長期クラスすべてで調査用紙を配布した。また，倫理的な問題から受講クラスについては確認を取っていない。講習受講後，調査用紙を配布し，任意での協力を求めた。さらに，同封した封筒での調査用紙の送付および謝礼返

送用のラベルシールへの記入を依頼した。一般運転者に関しては，大学生を通じ，調査参加者に手渡しで配布した。違反運転者，一般運転者ともに，調査用紙は後日郵送にて回収し，500円のQUOカードを謝礼として返送した。なお，調査用紙の配布数（回収率）は，違反運転者400名（32%），一般運転者220名（53%）であった。

3.3.3　研究3の結果

交通ルールやマナーに対する態度や意識（9項目）に対して因子分析を行い（最尤法，プロマックス回転），固有値の推移（2.95，1.58，0.85）および解釈可能性から2因子解を採用した（因子間相関 =.18，累積寄与率40.62%）。項目内容から，第1因子を「マナー遵守意識（5項目）」（α = .80，M = 4.23 ，SD = .50），第2因子を「自己正当化意識（4項目）」（α = .57，M = 3.29 ，SD = .63）と命名した。自己正当化意識の α が若干低いが，項目内容と，自らを正当化することが合意性推定に与える影響の検討という問題意識から，以後の分析に使用した。交通ルールやマナーに対する意識の項目別の平均値と標準偏差をTable 3.4に示す。さらに，違反運転者と一般運転者の交通ルールやマナーに対する意識の平均値と標準偏差をTable 3.5に示す。

Table 3.4　交通ルールやマナーに対する意識尺度の平均値・標準偏差

	平均値	標準偏差
マナー遵守意識		
交通ルールやマナーを守らないことは悪いことだと思う	4.53	.62
交通ルールやマナーを守らない人がいると不快だ	3.96	.72
交通ルールやマナーには従うべきだと思う	4.37	.66
交通ルールやマナーを守ることは大切なことだと思う	4.47	.63
交通ルールやマナーを守る方だ	3.82	.74
自己正当化意識		
自分が交通ルールやマナーを守れない状況では，自分と同じように他の人も守れない	3.24	.98
交通ルールやマナーを守れないことがあっても，しょうがない	2.60	1.08
交通ルールやマナーを守らない人はたくさんいる	3.75	.91
自分よりも交通ルールやマナーを守らない人は多い	3.57	.84

$N = 203$

Table 3.5　違反運転者と一般運転者のマナー遵守意識と自己正当化意識の平均値・標準偏差

	違反運転者	一般運転者
	$n = 101$	$n = 102$
マナー遵守意識	11.75	12.54
	(1.77)	(1.42)
自己正当化意識	10.89	10.22
	(2.05)	(1.84)

注）（　）内，標準偏差

ポジティブ行動，ネガティブ行動として，項目内容から各々10項目ずつ設定した。さらに，調査参加者の評定値から，ネガティブ行動やポジティブ行動として弁別力の高い項目を抽出するため，多重コレスポンデンス分析を行った。これら20項目の多重コレスポンデンス分析の結果から，ネガティブ行動として弁別力の高い9項目（$\alpha = .83$）とポジティブ行動として弁別力の高い6項目（$\alpha = .75$）を抽出した（Figure3.8）。以後の分析では，これらの項目をネガティブ行動傾向（9項目），ポジティブ行動傾向（6項目）として使用する。詳しい項目内容については，Table 3.6に示す。多重コレスポンデンス分析の結果，ネガティブ行動傾向の中に，項目内容からポジティブ行動として設定していた項目が2つ含まれていた。これら2項目は，分析結果に従い，ネガティブ行動として捉えられるように処理した。Table3.7には，ネガティブ行動・ポジティブ行動に対する一般運転者と違反運転者の合意性推定の平均値と標準偏差を示す。

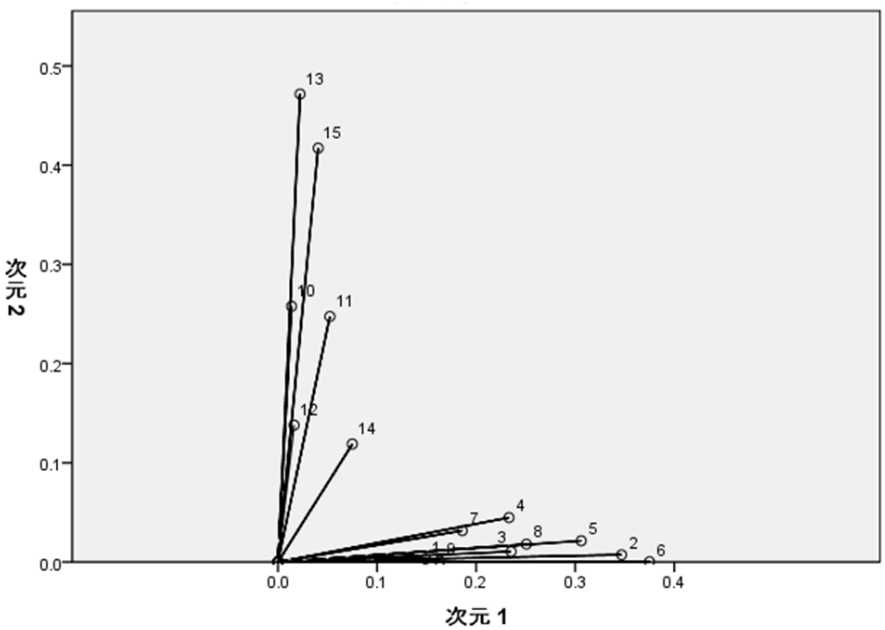


Figure 3.8　多重コレスポンデンス分析の判別測定結果

Table 3.6　多重コレスポンデンス分析によるネガティブ行動・ポジティブ行動の分別結果

≪ネガティブ行動≫

1　通行量が少ない道では，一旦停止場所でも止まっていなかった

2　運転中でも，ケータイが鳴れば出ていた

3　追い越し禁止車線でも，前の車が遅いときには追い越しをしていた

4　一般道でも 20 キロオーバーのスピード違反をしていた

5　前の車がとても遅いときには，あおっていた

6　後続車両がないときにはウインカーを出さずに車線変更をしていた

7　駐車禁止の場所でも，急いでいるときは駐車していた

8　直ぐに終わる用事であっても，店舗前に駐車しないで，専用駐車場に駐車する

9　駐車場が混雑していても車椅子マークの駐車スペースには絶対に駐車しない

≪ポジティブ行動≫

10　対向車線の右折車のために後続車が渋滞している場合には，車を止め，右折させる

11　なかなか店舗から出られない車のために減速する

12　雨の日には歩行者に水しぶきがかからないよう気をつける

13　ブレーキランプの故障や半ドアの車を見かけたら教える

14　横断歩道ではないところを横断しようとしている歩行者のために，車を止めて，渡るのを待つ

15　ライトの消し忘れや付け忘れを見かけたら，合図して知らせる

Table3.7 ネガティブ行動・ポジティブ行動に対する一般運転者と違反運転者の合意性推定の平均値・標準偏差

	する人推定			
	違反運転者		一般運転者	
≪ネガティブ行動≫	肯定する人	肯定しない人	肯定する人	肯定しない人
通行量が少ない道では，一旦停止場所でも止まっていなかった	38.33 24(20.02)	33.42 77(18.50)	25.56 9(13.33)	35.02 93(21.38)
運転中でも，ケータイが鳴れば出ていた	28.56 73(16.74)	50.00 28(20.00)	33.76 45(18.66)	49.74 57(79.74)
追い越し禁止車線でも，前の車が遅いときには追い越しをしていた	51.81 31(22.35)	68.47 70(19.23)	40.39 13(22.59)	72.16 89(19.94)
一般道でも20キロオーバーのスピード違反をしていた	28.14 74(20.11)	57.37 27(15.83)	27.15 62(18.76)	61.40 40(17.88)
前の車がとても遅いときには，あおっていた	52.56 36(19.43)	64.15 65(18.69)	44.41 17(18.02)	66.05 85(18.10)
後続車両がないときにはウインカーを出さずに車線変更をしていた	45.52 33(19.08)	70.27 68(20.03)	45.00 12(17.84)	73.46 90(16.59)
駐車禁止の場所でも，急いでいるときは駐車していた	36.45 47(16.46)	66.74 54(18.24)	33.83 35(22.24)	65.70 67(19.96)
直ぐに終わる用事であっても，店舗前に駐車しないで，専用駐車場に駐車する	39.34 64(20.55)	58.95 37(15.26)	35.44 75(17.24)	68.22 27(17.52)
駐車場が混雑していても車椅子マークの駐車スペースには絶対に駐車しない	59.60 5(35.47)	78.50 96(16.62)	60.67 3(16.77)	75.47 99(20.15)
≪ポジティブ行動≫				
対向車線の右折車のために後続車が渋滞している場合には，車を止め，右折させる	50.69 83(20.98)	44.17 18(22.54)	47.26 65(20.12)	34.19 37(19.91)
なかなか店舗から出られない車のために減速する	54.03 78(21.05)	34.61 23(15.46)	52.37 71(18.57)	25.65 31(15.37)
雨の日には歩行者に水しぶきがかからないよう気をつける	61.00 89(19.32)	32.08 12(14.69)	60.08 93(20.08)	29.67 9(16.16)
ブレーキランプの故障や半ドアの車を見かけたら教える	44.12 42(20.50)	24.42 59(17.37)	51.04 27(19.38)	25.32 75(19.56)
横断歩道ではないところを横断しようとしている歩行者のために，車を止めて，渡るのを待つ	52.61 51(21.12)	29.28 50(15.82)	63.94 31(19.03)	22.51 71(15.15)
ライトの消し忘れや付け忘れを見かけたら，合図して知らせる	54.92 47(21.31)	38.80 54(21.09)	56.88 40(19.46)	33.94 62(24.35)

注1） 上段：平均値
注2） 下段：N，（ ）内は標準偏差

仮説ごとの結果を以下に示す。

［仮説 1-1，1-2］

自分と同じ行動の人を多く推定する傾向を確認するため，違反運転者と一般運転者による，ネガティブ合意性推定，ポジティブ合意性推定のt 検定を行った（Table 3.8）。ネガティブ行動について，一般運転者に比べ，違反運転者は有意に高く合意性を推定していることが示された（仮説1-1を支持）。ポジティブ行動について，一般運転者に比べ，違反運転者が有意に高く合意性を推定しており，仮説1-2を支持しなかった。ここで，違反運転者をネガティブ行動の高傾向者，一般運転者をポジティブ行動の高傾向者とみなすことが，妥当であるのかを検証するための補足的分析を行った。違反運転者と一般運転者によるネガティブ行動傾向，ポジティブ行動傾向のt 検定の結果をTable 3.9に示す。ネガティブ行動傾向は，違反運転者の方が一般運転者よりも高い行動傾向であった。しかし，ポジティブ行動傾向は，予測と異なり，違反運転者の方が一般運転者よりも高い行動傾向を示していた。

Table 3.8　ネガティブ合意性推定およびポジティブ合意性推定の違反運転者と一般運転者の平均値・標準偏差とt 検定結果

	違反運転者 n = 101	一般運転者 n = 102	t 値
ネガティブ合意性推定	43.96 (9.75)	39.99 (11.41)	2.67**
ポジティブ合意性推定	46.03 (11.98)	42.39 (13.61)	2.02*

注）** $p < .01$，　* $p < .05$，　（　）内　標準偏差

Table 3.9　ネガティブ行動傾向およびポジティブ行動傾向の違反運転者と一般運転者の平均値・標準偏差とt 検定結果

	違反運転者 n = 101	一般運転者 n = 102	t 値
ネガティブ行動傾向	4.47 (1.84)	3.13 (1.61)	5.51***
ポジティブ行動傾向	3.86 (1.44)	3.21 (1.41)	3.27***

注）*** $p < .001$，（　）内　標準偏差

［仮説2-1，2-2，2-3］

Figure3.6，3.7のモデルの検証のため，母集団を違反運転者と一般運転者とする構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を行った。モデルの適合度指標は，$\chi^2(4) = 4.25$，$p = .37$ ，$GFI = .993$，$AGFI = .927$，$CFI = .998$，$RMSEA = .018$あり，データに対する良好な当てはまりを示した。違反運転者は，ネガティブ合意性推定において，マナー遵守意識よりも自己正当化意識の影響を受けていることが明らかとなった（仮説2-1を支持）。一方，一般運転者は，マナー遵守意識や自己正当化意識よりも，行動傾向が合意性推定に影響を与えていることが示された（仮説2-2を不支持，仮説2-3を一部支持）。詳細については，Figure3.8とFigure3.9に示す。

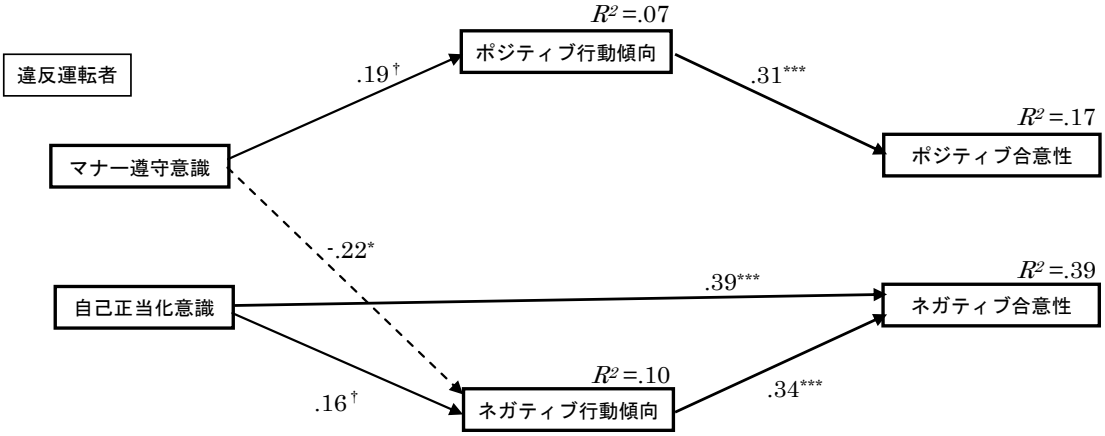


Figure 3.8　違反運転者を母集団とする分析結果（ $n = 101$）

注）実線＝正の影響，破線＝負の影響，$^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{***}p < .001$

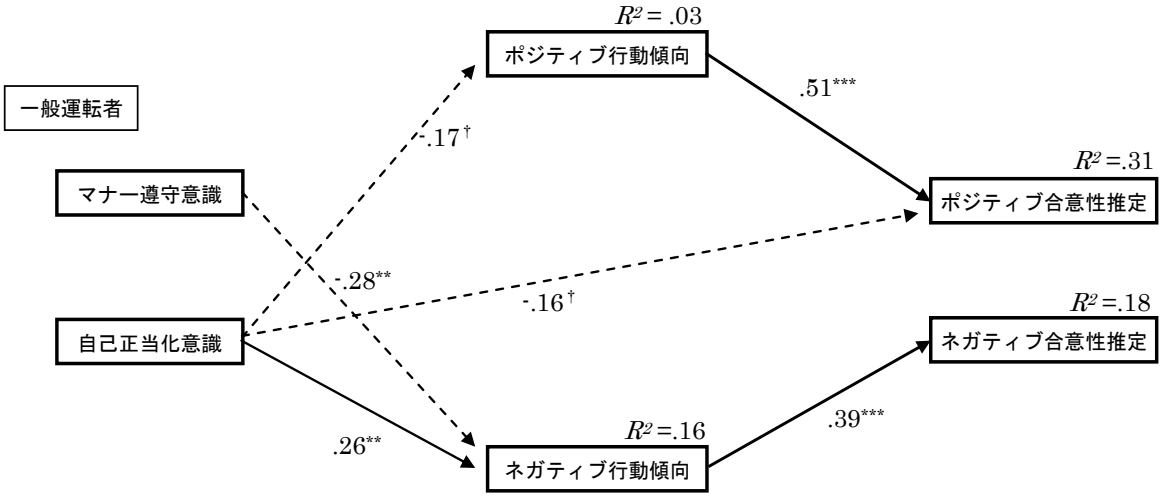


Figure 3.9　一般運転者別を母集団とする分析結果（ $n = 102$）

注）実線＝正の影響，破線＝負の影響，$^{\dagger}p < .10$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

3.3.4　研究3の考察

研究3では，社会的にネガティブな評価を受けやすい行動に対する合意性推定を検討するため，交通行動に焦点を当てた。構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を用い，交通ルールやマナーに対する意識が，違反運転者や一般運転者の行動傾向および合意性推定に与える影響を検証した。その結果，違反運転者と一般運転者では，マナー遵守意識と自己正当化意識の影響が異なっていた。

違反運転者と一般運転者の合意性推定

ネガティブ行動では，違反運転者は一般運転者に比べ，ネガティブ合意性推定が高か

った。つまり，違反運転者は，自らと同じようにネガティブ行動を行う人は多いと考えていることが明らかとなった。これは，仮説1-1を支持する結果であり，先行研究とも合致している。一方，ポジティブ行動では，違反運転者は一般運転者に比べ，ポジティブ合意性推定が高かった。これは，仮説1-2とは異なる結果である。しかし，補足分析の結果，ポジティブ行動傾向は，違反運転者が一般運転者よりも有意に高く，違反運転者がポジティブ行動を多く取っていることを示していた。したがって，違反運転者が，一般運転者よりもポジティブ行動の合意性を多く推定していたことは，自らと同じ行動の人を多く推定する傾向を示していたことといえる。つまり，先行研究と合致した結果といえ，この傾向の頑健性が確認されたということができる。

ルールやマナーに対する意識と行動傾向，合意性推定の関連

次に，違反運転者，一般運転者ごとにルールやマナーに対する意識と行動傾向，合意性推定の関連を検討していく。

違反運転者では，自己正当化意識がネガティブ行動傾向や合意性推定に影響を与えていた。これは，仮説2-1を支持する。違反運転者のネガティブ合意性推定は，ネガティブ行動傾向を介して正の影響を受けているだけでなく，自己正当化意識に強い影響を受けていることが明らかになった。つまり，違反運転者では，ネガティブ行動を行っていることだけでなく，ネガティブ行動を取る自分を正当化する意識が，合意性推定に強い影響を与えていたといえる。これにより，あいまいな状況（Marks & Miller, 1987; Ross et.al., 1977）や，自己の失敗をフィードバックされたことによる自我脅威状況（Sherman et al., 1984）での自己防衛的動機づけによる合意性推定が，日常的な行動（状況下）においても生じていると考えられる。一方，ポジティブ合意性推定には，マナー遵守意識が直接的に影響を与えておらず，行動傾向が正の影響を与えていた。しかし，マナー遵守意識はネガティブ・ポジティブ行動傾向に弱いながら影響を与えていた。つまり，マナー遵守意識は，ポジティブ行動を助長し，ネガティブ行動を抑制することを示唆している。このことから，「交通ルールやマナーを守らないことは悪いことだ」という意識を教育することは重要であると考えられる。幼い頃から交通安全教育を受け，マナー遵守意識を育むことには一定の意義があるといえる。

一般運転者では，マナー遵守意識の影響が強いと予測していた。しかし，マナー遵守意識は，ネガティブ行動傾向に負の影響を与えているのみであった。これは，仮説2-2を支持せず，仮説2-3の一部を支持した結果である。ポジティブ行動傾向へのマナー遵守

意識の影響は，一般運転者だけでなく，違反運転者でもあまり見られなかった。このことから，ドライバーは，ルールやマナーを守らなければならないとの意識からポジティブ行動を取っているのではなく，当然のこととして行っている可能性がある。また，合意性推定には，マナー遵守意識は直接的な影響を与えておらず，行動傾向が強い影響を与えていた。自らが当然のように行っている行動については，自己の行動を基準とし，周囲の他者も同じ行動を取ると考え，合意性を多く推定したことが考えられる。

マナー遵守意識は，違反運転者および一般運転者のネガティブ行動傾向に負の影響を与えており，マナーを守らなければいけないとの意識がネガティブ行動を抑制していると考えられる。つまり，マナー遵守意識を強くすることでネガティブ行動を減少させる可能性が見出せる。これは，従来，交通安全教育において実施されてきた「ルールやマナーを守ること」の教育が有効であることを示唆しており，マナー遵守の意識を育む教育が必要であるといえる。

3.4　第3章の全体的考察

第3章では，社会的評価が合意性推定に及ぼす影響について検討した。研究2では，ネガティブやポジティブといった社会的評価を受けやすい判断や行動を合意性推定の課題として取り上げた。研究3では，より実際的な検討を行うためにドライバーを対象として，運転場面におけるネガティブ・ポジティブといった社会的評価を受けやすい判断・行動について合意性を推定した。ここでは，研究2と3で明らかとなったそれぞれの研究の問題点について述べたい。

研究 2 では，社会的評価がネガティブな行動の誤った合意性推定の発生メカニズムとして，あいまいな状況の解消や自己の判断の利用可能性だけでなく，自我防衛的動機づけによる正当化の存在を明らかにすることを目的としていた。しかしながら，調査協力者に合意性推定の根拠を問う設問を何ら設けていなかった。そのため，合意性を多く推定していることが自分の判断や行動を正当化したことによるのかは正確に特定することはできない。結果として，その可能性を示唆したに過ぎず，今後の検討課題である。また，実際の割合との乖離が小さい合意性推定を「誤り」として捉えることに対する問題点が指摘されている（Krueger & Zeiger, 1993）が，研究 2 では実際の割合との検討は

できなかった。しかし，研究 2 で扱った社会的評価を受けやすい判断・行動においても，実際の割合との乖離がネガティブな行動を助長し，さらには偏見や内集団ひいきへとつながる可能性も考えられる。たとえば，後部座席のシートベルト着用率や交通ルール・マナーに対する意識の低い人の合意性推定には実際の着用率との乖離が生じ，そのことが交通ルールに対する意識に影響を与えていることも考えられる。このため，今後，実際にその判断・行動に同意する者の割合（実際の判断・行動率）が統計資料として存在する場合に，その実際の数値と合意性推定値の乖離についても検討する必要がある。

研究3では，現実場面に即したネガティブ行動の合意性推定について検討することを目的としていた。そこで，社会的にネガティブな評価を受けやすい行動を多く経験しているであろう自動車の運転者に焦点を当てた。結果的に，運転免許停止処分者講習の受講者の協力により，貴重なデータを得ることができた。一方で，講習受講後の調査であったことから，講習により喚起された社会的望ましさが回答に与える影響や，周囲の受講者数を認知することによる合意性推定への影響が問題点として挙げられる。講習受講前に調査できれば問題は解決できるが，現実的には，講習制度および受講者のプライバシーなどの問題から，受講前段階の調査は不可能であった。また，このような調査上の制約のほかに，マナー遵守意識の影響が，一般運転者および違反運転者のポジティブ行動では見られなかったことも問題点として挙げられる。このことから，研究3のマナー遵守意識がドライバーの行動傾向や合意性推定に与える影響を捉えきれていないことも考えられる。しかしながら，このような制約の中においても，自らと同じ行動の者を多く推定する傾向の頑健性が示され，自己正当化意識のネガティブ合意性推定に与える影響といった一定の知見を得ることができた。

第 4 章
内集団 - 外集団が合意性推定に及ぼす影響

4.1　研究 4 の目的

研究 4 においても，引き続き，合意性推定課題の社会的な評価に焦点を当てる。合意性推定の対象を一般他者とした場合，社会的な評価を受けやすい社会的迷惑行為や向社会的行動の合意性を多く推定することが明らかにされている（研究 2)。たとえば,「赤信号の時に横断歩道を渡る人」は自分以外の人も信号無視をしていると認識していた。一方で, 内集団成員にはネガティブよりもポジティブな形容詞を当てはめ (ラベリング・バイアス), 外集団よりも内集団成員が望ましい行動を取ると期待 (究極的原因推論のバイアス)（Howard & Rothbart, 1980）し，内集団は外集団よりもポジティブに評価されること（Waldzus & Mummendey, 2004）が示されている。これらから，社会的な評価を受けやすい行為について，内集団－外集団を対象として合意性を推定した場合，偏見や内集団ひいき的な合意性推定が行われると考えられる。また，日常的な合意性推定に焦点を当てていることから，操作的に内集団－外集団を設定せずに実在の集団を用いることとする。

まず, 先行研究で明らかにされた FCE の頑健性を確認する。自らと同じように判断・行動する他者を多く推定する傾向は，本研究で扱う社会的行動においても，その頑健性が認められると考えられる（仮説 1)。また，一概には社会的評価（正誤）のつけにくいと考えられる判断 (信念的判断) についても, 社会的迷惑行為, 向社会的行動とともに, 統制項目として仮説 1 に関する検討を行う。

次に，社会的にネガティブな評価を受けやすいと考えられる社会的迷惑行為は，マイナスなイメージを与えることから，その行動を取るのは自分だけではないといった，一種の自己正当化や合理化のような動機づけが生じると考えられる。第 1 章の議論を踏まえて，社会的迷惑行為を多くする人は，内集団－外集団成員どちらにおいても，自らと同じ行動を多くの人も取ると推定することが予測される（仮説 2-1)。一方，社会的迷惑行為をあまりしない人は，自己正当化を動機づけられることもなく，内集団よりも外集団の評価を低くする方向，すなわち，外集団に社会的迷惑行為を多くする人が多いと推定することが予測される（仮説 2-2)。

社会的にポジティブな評価を受けやすいと考えられる向社会的行動は，社会的にプラスなイメージを与えることから，自分の判断・行動と内集団成員の判断・行動が同じでありたいとの動機づけも高くなることが考えられる。また，ポジティブな自己イメージが内集団ひいきに影響を与えている (Di Donato, Ullrich, & Krueger, 2011) ことから,

内集団成員に対しては合意性を多く，外集団成員に対しては合意性を少なく推定することで，内集団の優位性を高めようとすることが予測される。すなわち，自らと同じように向社会的行動を取るような者は，内集団には多いが，外集団には少ないと推定する。さらに，向社会的行動を行うことの少ない者は，社会的に望ましい評価を得られないかもしれないが，向社会的行動をあまり行わないことが自己正当化を動機づけるとは考えにくい。したがって，内集団，外集団に関わらず，向社会的行動を多くする人は，あまりしない人よりも合意性を多く推定すると考えられる（仮説 3)。

最後に，研究 4 では内集団－外集団を規定する要因の一つとして想定される集団同一視を取り上げる。集団同一視の高い者は，内集団の望ましい特徴を好意的に評価し，それによって，内集団への評価を高くしている。このことから，集団同一視は，人が望ましい特徴であるポジティブ行動（向社会的行動）について，内集団の合意性を推定するときは正の影響を与えることが予測される。一方，望ましくない特徴であるネガティブ行動（社会的迷惑行為）については，外集団に正の影響を与えることが予測される。つまり，社会的迷惑行為や向社会的行動の合意性推定には，そうした行動傾向の高さだけでなく，集団同一視の高さも影響を与えると考えられる（仮説 4)。

以上のことから，次の 5 つの仮説を検証する。

仮説 1：社会的評価を受けやすい社会的迷惑行為や向社会的行動，社会的評価の影響を受けにくい信念的判断において，自らと同じ判断・行動を選択する人は，選択しない人と比べ，合意性を高く推定する。なお，この仮説は想定される対象集団によって，同じかどうかを確認するためでもある。

仮説 2-1：社会的迷惑行為傾向の高い者は，低い者と比べ，内集団－外集団どちらに対しても合意性を高く推定する。

仮説 2-2：社会的迷惑行為傾向の低い者は，内集団よりも外集団の合意性を高く推定する。

仮説 3：向社会的行動傾向の高い者は，低い者と比べ，内集団－外集団どちらに対しても合意性を高く推定する。

仮説 4：集団同一視の高さは，社会的迷惑行為では外集団の合意性推定に正の影響を与え，向社会的行動では内集団の合意性推定に正の影響を与える。

4.2　方法

調査協力者　調査協力者は，E 大学工学部学生（94 名）・E 大学文系学部学生（103 名）・G 大学文系学部学生（65 名）。平均年齢は，19.14 歳（*SD* = 1.09)であった。いずれも，心理学の講義中に実施した。E 大学と G 大学は地理的に隣接しており，偏差値的にも大きな差異のない大学である。回答に不備のなかった調査協力者は 212 名（工学部学生 58 名：女 8 名，男 50 名，文系学部学生 94 名：女 53 名，男 41 名，G 大学学生 60 名：女 50 名，男 10 名）であった。212 名の中で，内集団と全く接触していなかったり，外集団と極端に接触していたり，どの集団とも高接触・低接触だった 4 名は分析から除外し，208 名の有効回答を以下の分析に使用した（(5) を参照)。

質問紙の構成：研究 1 と研究 2 で使用された信念的判断（4 項目），社会的迷惑行為（6 項目）と向社会的行動（8 項目）の計 18 項目を用いた（具体的な項目については，後出の Table4.2 を参照)。

（1）行動判断：これら 18 項目について，自らがどのように判断・行動するのかを「する」「しない」や「好き」「すきではない」といった 2 件法で回答した。

（2）合意性の推定：E 大学工学部・E 大学文系学部・G 大学の各集団について，自らと同じ判断・行動を選択する人の割合を 0～100%の範囲で推定した。自分と異なる判断の人の割合との和が 100%となるように求められた。自らの所属する集団を内集団，その他の集団を外集団として想定し，内集団－外集団をランダムに提示した。

（3）集団同一視尺度：Karasawa（1991）で作成された集団同一視尺度 12 項目を使用し，「全く適切でない～非常に適切である」の 6 件法で回答した。

（4）集団に対する親近感：各集団に対する親近感（それぞれの学部や大学に親近感を感じますか)・類似性（自分とそれぞれの学部や大学の学生との類似性はどのくらいだと思いますか)・好感度（それぞれの学部や大学のことを好きだと思いますか）について「とても感じる（似ている・好き）～全く感じない（似ていない・好きではない)」の 6 件法で回答した。

（5）集団に対する性別イメージ：各集団に対する性別イメージ（それぞれの学部や大学をイメージするときに、性別によるイメージから割合を推定しましたか）を「性別によるイメージはない・女性集団のイメージ・男性集団のイメージ」の 3 件法で回答した。

（6）集団に対する接触頻度：各集団に対する接触頻度（普段、それぞれの学部や大学に通う学生の知り合いや友だちとどのくらい接触しますか）を「よく接触する～全く接

触しない」の 6 件法で回答した。

4.3　結果

前提となる尺度の検討

集団同一視尺度は，先行研究では 1 因子構造または 2 因子構造が想定されている。本研究では，主因子法，プロマックス回転による因子分析を行ったところ，固有値の減衰状況から 2 因子が妥当と考えられた。しかし，それぞれの因子の信頼性係数は第 1 因子（8 項目）α = .80，第 2 因子（4 項目）α = .66 であった。第 2 因子の信頼性係数が.66 と若干低いことから，先行研究で想定されている 1 因子構造を仮定することとした。この仮定に基づき，12 項目の信頼性係数を求めたところ，α = .80 であった。以降の分析では，集団同一視尺度を 1 因子として扱った。集団同一視得点の平均値は，E 大学工学部学生 M = 50.60 (SD = 9.67)，E 大学文系学部学生 M = 49.28 (SD = 10.46)，G 大学学生 M = 47.55 (SD = 11.32)で, これら 3 つの集団の平均値に有意な差は見られなかった。つまり，所属集団による内集団の捉え方に偏りのないことが示された。

次に，E 大学工学部学生・E 大学文系学部学生・G 大学学生が各々の所属する集団に対し所属意識を持ち，内集団として認知しているのか，また，他の集団を内集団とは異なる外集団として認知しているかの確認を行った。

各集団に対する親近感・類似性・好感度の得点を合計し，これらの平均値をそれぞれの集団に対する親密性得点とした。所属集団（内集団）に対する親密性得点は他の集団（外集団）の得点よりも有意に高かった（Table4.1)。以上のことから，想定したように工学部学生は工学部，文系学部学生は文系学部，そして G 大学学生は G 大学を内集団として捉え，その他の集団を外集団として捉えていると考えられる。そこで，内集団以外の集団を，その親しみの程度で区別し，内集団への近さから外集団 1，外集団 2 とした。

最後に，性別に対するイメージ（e.g., 女子学生の方が親切である）が合意性推定に影響を与えている可能性も考えられたことから，これら内集団，外集団 1，外集団 2 に対する性別イメージに偏りがないかを確認した。まず，各集団に対する性別イメージ得点を標準化し, 標準化得点の平均値の差を検定した（$F(2,412)$= .000, p > .99)。その結果，それぞれの集団に対して偏った性別イメージを示していなかった。

Table4.1 集団別の各集団に対する親密性得点と F 値

	工学部親密性	文系学部親密性	G 大学親密性	F 値
E 大学工学部学生	13.84[a]	10.57[b]	8.81[c]	98.84***
(n = 58)	(2.46)	(2.29)	(2.59)	(2, 103)
E 大学文系学部学生	10.53[b]	13.21[a]	9.83[c]	88.11***
(n = 90)	(2.16)	(1.89)	(2.17)	(2, 178)
G 大学学生	7.87[c]	11.58[b]	13.27[a]	103.71***
(n = 60)	(2.54)	(1.91)	(2.75)	(2, 99)

注 1) 上段：平均値　下段（　）：標準偏差
注 2) F 値下段の（　）：自由度
注 3) *** $p < .001$
注 4) a＞b＞c の順に有意差あり

仮説ごとの結果を以下に示す。

［仮説 1］

仮説 1 を検証するために，先行研究と同様の方法で合意性推定の t 検定を行った。具体的には，18 項目それぞれについて，内集団を合意性の推定対象とした場合，その項目に賛同する者が推定する当該項目に賛同する人の割合と，賛同しない者が推定する当該項目に賛同する人の割合について t 検定を行った。18 項目中 17 項目（信念的判断 3，社会的迷惑行為 6，向社会的行動 7，信念的判断 1 有意傾向）で有意な差または有意傾向が示された（Table4.2）。また，外集団 1，外集団 2 を合意性推定の対象とした場合には，外集団 1 では 18 項目中 15 項目（信念的判断 1，社会的迷惑行為 6，向社会的行動 5，信念的判断 2 と向社会的行動 1 有意傾向），外集団 2 では 18 項目中 13 項目（信念的判断 1，社会的迷惑行為 6，向社会的行動 6）で有意な差が認められた。このことから，内集団については，仮説 1 は頑健に支持された。

Table4.2 内集団に対する項目別，合意性推定平均値と t 検定結果，効果量 d

		賛同する/ 行動する	賛同しない/ 行動しない	t 値	効果量 d
信念的判断	裁判員制度は必要だと思う	58.21 (15.78)	53.40 (20.56)	$1.91^{\dagger}$ (205)	0.26
	小説が好き	61.28 (20.29)	44.98 (21.24)	5.12^{***} (204)	0.78
	原子力発電は必要だと思う	62.65 (16.75)	44.73 (16.13)	5.67^{***} (205)	1.09
	死について考える	62.16 (24.62)	52.10 (23.03)	2.72^{**} (205)	0.42
向社会的行動	環境のことを考えて，エコバッグを利用する	62.84 (22.06)	43.59 (21.19)	6.19^{***} (205)	0.89
	子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る	64.52 (18.49)	39.89 (28.75)	3.57^{**} (18)	1.02
	おつりが多かったときに，それを伝える	61.93 (23.36)	40.35 (22.88)	6.58^{***} (205)	0.93
	見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる	65.74 (19.47)	50.71 (19.64)	3.35^{**} (205)	0.77
	知らない人でも困っている人がいると助ける	59.82 (18.96)	47.56 (18.57)	4.33^{***} (205)	0.65
	ボランティアに参加する	49.16 (21.87)	44.58 (22.77)	1.18 (205)	0.21
	バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	59.37 (18.94)	47.03 (23.89)	2.98^{*} (48)	0.57
	後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	53.84 (19.55)	46.06 (21.50)	2.71^{**} (205)	0.38
社会的迷惑行為	ゴミのポイ捨てをする	65.38 (24.12)	41.75 (26.68)	3.42^{**} (205)	0.93
	授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	75.67 (20.20)	48.51 (23.15)	8.91^{***} (205)	1.25
	歩道を自転車で走行する	78.18 (18.88)	45.50 (20.64)	7.29^{***} (205)	1.65
	赤信号のときに横断歩道を渡る	65.14 (21.56)	48.56 (22.64)	5.39^{***} (205)	0.75
	駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める	64.54 (19.39)	48.65 (20.34)	5.75^{***} (205)	0.80
	メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	69.56 (19.71)	47.00 (20.91)	7.83^{***} (205)	1.11

注 1）上段：平均値　下段（　）：標準偏差
注 2）t 値の下段（　）：自由度
注 3）*** $p < .001$，** $p < .01$，* $p < .05$，† $p < .10$
注 4）効果量 d の分析には，G*Power3．1.7 を使用した。

［仮説 2-1，2-2，3］

仮説 2 と 3 を検証するため，自らと同じ判断・行動をする人の割合を推定する際に，合意性の推定対象が内集団もしくは外集団であった場合に，推定に違いがあるのかを検討した。具体的には，社会的迷惑行為と向社会的行動それぞれについて，合意性を推定する対象（内集団，外集団 1，外集団 2）を被験者内要因，行動傾向の高低を被験者間要因とし，従属変数を自らと同じ判断・行動をする人の割合（合意性推定値）とする 2 要因分散分析を行った。2 要因分散分析の結果に相当する部分を Figure 4.1, 4.2 に示した。

まず，社会的迷惑行為については，行動傾向の高低と合意性推定の対象集団の交互作用は有意でなく，行動傾向の主効果が有意であった（ $F(1,374)= 3.06$, *n.s.*, $F(1,205)= 39.16$, $p < .001$）。社会的迷惑行為の高行動傾向者(64.03)は低行動傾向者(55.71)よりも合意性を多く推定していたが，内集団，外集団による違いは見られなかった。この結果から，仮説 2-1 は支持されたが，仮説 2-2 は支持されなかった。

次に，向社会的行動については，行動傾向と集団の交互作用が見られた（$F(2, 204)= 9.49$, $p < .001$）。交互作用が有意であったことから，単純主効果の検定を行った。主効果が有意であった内集団と高行動傾向の多重比較の結果，内集団では低行動傾向者(51.05)に比べ，高行動傾向者(58.35)は合意性を多く推定していた（$p < .001$）。また，高行動傾向者は，外集団 1(54.84)，外集団 2(53.08)に比べ，内集団の合意性を多く推定していた（$p < .01$，$p < .001$）。これらから，仮説 3 は部分的に支持された。

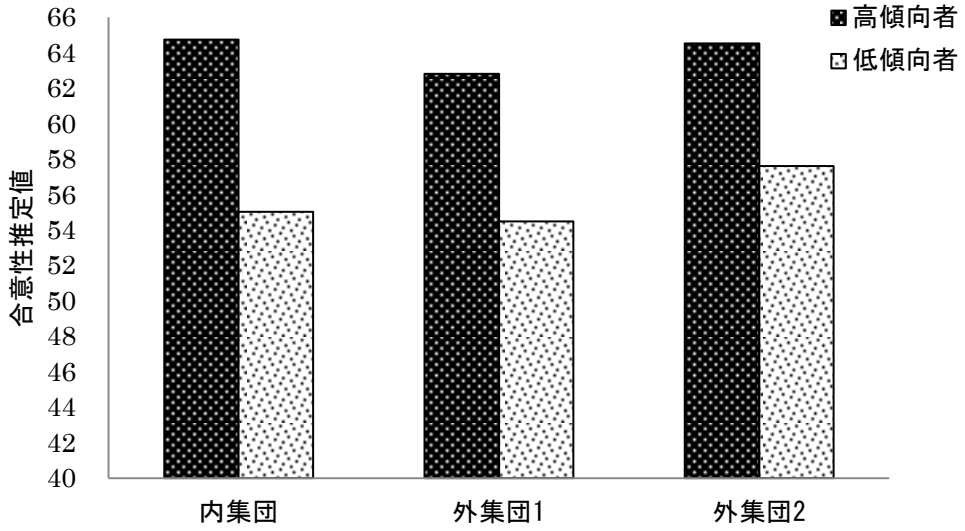


Figure 4.1　集団別にみた社会的迷惑行為の合意性推定の平均値

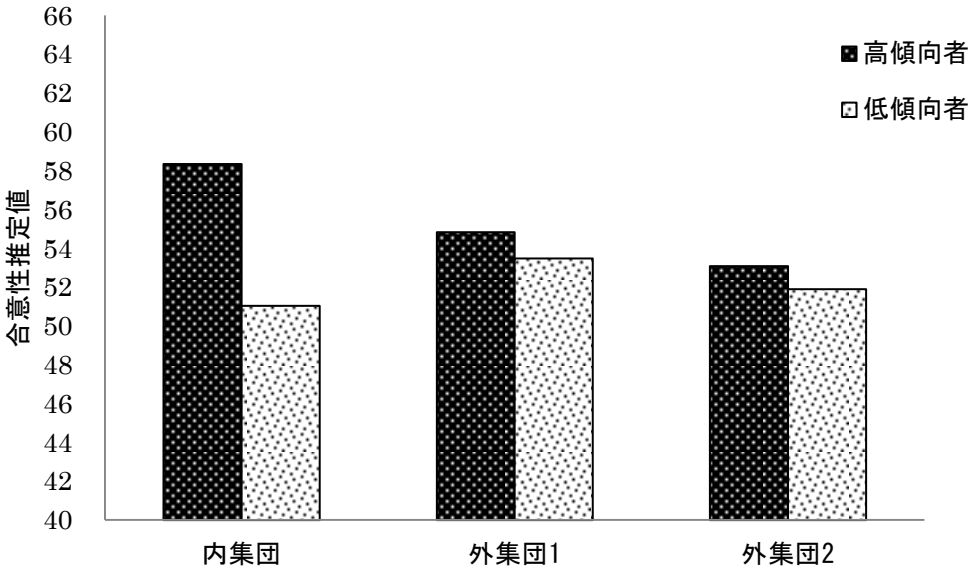


Figure 4.2 集団別にみた向社会的行動の合意性推定の平均値

［仮説 4］

集団同一視と行動傾向が合意性推定にどのような影響を与えているのかを検討するため，性別を統制したうえで，重回帰分析を行った（Figure4.3, 4.4）。その結果，社会的迷惑行為では，各集団の合意性推定に行動傾向のみが強い正の影響を与えており，集団同一視の影響は見られなかった。一方，向社会的行動では，外集団に対する合意性推定には,行動傾向が正の影響をもっているが,説明率は非常に低いことが明らかになった。しかし，内集団に対する合意性推定には，行動傾向だけでなく集団同一視も正の影響を与えていることが示され，仮説 4 は部分的に支持された。

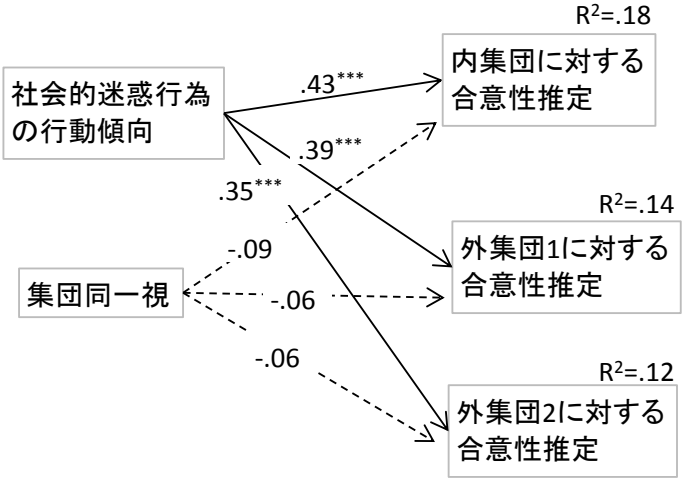


Figure4.3 社会的迷惑行為傾向と集団同一視が合意性推定に与える影響

注） *** $p < .001$, ** $p < .01$

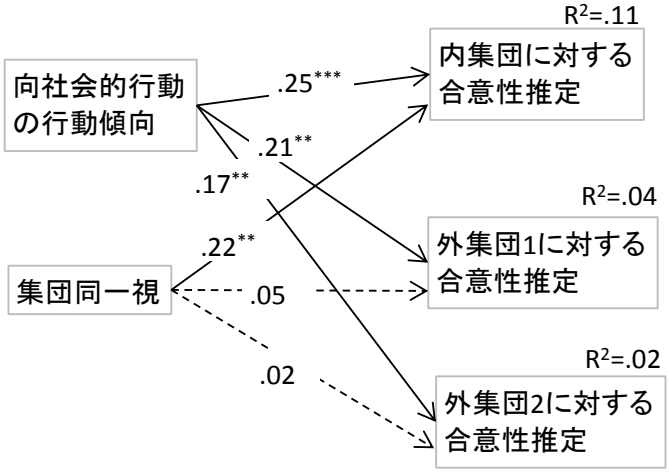


Figure4.4 向社会的行動傾向と集団同一視が合意性推定に与える影響

注） *** $p < .001$, ** $p < .01$

4.4　考察

研究 4 では，社会的な評価の異なる社会的迷惑行為と向社会的行動を合意性推定課題として取り上げ，合意性を推定する対象として，内集団と外集団を想定し，推定対象の違いが合意性推定の生じ方に影響を与えるのかを検討した。さらに，集団同一視が合意性推定に与える影響も検討した。

内集団に対する合意性推定の t 検定は，18 項目中 17 項目で有意もしくは有意傾向となり（Table4.1），自分と同じ判断や行動を多くの内集団成員も行うと推定していた。また，分散分析の結果においても，社会的迷惑行為と向社会的行動のそれぞれの高行動傾向者は，低行動傾向者と比べ，内集団について合意性を多く推定していることが明らかとなった。このことから内集団については，仮説 1 は強く支持されたと考えられる。外集団に関しては，内集団と比較すると，そうした傾向は弱いが，合意性推定の傾向としては同じであった。これらの結果から，本研究でも自らと同じ判断や行動を行う他者を多く推定する傾向の頑健性が示された（e.g., Campbell, 1986; Clement & Krueger, 2002; Marks & Miller, 1987; Ross et al., 1977）。また，研究 4 では合意性を推定する行動として，社会的評価の異なる行動（ネガティブ－ポジティブ）を取り上げた。どちらの行動においても高行動傾向者が合意性を多く推定していることから，自分と同じ判断・行動を他の人もするという，ちょっとした思い込みのようなことがネガティブな行動を助長したり，ポジティブな行動を促進したりする可能性を示唆している。この点については，今後，さらに検討する必要があると考えられる。

次に，合意性の推定対象が内集団－外集団と異なることによって，合意性推定にどのような影響があるのかを検討した。その結果，社会的迷惑行為では，行動傾向の高い者は, 低い者と比べ, どの集団の成員にも自らと同じ行動をする人が多いと推定しており，行動傾向の影響が強いことが明らかとなった。社会的にネガティブな評価を受けやすい行動は，内集団成員を少なく推定し，内集団の評価を維持することも考えられたが，そのような内集団ひいきともいえる，内集団の過少評価や外集団の過大評価は見られなかった。この結果から，仮説 2-1 は支持され，仮説 2-2 は支持されなかった。これは，ネガティブ行動を行いやすい者は，自己のネガティブ行動を正当化することに動機づけられ，合意性を多く推定したと考えられる（研究 2）。一方，ネガティブ行動をあまりしない者は，もともと普段から行っていないことであり，関与や関心も少なかったと考えられる。そのため，推定対象が内集団であろうと外集団であろうと，明確な違いが見いだ

せなかったことが考えられる。

一方，ポジティブな評価を受けやすい向社会的行動では，行動傾向の高い者は，外集団よりも内集団成員に自らと同じ行動をする者が多いと推定した。ポジティブ行動を行う内集団成員を多く推定することは，自己の行動を支持するだけでなく，内集団の社会的評価を維持・向上させることにつながる。ネガティブ行動では見られなかった内集団ひいきが，ポジティブ行動では見出されたと考えられる（仮説 3 の一部支持）。これは，向社会的行動では，ネガティブ行動のような自己正当化も必要でないこと，外集団成員の評価を下げ，内集団の評価を間接的に向上させるよりも端的でわかりやすことから，内集団ひいきが表面化したと考えられる。また，行動傾向の低い者は，社会的迷惑行為と同様，自分が普段行わない行為であり，興味関心の低さから推定対象の違いによる影響が認められなかったと考えられる。

研究 4 の結果，社会的迷惑行為のようにネガティブな評価を受けやすい行動の合意性推定では，集団にかかわらず，自分の行動に強く影響され，合意性を多く推定していた。一方，向社会的行動のようにポジティブな評価を受けやすい行動では，内集団のみ合意性を多く推定していた。これは，自分の行動を正当化したいとの動機づけがポジティブ行動よりもネガティブ行動において，強く生じるためと考えられる。自分のことを正当化したいという自我防衛的な合意性推定は，合意性推定の誤りが生じるメカニズムの一つとして指摘されている（Ross et al., 1977）。このような動機づけの生起は，合意性を推定する課題の性質によって影響を受けると考えられる。先行研究で一貫していなかった内集団－外集団に対する合意性推定の結果も，合意性を推定する課題の社会的評価を検討することで弁別できる可能性が示された。

集団同一視の影響については，向社会的行動でのみ明らかになった。社会的迷惑行為・向社会的行動のどちらにおいても，集団同一視は内集団の評価を高める方向に影響を与えていると予測していたが，結果は異なるものであった。向社会的行動については，内集団に対する合意性推定に影響を与え，外集団に対しては影響していなかった（仮説 4 の一部支持）。集団同一視は，外集団の合意性推定を低めるのではなく，内集団の合意性推定を高めることに影響を与えていたことが明らかになった。一方，社会的迷惑行為では，その行動を自らが行っていることの方が集団同一視の影響よりもインパクトが強かったと考えられる。そのため，内集団に対しても，外集団に対しても影響が見られなかったと考えられる。

最後に，内集団－外集団について検討する。本研究では，内集団－外集団として，所属する大学および学部を利用した。このような集団は，社会的カテゴリーを共有しているという点でのみ定義されるカテゴリー集団（清成，2007）に該当するということができる。Yuki（2003）は，日本人は内集団の関係構造を理解し，内集団メンバーを区別していることを指摘している。個人の関係性の強さを重視し，関係性の強い内集団メンバーに対し，より同一化をしていることから，研究 4 のように内集団－外集団としてカテゴリー集団を想定するだけでなく，個人の関係性の強さから，集団を捉えなおすことにより，研究 4 とは異なる結果を見出すことも可能であると考えられる。

第5章
総合考察

5.1　本研究の意義

我々は，自分の判断や行動を一般的で誰もが取るという思い込みを持ちがちで，この現象をしばしば経験している。このような合意性推定は，何ら具体的な根拠もなく，日常的に行われるものである。トマト嫌いの子どもが，トマトの嫌いな人は多くいると思い込むこともあれば，他者へ不快感をもたらす社会的迷惑行為であっても，自分と同じ行為は一般的によく行われることだと思い込むこともある。このように合意性を多く推定することによって，自分の判断・行動を多数派であると解釈することができる。そして，多数派であることは心理的安定を生む（白井，1979）ことから，ネガティブな行動を容認しやすくすると考えられる。つまり，合意性を多く推定することは適応的な行為であるとも言える。しかし，周囲に迷惑を掛けるような行動を考えた場合，合意性推定によって自分の行動を容認しやすくなることは，本人にとっては心理的安定を得る手段であっても，周囲の者にとっては至極不快なことに過ぎない。さらには，合意性推定の誤りが繰り返されることによって，新たな行動を生み出すことも考えられ，単なる思い込みとして片付けることはできない。そこで本研究では「合意性推定の誤り」という現象に着目し，代表的な研究であるRoss et al.（1977）に基づいた検証，および他の検証方法を用いて，合意性推定について検討した。そして，研究1・2・3では合意性推定の判断課題を中心に，研究4では合意性推定の対象集団を中心とした検討を行った。

5.1.1　合意性推定の判断課題

先行研究では,新奇であいまいな状況における判断や行動を判断課題として取り上げ,合意性推定の現象を検討している（e.g.,村田，1986 ; 田村，2007 ; Ross et al., 1977）。しかし，我々は日常的に合意性推定を行っていることから，先行研究とは異なる視点が必要と考えられる。先述したとおり，合意性推定を多く行うことが多数派であるという安定を得る手段であれば，合意性を推定する判断や行動の社会的な評価が合意性推定に影響を与えることが考えられる。そこで本研究では，合意性推定の判断課題を社会的評価の側面から検討した。研究1では，社会的評価を受けにくい信念的判断を取り上げ，研究2と3では社会的評価を受けやすい社会的迷惑行為と向社会的行動を取り上げた。信念的判断では，合意性推定が多く行われており，FCEの生じていることが明らかとなった。また，判断課題の個人的重要性が信念的判断の合意性推定に影響を与えていることも示された。次に，社会的迷惑行為や向社会的行動においても，合意性は多く推定され

ており，FCEの生じていることが明らかとなった。その中でも，社会的にネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為については自我防衛的動機づけによる正当化の影響が示唆された。また，研究4の結果においても，ネガティブな評価を受けやすい行動の合意性推定では，内集団－外集団にかかわらず，自分の行動に強く影響され，合意性を多く推定しており，正当化による影響が示唆された。動機づけ（正当化）の側面については，先行研究においても検討されている（e.g. Suls et al., 1988）。しかし，本研究では，日常的な行動や判断の社会的な評価に注目し，特に，社会的にネガティブな評価を受けやすい行動において，その行動傾向の合意性推定に対する影響が認められた。このことから，自己中心的バイアスとされるFCEにおいて，自己を正当化したいという動機づけが働く要因として，合意性を推定する行動や判断の社会的な評価の受けやすさがあることが示された。これにより，先行研究が明らかにしてきた「合意性推定の誤り」現象の新たな一面に光を当てることができたと考えられる。

5.1.2　合意性推定の対象集団

合意性推定を行う際に想定する対象としてRoss et al.（1977）では，一般他者という周囲の社会全般を取り上げている。しかし，合意性推定を行う際に自分の身近な者を想起することは容易に考えられる。そのため，他の先行研究では，合意性推定の対象集団として，実在の集団カテゴリーを利用して内集団－外集団を設定したり，操作的に内集団－外集団を設定することによって，2集団の合意性推定にどのような違いが生じるのかを検討している（e.g., Krueger & Zeiger, 1993；Mullen, Brown et al., 1992；田村，2007）。実在の集団カテゴリーによって対象集団を設定する方法については，集団に対するステレオタイプ的イメージや構成員との接触から影響を受ける可能性が指摘されている（田村，2006）。田村（2007）は，実験的操作によって内集団－外集団を認識させ，ストループ課題を利用した架空の認知処理能力の成績を合意性推定の課題として用いた。このような対象集団の操作的設定方法は，合意性推定の課題として新奇な状況を利用して集団の影響を捉えるには有効であると考えられる。しかし，本研究では合意性課題を社会的評価の側面から検討し，日常的に生じる合意性推定を検討することを目的としており，実在の集団による内集団－外集団の設定がより有効であると考えた。現実場面において，あらゆる刺激（情報）の存在する中で合意性を推定していると考えると，実在の集団を用いてもなお合意性推定に影響を与えている要因が明らかになることは一定の

意味があるといえる。さらに，本研究では，各集団に対する親近性の違いから，外集団を2つ設定し，内集団と2つの外集団を，合意性を推定する対象集団とした。これら3つの集団がどのような影響を合意性推定に与えているのかを検討した結果，2つの外集団の相違を明確に示せるだけの効果を得ることはできなかった。一方，内集団－外集団については，ネガティブ行動とポジティブ行動によって相違が認められた。ネガティブな行動については，行動傾向の影響が強く認められ，対象集団の影響は示されなかった。ポジティブ行動については，内集団の合意性を多く推定していることが示された。これらは，ポジティブ行動では，自己正当化も必要でないこと，外集団成員の評価を下げ，内集団の評価を間接的に向上させるよりもわかりやすことから，内集団ひいきが表面化した結果と考えられる。

5.2　本論文で得られた知見

本研究では，我々の誰もが経験し日常的な現象と考えられる合意性推定の誤りに注目し， Ross et al.（1977）で用いられたFCEの検証方法（同意者が推定する同意する人の割合と不同意者が推定する同意する人の割合をt 検定する）だけでなく，分散分析や重回帰分析による検証方法からも合意性推定の問題を捉えている。これらの検証方法を通して,判断課題の社会的評価や個人差変数,推定する際に想起する集団などの要因が,この現象にどのような影響を与えるのかを検討することが可能となった。研究1では,社会的評価を受けにくい信念的判断を取り上げ，その中でも個人的信念と社会関連信念に対する合意性推定とその判断の個人的重要性および仮想的有能感の影響を検討した。研究2では，社会的にネガティブ・ポジティブと評価されやすい社会的迷惑行為と向社会的行動を取り上げ，これらの社会的行動に対する合意性推定と仮想的有能感の影響を検討した。また，研究3において実際的なネガティブ行動について検討するため，行政処分を受けたドライバーに焦点を当てた。研究4では，合意性を推定する際に想起する集団として内集団－外集団を設け，社会的評価を受けやすい向社会的行動と社会的迷惑行為および社会的評価を受けにくい信念的判断に対する合意性推定の生じ方に，集団による差異があるのかを検討した。以下に本研究で得られた知見について述べる。

第一に，本研究では社会的評価という視点から合意性推定の課題を分類することで先

行研究とは異なる側面からの検討を行った。研究2では，社会的にネガティブな評価を受けやすい迷惑行為は，ポジティブな評価の向社会的行動に比べ，その行動傾向が合意性推定に強く影響を与えていることが示された。これはRoss et al.（1977）が指摘している合意性推定のメカニズム（「自我防衛的動機づけ」「利用可能性」「状況のあいまいさの解消」）の中でも，自我防衛的動機づけによる正当化が，ネガティブな行動に対しては強く働いている可能性を示唆するものである。また，合意性を推定する対象集団として内集団－外集団を設定した研究4では，社会的迷惑行為については，全6項目で内集団・外集団1・外集団2に対して合意性を多く推定していることが明らかとなった。このことからも，社会的迷惑行為の高傾向者にとっては，社会的にネガティブな評価を受けやすい行動に対する合意性推定には，自我防衛的動機づけによる正当化の影響の存在が示唆される。

第二に，研究1では社会的評価を受けにくい信念的判断（個人的信念と社会関連信念），研究2・3ではポジティブな社会的評価を受けやすい向社会的行動とネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為，そして研究4ではこれらすべての判断・行動を合意性推定の課題とした。研究1・2・3では取り上げた多数の判断・行動に対して合意性が多く推定されており，FCEが顕著に示された。研究4では，合意性推定の根拠となる対象集団設定の問題から，外集団1・外集団2ではいくつかの項目でFCEが示されなかったが，内集団については顕著にFCEが示された。このことから先行研究で示されたFCEの頑健性が本研究でも確認されたと考えられ，我々は日常的に合意性を多く推定していることが明らかとなった。

第三に，内集団－外集団を設定して合意性推定を検討した結果から，ネガティブな評価を受けやすい行動では，集団にかかわらず，自分の行動傾向に影響された合意性を多く推定し，ポジティブな評価を受けやすい行動では，内集団でのみ合意性を多く推定していることが明らかになった。これは，自分の行動を正当化したいとの動機づけがポジティブ行動よりもネガティブ行動において，強く生じるためと考えられる。このような動機づけの生起は，合意性を推定する課題の性質によって影響を受けると考えられることから，先行研究で一貫していなかった内集団－外集団に対する合意性推定の結果も，合意性を推定する課題の社会的評価を検討することで弁別できる可能性が示された。

最後に，課題に対する個人的重要性の高さが合意性を多く推定させる要因の一つであること，仮想的有能感は社会と関連する判断やネガティブな行動の合意性を多く，ポジ

ティブな行動の合意性を少なく推定させる要因であること，集団同一視は内集団のポジティブな行動の合意性を多く推定させる要因であることが明らかになった。以上の結果から，「合意性を誤って推定する」現象を先行研究とは異なる視点から検討し，合意性推定に影響を与える新たな要因を示すことができた。

5.3　今後の課題と展望

本研究において，今後検討すべき課題として以下のことが考えられる。

先行研究では，新奇であいまいな状況における合意性推定が検討されており，合意性推定をする判断・行動の社会的評価は考慮されていなかった。それ故，本研究では，社会的にネガティブ・ポジティブといった評価のされやすい行動を取り上げ，日常的に起こり得る合意性推定の誤りを検討した。その結果，本研究では，ネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為に対する合意性が多く推定される傾向が示され，その傾向が自我防衛的動機づけによる正当化から生じる可能性が示唆された。しかし，第3章3.4で指摘したように，調査協力者が何を根拠に合意性を推定しているのかを本研究では確認できていないため，正当化による合意性推定であると特定できない。そこで，今後の研究において，ネガティブな評価を受けやすい判断・行動に対する合意性推定が正当化によって行われているかどうかの確認をする必要がある。具体的には，社会的迷惑行為などネガティブな行動を行っている状況を仮想場面として設定し，そこで示されたネガティブな行動を自分が行うかの判断，および，その合意性を推定する。さらに，合意性推定の根拠（e.g.，あいまい状況の解消・自分を手がかり・正当化）を複数項目示し，それを回答させることで，自己正当化という動機づけによって，ネガティブな行動に対する合意性推定が影響を受けているのかを明らかにすることが第1の課題である。

第2の課題は，実際にその判断・行動に同意する者（もしくは，同意しない者）の実測値と合意性推定値との差の問題についても検討が必要であると考える。実測値との乖離がない合意性推定値を「誤り」として捉えることに対する問題点は指摘されている（Krueger & Zeiger, 1993）。特に，社会的迷惑行為のように周囲の他者に不快感を与える行動や内集団ひいきのようなバイアスでは，実測値と推定値のズレが問題となることは容易に想像できる。例えば，ゴミのポイ捨てをする人が実際にはほとんどの人がゴ

ミを捨てないのにも関わらず，自分と同じように多くの人々が捨てると考えており，そのことが恒常的なゴミのポイ捨てを生じさせているような場合が考えられる。また，内集団については実際よりもゴミのポイ捨てをする人を少なく推定し，外集団については実際よりも多くの人がポイ捨てすると思い込むことは，集団の敵対関係を生み出すきっかけとなることが考えられる。したがって，合意性推定の誤りを検討するには実測値と合意性推定値のズレの問題を考慮する必要がある。ただし，限られた母集団の実測値を検討し，得られた知見を汎用化することができるのか，また，先行研究では，推定値と実測値の差をTFCE（Truly False Consensus Effect）と定義し，自分の判断・行動の選択との相関を検討している（Krueger et al., 1993）が，その検証方法の妥当性といった問題点が考えられる（Dawes, 1989；Krueger & Clement, 1994）。このような問題点について検討することも考え研究3を行った。研究3では，運転免許停止処分者講習の受講者を調査対象者としたことで，行政による交通違反検挙者数の統計的指数を実際の交通違反者数を実測値と仮定することが可能となると考えていた。しかし，講習制度やプライバシーの観点などからさまざまな制約が生じ，結果として，実測値と合意性推定値のズレを検討することはできなかった。今後，さらなる検討を行う必要がある。

第3の課題として，合意性を推定することが人々の行動にどのような影響を与えているのかを検討できていないことが挙げられる。本研究の問題意識には，合意性を推定することは人にとって適応的なことであるのか（合意性を多く推定することが安定を得る手段であると考えるのであれば，適応的な認知であると考えることができる），社会的迷惑行為のようにネガティブな行動の合意性を多く（高く）推定することがさらなる迷惑行為を助長しているのではないか，といった合意性推定の行動に与える影響が含まれている。合意性推定が行動に，そして行動や判断が合意性推定に影響しているというサイクルを想定し，検討したいという思いがあった。しかし，本研究で行った検討は，行動傾向が合意性推定に与える影響に留まり，行動に与える影響を検討することはできていない。そのため，その先に想定していたサイクルを明らかにすることにまでいたっていない。現時点では，これらを明らかにするために有効な手段を検討できていないが，今後，さらなる検討を行い，合意性推定が行動や判断に与える影響を明らかにしたいと考える。

引用文献

新井邦二郎（2001）．交通安全教育の評価　国際交通安全学会誌, 27, 54-61.

Byrne, D. (1971). *The attraction pradigm.* New York: Academic Press.

Campbell, J. D. (1986). Similarity and uniqueness: The effects of attribute type, relevance, and individual-differences in self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 281-294.

Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 219-231.

Critcher, C. R., & Dunning, D. (2009). Egocentric pattern projection: How implicit personality theories recapitulate the geography of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 1-16.

Dawes, R. M. (1989). Statistical criteria for establishing a truly false consensus effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, 25, 1-17.

出口拓彦（2004）．社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連―公的・私的自意識および社会・個人志向性に着目して―　藤女子大学紀要, 42,59-64.

Di Donato, T. E., Ullrich, J., & Krueger, J. I. (2011). Social perception as induction and inference: An integrative model of intergroup differentiation, ingroup favoritism, and differential accuracy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100, 66-83.

Dudley, T. (1999). Self-other judgments of paranormal and religious belief. *Journal of Social Behavior and Personality*, 14, 309-314.

Edwards, A. L. (1953). The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *Journal of Applied Psychology*, 37, 90-93.

Fabrigar, L. R., & Krosnick, J. A. (1995). Attitude importance and the false consensus effect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 468-479.

藤本忠明・東正訓・内山伊知郎・坂口哲司・山口直範・神田忠士・高木哲平・今井康雄・榎本政夫・喜田真司（2004）．交通規範に関する心理学的研究：3 重大違反に対するドライバーの意識と行動　交通科学, 35, 12-19.

Gilovich, T. (1990). Differential construal and the false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 623-634.

Gilovich, T., Jennings, D. L., & Jennings, S. (1983). Causal focus and estimates of consensus: An examination of the false-consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 550-559.

速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社現代新書

速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2003). 自主シンポジウム「仮想的有能感」をめぐって 日本教育心理学会第 45 回総会発表論文集, S46.

速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育学部紀要, 51, 1-7.

Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K., & Tan, H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.

Holmes, S. D. (1968). Dimensions of projection, *Psychological Bulletin,* 69, 248-268.

Howard, J., & Rothbart, M. (1980). Social categorization and memory for in-group and out-group behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 301-310.

石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 (2000). 社会的迷惑に関する研究(2) 名古屋大学教育学部紀要, 47, 25-33.

石川隆行 (2011). 規範意識と道徳的判断の発達 交通安全教育, 46, 27-29.

Jones, P. E. (2004). False consensus in social context: Differential projection and perceived social distance. *British Journal of Social Psychology*, 43, 417-429.

Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.

警察庁 (2011). 警察白書 2010 年版

警視庁 (2012). 公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止に関する条例改正 2012 年 <http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/seian/gujourei/image/meiwaku_jorei.pdf> (2014 年 3 月 27 日)

Kelley, H. H., & Stahelski, J. A. (1970). Social interaction basis of cooperators' and competitors' beliefs about others. *Journal of Personality and Social Psychology,* 16, 66-91.

Kenworthy, J. B., & Miller, N. (2001). Perceptual asymmetry in consensus estimates of majority and minority members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 597-612.

菊池章夫 (1998). 思いやりを科学する―向社会的行動の心理とスキル 川島書店

清成透子・フォディ マーガレット・山岸俊男 (2007). 直接交換と間接交換が内集団信頼行動へ及ぼす影響 心理学研究, 77, 519-527.

Krueger, J., & Clement, R. W. (1994). The truly false consensus effect: An ineradicable and egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 596-610.

Krueger, J., & Zeiger, J. S. (1993). Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 670-680.

Marks, G., & Miller, N. (1987). Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 102, 72-90.

文部科学省 (2008). 平成 20 年度交通安全教育推進事業 2008 年 <http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm>(2011 年 8 月 5 日)

Morrison, K. R., & Matthes, J. (2011). Socially motivated projection: Need to belong increases perceived opinion consensus on important issues. *European Journal of Social Psychology,* 41, 707-719.

Mullen, B., Atkins, J. L., Champion, D. S., Edwards, C, Hardy, D., Story, J. E., & Vanderklok, M. (1985). The false consensus effect: A meta-analysis of 155 hypothesis tests. *Journal of Experimental Social Psychology*, 21, 262-283.

Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). Ingroup bias as a function of salience, relevance, and status: An integration. *European Journal of Social Psychology*, 22, 103-122.

Mullen, B., Dovidio, J. F., & Copper, C. (1992). In-group out-group differences in social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 28, 422-440.

村田光二 (1986). False Consensus 効果について 社会心理学評論, 5, 71-84.

Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. (1977). *Roots of caring, sharing and helping: The development of prosocial behavior in children.* San Francisco: Freeman and Co. (マッセン P. & アイゼンバーグ, N. 菊池章夫 (監訳) (1980). 思いやりの発達心理 金子書房)

Pronin, E., Lin, Y. D., & Ross, L. (2002). The bias blind spot: Perceptions of bias in self versus others. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 28, 369-381.

Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 32-47.

Ross, L. (1977). The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. *Advances in experimental social psychology,* 10, 173-220.

Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 279-301.

Ross, L., & Nisbett, E. R. (1991). *The Person and the Situation: Perspectives of Social Psychology*. 2th ed. London: Pinter & Martin.

斎藤和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, 24, 67-77.

Sanders, G., & Mullen, G. (1983). Accuracy in perceptions of consensus: Differential tendencies of people with majority and minority positions. *European Journal of Social Psychology*, 13, 57-70.

Sherman, J., Presson, C., & Chassin, L. (1984). Mechanisms underlying the false consensus effect: The special role of threats to the self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 127-138.

Sherman, J., Presson, C., Chassin, L., Corty, E., & Olshavesky, R. (1983). The false consensus effect in estimates of smoking prevalence underlying mechanisms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 197-207.

白井泰子 (1979). ステレオタイプ的判断の認知的基礎―誤った関連づけの認知― 実験社会心理学研究, 19, 61-69.

Staub E. (1972). Instigation to goodness: Role of social norms and interpersonal influence. *Journal of Social Issues*, 28, 131-150.

杉森伸吉 (1993). 集団サイズと集団誘意性の顕著性の交互作用 心理学研究, 64, 16-24.

杉森伸吉（1995）．母集団サイズと集団誘意性の間の幻相関認知に関する実験的研究　社会心理学研究, 11, 39-50.

Suls, J., & Wan, C. K. (1987). In search of the false-uniqueness phenomenon - fear and estimates of social consensus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 211-217.

Suls, J., Wan, C. K., & Sanders, S. G. (1988). False consensus and false uniqueness in estimating the prevalence of health-protective behaviors. *Journal of Applied Social Psychology*, 18, 66-79.

高木彩・村田光二（2005）．注目する規範の相違による社会的迷惑　社会心理学研究, 20, 216-223.

田村美恵（2005）．他者判断と所属集団サイズが合意性推定に及ぼす影響　実験社会心理学研究, 45, 1-12.

田村美恵（2006）．集団間状況下における合意性推定　神戸外大論叢, 57, 485-504.

田村美恵（2007）．合意性推定時の内集団バイアスの生起について―社会的カテゴリー化の下での検討―　神戸外大論叢, 58, 21-35.

田村美恵（2010）．集団間状況下での合意性推定：自己,内集団他者, 外集団他者に関する手がかり情報の影響について　実験社会心理学研究, 50, 37-48.

田村美恵（2012）．地位格差を伴う集団間関係の下での合意性推定　日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 243.

戸田まり・小林亜希子（2007）．大学生の社会的迷惑に関する検討　北海道教育大学紀要, 57, 32-40.

東京都（2004）．公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止に関する条例改正　東京都　2004年 <http://www.reiki.metro.tokyo.jp/reiki_honbun/ag10122121.html>（2008年12月10日）

東京都（2005）．報道発表資料 2005年9月掲載　東京都　2005年 <http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2005/09/20f9r800.htm>（2008年12月10日）

Turner, J. C. (1991). *Social influence.* Milton Keynes, England: Open University Press.

内山伊知郎（2000）．心の発達と行動：道徳性の発達　交通安全教育, 35, 29-31.

内山伊知郎（2008）．生涯にわたる交通安全教育：交通規範に対する態度と違反行動の発達的変化　交通安全教育, 43, 6-13.

Waldzus, S., & Mummendey, A. (2004). Inclusion in a superordinate category, in-group prototypicality, and attitudes towards out-groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 466-477.

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆　(1999)．社会的迷惑に関する研究（1）名古屋大学教育学部紀要, 46, 53-73.

吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆（2000）．社会的迷惑に関する研究（3）―社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連―　名古屋大学教育学部紀要, 47, 35-45.

Yuki, M. (2003). Intergroup comparison versus intragroup relationships: A cross-cultural examination of social identity theory in North American and East Asian cultural contexts. *Social Psychology Quarterly*, 66, 166-183.

謝辞

本論文の執筆にあたり，多くの方々にお世話になりました。心より深く深く感謝いたします。

はじめに，調査に協力していただいた多くの方々にお礼申し上げます。調査場所を提供いただいた先生方，交通安全講習所の先生方，実際に調査にご協力いただいた方々，調査の実施にご協力いただいた院生の皆様，ありがとうございました。この謝辞を記すために思い返してみると，多くの方々のご厚意により，本論文を執筆することができたということを再度実感いたしました。深く感謝いたします。

指導教官である高井次郎先生には，学部のころよりお世話になりました。博士後期課程を終え，研究生となってからは指導教官として，ご指導いただきました。急に研究室を訪ね，英語要約や研究の進み具合などを相談させていただきましたが，お忙しい中，いつも快くお時間を割いてくださいました。心より感謝いたします。

吉田俊和先生には，学部3年生から退官されるまでの7年間，指導教官として，大変お世話になりました。「遅々として進まない執筆状況に，大変ご心配をお掛けすることになりましたが，徐々に声を大きくしながらも，根気強く，辛抱強くご指導していただきました。」と修士論文の謝辞に記してありました。博士課程後期になっても，同じようなことを繰り返してきたように思います。本論文を書き上げるにあたって，折に触れ，叱咤激励いただきました。深く感謝いたします。ありがとうございました。

最後に，学部の頃からも合わせると8年以上に渡って，名古屋大学教育発達科学研究科に所属させていただきました。その間，授業や研究会，講演会など様々な形で多くの刺激を受け，たくさんのことを教えていただきました。また，様々な方々と楽しい時間も過ごさせていただきました。厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

平成26年11月

吉武久美

付録

本研究で用いた質問紙

本研究で使用した質問紙，仮想的有能感尺度 version 2（Hayamizu et al，　2004）と集団同一視尺度（Karasawa, 1991）を添付する。ただし，研究 4 で使用した質問紙は 3 つの集団で若干の違いがあるが，ここでは 1 種類のみを添付することとする。また，研究 4 の質問紙は大学名を E 大学と G 大学に置き換えてある。

以下の順に，資料を添付する。

1. 研究 1 で使用した質問紙
2. 研究 2 で使用した質問紙
3. 研究 3 で使用した質問紙
4. 研究 4 で，E 大学工学部で使用した質問紙
5. 仮想的有能感尺度version 2（Hayamizu et al，2004）
6. 集団同一視尺度（Karasawa, 1991）

1．研究1で使用した質問紙

日常生活での判断についての調査

この調査では、みなさんの日常生活でのさまざまな事柄に対する判断に関して収集することを目的としています。詳しい研究の内容や目的につきましては，回答に影響の出る恐れがありますので，回答用紙を回収させていただいた後に別紙にて説明させていただきます。

一人でも多くの方の回答を必要としていますので，ぜひともご協力をよろしくお願いいたします。

どうしても回答をしたくない方や，途中で回答をしたくなくなった方は，回答をやめていただいてもかまいません。

調査の結果は統計的に処理されます。個人が特定されることはありません。また、学業成績に影響することも一切ございません。正しい答えや，間違った答えもありませんので，率直にありのままをご回答ください。

ご協力，お願いします。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程2年　吉武　久美

質問に答えるときは、
つぎのように数字に〇をつけてください。

よい例　　1 — (2) — 3 — 4

悪い例　　1 (—) 2 — 3 — (4)

＊質問に回答する前につぎの事項にご記入ください。

性別（　男　・　女　）　　年齢（　　歳）

学部（ 1年　　2年　　3年　　4年 ）

留学生（　　）

研究生　　聴講生　　その他（　　）

質問は 右→ のページからになります。

まずは，下↓の回答方法をよく読んでください。
質問には説明をよく読んでからお答えください。

１．＊３ページと４ページの質問には，つぎのように回答してください。

■あなたは，次のことをどのように考えますか？
二つの選択肢の中から，
自分の考えによりあてはまると思うほうを一つ選択し，
“○” 丸をつけてください。

■つぎに，一般的に，他の人は自分と同じように考えると思いますか？
自分と**同じ考え**をする人と，
自分と**違う考え**をする人が**合計で100%**になるように考えてください。
（「自分と同じ考えの人」＝１００％－「自分と違う考えの人」）

自分と同じ考えの人のパーセント%のみを記入してください。

例1：「 走ることが好き 」という質問にたいして
自分は「走ることが好きだ」し，
他の人も**38%**くらいが「走ることが好きだ」と思い，
自分と違って「走ることが好きではない」人が**62%**だと思った場合・・・・・

「**好き**」に“○”丸をつけ，
自分と同じ考えの人を38%　と記入します。

		自分と同じ考えの人（＝100%－自分と違う考えの人の%）
好き	好きではない	（　38　%）

			自分と同じ考えの人（＝100％－自分と違う考えの人の％）
1 外国映画が好き	好き	好きではない	（　　％）
2 臓器移植ドナーカードを所持していない	所持していない	所持している	（　　％）
3 クラッシック音楽が好き	好き	好きではない	（　　％）
4 公立小中学校の統廃合は必要	必要	必要ではない	（　　％）
5 スポーツが好き	好き	好きではない	（　　％）
6 女性の社会的地位は向上していると思う	思う	思わない	（　　％）
7 ペットを飼うことは楽しいと思う	思う	思わない	（　　％）
8 尊厳死を認める	認める	認めない	（　　％）
9 時代劇が好き	好き	好きではない	（　　％）
10 同性愛婚を認めてもよいと思う	思う	思わない	（　　％）
11 スイーツ（お菓子など）が好き	好き	好きではない	（　　％）
12 自分の健康を心がける	心がける	心がけない	（　　％）
13 原子力発電は必要だと思う	思う	思わない	（　　％）
14 薬のインターネット販売続行を認めるべきだと思う	思う	思わない	（　　％）
15 コーラが好き	好き	好きではない	（　　％）
16 クリエイティブな（何かを創り出すような）仕事に就くべきだと思う	思う	思わない	（　　％）

			自分と同じ考えの人（＝100％－自分と違う考えの人の％）
17 吉本新喜劇が好き	好き	好きではない	（　　％）
18 紛争問題を解決するための武力行使は仕方がないと思う	思う	思わない	（　　％）
19 SFが好き	好き	好きではない	（　　％）
20 女性のキャリアを認める	認める	認めない	（　　％）
21 とてもこだわっている色がある	ある	ない	（　　％）
22 裁判員制度は必要だと思う	思う	思わない	（　　％）
23 死について考える	考える	考えない	（　　％）
24 現代アートが好き	好き	好きではない	（　　％）
25 幼児の臓器移植を認めるべきだと思う	思う	思わない	（　　％）
26 大勢でいるよりも、一人でいるほうが好き	好き	好きではない	（　　％）
27 小説が好き	好き	好きではない	（　　％）
28 Web上での匿名性は必要だと思う	思う	思わない	（　　％）
29 犬と猫なら、犬が好き	好き	好きではない	（　　％）
30 死刑制度は廃止すべきだと思う	思う	思わない	（　　％）
31 趣味は持ったほうがよいと思う	思う	思わない	（　　％）
32 エコバッグを利用するべきだと思う	思う	思わない	（　　％）

２．つぎのことは，あなたにとって，どのくらい“重要な”ことですか？
「1.まったく重要でないこと」～「4.とても重要なこと」の中で，
一番，あてはまると思う数字にひとつ“○”丸をつけてください。

	まったく重要でないこと	どちらかといえば重要でないこと	どちらかといえば重要なこと	とても重要なこと
1 同性愛婚を認めること	1	2	3	4
2 クラッシック音楽のこと	1	2	3	4
3 女性のキャリア問題	1	2	3	4
4 コーラのこと	1	2	3	4
5 吉本新喜劇のこと	1	2	3	4
6 ペットの飼育のこと	1	2	3	4
7 薬のインターネット販売のこと	1	2	3	4
8 大勢でいるか，一人でいるかの好み	1	2	3	4
9 歴史物の映画やドラマのこと	1	2	3	4
10 幼児の臓器移植問題	1	2	3	4
11 自分の健康問題	1	2	3	4
12 紛争解決のための武力行使の問題	1	2	3	4
13 趣味のこと	1	2	3	4
14 犬や猫のこと	1	2	3	4
15 裁判員制度の問題	1	2	3	4
16 死について考えること	1	2	3	4

	まったく重要でない	どちらかといえば重要でないこと	どちらかといえば重要なこと	とても重要なこと
17 小説のこと	1	2	3	4
18 臓器移植の問題	1	2	3	4
19 スポーツのこと	1	2	3	4
20 Web上での匿名性の問題	1	2	3	4
21 外国映画のこと	1	2	3	4
22 現代アートのこと	1	2	3	4
23 尊厳死の問題	1	2	3	4
24 SFのこと	1	2	3	4
25 公立小中学校の統廃合の問題	1	2	3	4
26 スイーツ（お菓子など）のこと	1	2	3	4
27 死刑制度の問題	1	2	3	4
28 クリエイティブな仕事に就くこと	1	2	3	4
29 色にこだわること	1	2	3	4
30 原子力発電についての問題	1	2	3	4
31 女性の社会的地位に関する問題	1	2	3	4
32 エコバッグの利用	1	2	3	4

３．つぎの文章について，自分にどれくらいあてはまりますか。

「1.まったく思わない」～「5.よく思う」の中であてはまる数字にひとつ“○”丸をつけてください。

	まったく思わない	あまり思わない	どちらともいえない	ときどき思う	よく思う
1 自分の周りには気のきかない人が多い	1	2	3	4	5
2 他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる	1	2	3	4	5
3 話し合いの場で，無意味な発言をする人が多い	1	2	3	4	5
4 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	1	2	3	4	5
5 他の人に対して，なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	1	2	3	4	5
6 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は，周りに少ない	1	2	3	4	5
7 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い	1	2	3	4	5
8 私の意見が聞き入れてもらえなかった時，相手の理解力が足りないと感じる	1	2	3	4	5
9 今の日本を動かしている人の多くは，たいした人間ではない	1	2	3	4	5
10 世の中には，努力しなくても偉くなる人が少なくない	1	2	3	4	5
11 世の中には，常識のない人が多すぎる	1	2	3	4	5

４．つぎのことは，“社会的に”どのような評価を受けることだと思いますか？
「-2.社会的にとてもマイナスなこと」～「2.社会的にとてもプラスなこと」の中で，
一番，あてはまると思う数字にひとつ“○”丸をつけてください。

	社会的にとてもマイナスなこと	どちらかといえばマイナスなこと	マイナスともプラスともいえない	どちらかといえばプラスなこと	社会的にとてもプラスなこと
1 大勢でいるよりも、一人でいるほうが好きだと思うこと	－2	－1	0	1	2
2 紛争問題の解決で武力が利用されること	－2	－1	0	1	2
3 スポーツが好きなこと	－2	－1	0	1	2
4 吉本新喜劇が好きなこと	－2	－1	0	1	2
5 臓器移植ドナーカードを所持しないこと	－2	－1	0	1	2
6 こだわりの色があること	－2	－1	0	1	2
7 同性愛婚を認めること	－2	－1	0	1	2
8 時代劇が好きなこと	－2	－1	0	1	2
9 小説が好きなこと	－2	－1	0	1	2
10 裁判員制度を必要だと思うこと	－2	－1	0	1	2
11 ペットを飼うこと	－2	－1	0	1	2
12 自分の健康を心がけないこと	－2	－1	0	1	2
13 女性のキャリアを認めること	－2	－1	0	1	2
14 SFが好きなこと	－2	－1	0	1	2
15 尊厳死を認めること	－2	－1	0	1	2
16 公立小中学校を統廃合すること	－2	－1	0	1	2
17 女性の社会的地位の向上を主張すること	－2	－1	0	1	2
18 犬と猫なら、犬が好きだと思うこと	－2	－1	0	1	2

	社会的にとてもマイナスなこと	どちらかといえばマイナスなこと	マイナスともプラスともいえない	どちらかといえばプラスなこと	社会的にとてもプラスなこと
19 死刑制度を廃止すること	－2	－1	0	1	2
20 クリエイティブな仕事に就くこと	－2	－1	0	1	2
21 外国映画が好きなこと	－2	－1	0	1	2
22 死について考えること	－2	－1	0	1	2
23 スイーツ（お菓子など）が好きなこと	－2	－1	0	1	2
24 原子力発電を必要だと考えること	－2	－1	0	1	2
25 薬のインターネット販売を認めないと思うこと	－2	－1	0	1	2
26 コーラが好きなこと	－2	－1	0	1	2
27 幼児の臓器移植を認めないこと	－2	－1	0	1	2
28 クラッシック音楽が好きなこと	－2	－1	0	1	2
29 趣味を持つべきだと考えること	－2	－1	0	1	2
30 Web上での匿名性を必要だと思うこと	－2	－1	0	1	2
31 現代アートが好きなこと	－2	－1	0	1	2
32 エコバッグを利用しないこと	－2	－1	0	1	2

****
質問はこれで終わりです。
長時間，ご協力いただき，　ありがとうございました。
****

お手数ですが，記入漏れがないかどうか最初のページから確認をお願いいたします。
感想や質問がございましたら、ご自由に記入してください。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程2年　吉武　久美

2．研究2で使用した質問紙

日常生活での行動・判断　調査

この調査では、みなさんの日常生活での行動や判断に対する意識を収集することを目的としています。詳しい研究の内容や目的につきましては，回答に影響の出る恐れがありますので，回答用紙を回収させていただいた後に別紙にて説明させていただきます。

一人でも多くの方の回答を必要としていますので，ぜひともご協力をよろしくお願いいたします。

どうしても回答をしたくない方や，途中で回答をしたくなくなった方は，回答をやめていただいてもかまいません。

調査の結果は統計的に処理されます。個人が特定されることはありません。また、学業成績に影響することも一切ございません。正しい答えや，間違った答えもありませんので，率直にありのままをご回答ください。

ご協力，お願いします。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程1年　吉武　久美

＊質問に回答する前につぎの事項にご記入ください。

性別（　男　・　女　）　　年齢（　　歳）

学部（ 1年　　2年　　3年　　4年）　　留学生

大学院生（　　）　　研究生　　聴講生　　その他

普段，日常的に自転車やバイクを利用しますか

1　利用する　　2　利用しない

質問は 3ページからになります。
まずは，つぎの回答方法をよく読んでください。

質問には説明をよく読んでからお答えください。

質問に答えるときは、
つぎのように数字に〇をつけてください。

よい例　　1 ― (2) ― 3 ― 4

悪い例　　1 (―) 2 ― 3 ― (4)

＊これからの質問にたいして，つぎのように回答してください。

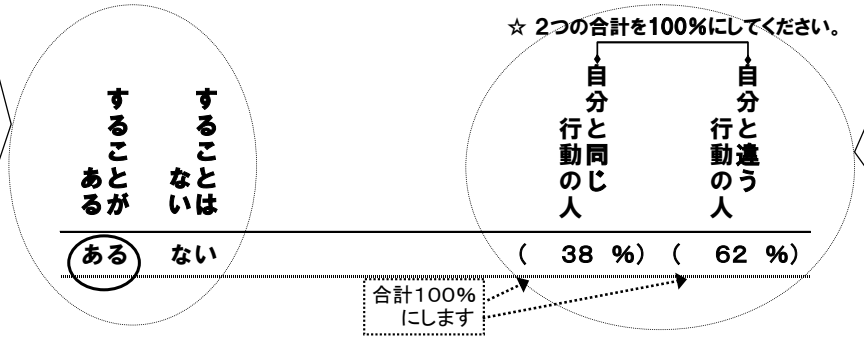
■次の行動をあなたはすることがありますか？それとも，することはありませんか？
「**することがある**」か「**することはない**」の二つの中から，
自分の日頃の生活を思い出し，あてはまるものにひとつ”○” 丸をつけてください。

■つぎに，一般的に，他の人は自分と同じ行動をすると思いますか？
自分と**同じ**行動をする人が全体で何%，
自分と**違う**行動をする人が全体で何%だと思うかを回答してください。
（☆**2つを合計して，100%に**なるようにしてください）

例1：　「小説を読む」という質問にたいして

自分は「小説を読むことが**ある**」し，
他の人も**38%**くらいが「小説を読むだろう」と思った場合・・・・・

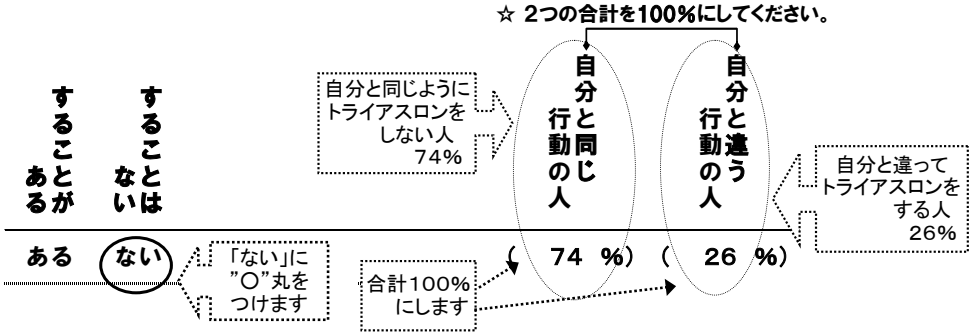
「**することがある**」に”○”丸をつけ，
自分と同じ行動の人を38%　**自分と違う行動の人を62%**　と記入します。



例2：「トライアスロンをする」という質問にたいして

自分は「トライアスロンを**しない**」し，　他の人も**74%**くらいが，
自分と**同じ**ように「トライアスロンを**しないだろう**」と思った場合・・・・・

「**することはない**」に”○”丸をつけ，
自分と同じ行動の人を74%　**自分と違う行動の人を26%**　と記入します。



☆ 2つの合計を100%にしてください。

		することがある	することはない	自分と同じ行動の人	自分と違う行動の人
1	ゴミのポイ捨てをする	ある	ない	(　　%)	(　　%)
2	バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	ある	ない	(　　%)	(　　%)
3	赤信号のときに横断歩道を渡る	ある	ない	(　　%)	(　　%)
4	授業を休んだ友人のために，プリントなどの配布資料をもらう	ある	ない	(　　%)	(　　%)
5	図書館で借りた本を貸出期限を過ぎても返さない	ある	ない	(　　%)	(　　%)
6	体調が良いときは，献血に協力する	ある	ない	(　　%)	(　　%)
7	電車やバスなどの車内で，友だち同士大きな声でおしゃべりをする	ある	ない	(　　%)	(　　%)
8	子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る	ある	ない	(　　%)	(　　%)
9	授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	ある	ない	(　　%)	(　　%)
10	ボランティアに参加する	ある	ない	(　　%)	(　　%)
11	メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	ある	ない	(　　%)	(　　%)
12	ごみ収集日以外にゴミを出す	ある	ない	(　　%)	(　　%)
13	知らない人に頼まれて，カメラのシャッターを押す	ある	ない	(　　%)	(　　%)
14	音楽や映画などを不正にコピーしたり，ダウンロードしたりする	ある	ない	(　　%)	(　　%)

☆ 2つの合計を100%にしてください。

		することがある	することはない	自分と同じ行動の人	自分と違う行動の人
15	環境のことを考えて，エコバッグを利用する	ある	ない	(　　%)	(　　%)
16	電車の中やレストランなどで，携帯電話で話をする	ある	ない	(　　%)	(　　%)
17	知らない人でも困っている人がいると助ける	ある	ない	(　　%)	(　　%)
18	図書館の本に書き込みをする	ある	ない	(　　%)	(　　%)
19	道をたずねられたら，教える	ある	ない	(　　%)	(　　%)
20	他人の自転車を倒したときに，倒したままにしておく	ある	ない	(　　%)	(　　%)
21	後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	ある	ない	(　　%)	(　　%)
22	ゴミの分別をする	ある	ない	(　　%)	(　　%)
23	歩道を自転車で走行する	ある	ない	(　　%)	(　　%)
24	おつりが多かったときに，それを伝える	ある	ない	(　　%)	(　　%)
25	駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める	ある	ない	(　　%)	(　　%)
26	見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる	ある	ない	(　　%)	(　　%)
27	授業や講演会が始まる前に，携帯電話をマナーモードにする	ある	ない	(　　%)	(　　%)

☆ 2つの合計を100%にしてください。

			自分と同じ判断の人	自分と違う判断の人
28 死について考える	考える	考えない	(　　%)	(　　%)
29 2030年までに地球外生命が発見されると思う	思う	思わない	(　　%)	(　　%)
30 Web上での匿名性は必要だと思う	必要	不要	(　　%)	(　　%)
31 大勢でいるよりも，一人でいる方が好きだ	はい	いいえ	(　　%)	(　　%)
32 10年以内に女性の首相が誕生する	する	しない	(　　%)	(　　%)
33 石油が枯渇する前に，代わりとなるエネルギーが開発される	される	されない	(　　%)	(　　%)
34 犬と猫，どちらが好きですか	犬	猫	(　　%)	(　　%)
35 老後に，年金をもらえると思う	思う	思わない	(　　%)	(　　%)
36 自分の健康について心配する	する	しない	(　　%)	(　　%)

つぎの文章について，自分にどれくらいあてはまりますか。
「1.全く思わない」～「5.よく思う」の中であてはまる数字にひとつ○丸をつけてください。

	全く思わない	あまり思わない	どちらともいえない	ときどき思う	よく思う
37 自分の周りには気のきかない人が多い	1	2	3	4	5
38 他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる	1	2	3	4	5
39 話し合いの場で，無意味な発言をする人が多い	1	2	3	4	5
40 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	1	2	3	4	5
41 他の人に対して，なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	1	2	3	4	5
42 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は，周りに少ない	1	2	3	4	5
43 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い	1	2	3	4	5
44 私の意見が聞き入れてもらえなかった時，相手の理解力が足りないと感じる	1	2	3	4	5
45 今の日本を動かしている人の多くは，たいした人間ではない	1	2	3	4	5
46 世の中には，努力しなくても偉くなる人が少なくない	1	2	3	4	5
47 世の中には，常識のない人が多すぎる	1	2	3	4	5

つぎの文章について，自分にどれくらいあてはまりますか。
「1.あてはまる」～「5.あてはまらない」の中であてはまる数字にひとつ○丸をつけてください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
48 私は少なくとも他の人と同じレベルに価値のある人間だと思う	1	2	3	4	5
49 私はときどきだめな人間だと思う	1	2	3	4	5
50 私にはあまり自慢に思うことがない	1	2	3	4	5
51 自分を好ましい人間だと思っている	1	2	3	4	5
52 自分が役立たずな人間だと感じることがときどきある	1	2	3	4	5
53 自分にはいくつかの長所があると思う	1	2	3	4	5
54 自分を失敗者だと感じることが多い	1	2	3	4	5
55 自分に大体満足している	1	2	3	4	5
56 自分をもっと尊敬できたらと思う	1	2	3	4	5
57 何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる	1	2	3	4	5

****
質問はこれで終わりです。
長時間，ご協力いただき，　ありがとうございました。
****

お手数ですが，記入漏れがないかどうか最初のページから確認をお願いいたします。

感想や質問がございましたら、ご自由に記入してください。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程1年　吉武　久美

3．研究3で使用した質問紙

交通ルールやマナーに関する調査

この調査では，普段，車を運転する人たちの**交通ルール**や**マナー**に関する意識のデータ収集を目的としています。些少ではありますが調査にご協力いただきました方には，**500円分のQUOカード**を進呈させていただきます。詳しい研究の内容や目的につきましては，回答に影響の出る恐れがありますので，回答用紙を回収させていただいた後にお礼とともに説明文を送らせていただきます。

回答をしたくない方や途中で回答をしたくなくなった方は，回答をやめていただいてもかまいません。
また，調査の目的から，**ペーパードライバー**の方は回答をご遠慮ください。

一人でも多くの方の回答を必要としていますので，ぜひともご協力をお願いいたします。

調査の結果は統計的に処理されます。**個人が特定されることはありません**。また，お礼をお送りする際にも個人が特定されることがないよう最大限に留意いたします。もちろん，この回答を本調査以外に利用することも一切ございません。正しい答えや，間違った答えもありませんので，率直にありのままをご回答ください。

ご協力の程，よろしくお願いします。

次のページに詳しい回答方法が記載してありますので，よく読んでから回答をお願いします。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　教授　吉田　俊和
名古屋大学大学院教育発達科学研究科　吉武　久美

本調査は，「財団法人　社会安全研究財団」より助成金を受けて実施しています。

＊統計分析に必要となりますので，
質問に回答する前につぎの事項に必ずご記入ください。

※

性別　（　　）
年齢　（　　）
運転歴（　　）
年間の平均走行距離　約（　　km）

質問は次のページからになります。

まずは，下↓の回答方法をよく読んでください。
質問には説明をよく読んでからお答えください。

● ２ページと３ページの質問には，つぎのように回答してください。

例：「普段，ジョギングをする」という質問に対して

■あなたは，普段，ジョギングをしますか？

「する」・「しない」の中から，

自分の行動によりあてはまると思う方に，“○”丸をつけてください。

■次に，一般的に他の人は自分と同じように行動をすると思いますか？

自分と**同じ行動**をする人と，

自分と**違う行動**をする人が**合計で100%**になるように考えてください。
（「自分と同じ考えの人」＝100%－「自分と違う考えの人」）

自分と同じ考えの人のパーセント%のみを記入してください。

● 自分は「普段，ジョギングをする」し，
他の人も**38%**くらいが「ジョギングをする」と思い，
自分と違って「ジョギングをしない」人が**62%**だと思った場合・・・・・

「**する**」に“○”丸をつけ，
自分と同じ行動の人を38%　と記入します。

する　　しない

自分と同じ
行動の人
（＝100%－自分と違う行動の人の%）
（　38　%　）

1. 次の事柄について，普段の生活で自分はどのように行動しますか？
よりあてはまると思う行動に〇丸をつけてください。
自分と同じ行動をする人は，一般的にどのくらい居ると思いますか？
その%を記入してください。

自分と同じ行動の人

1 高速道路で渋滞しているときでも，合流してくる車を自分の前に入れる

入れる　　入れない　　（　　%）

2 通行量が少ない道では，一旦停止場所でも止まっていなかった

止まっていた　　止まっていなかった　　（　　%）

3 対向車線の右折車のために後続車が渋滞している場合には，車を止め，右折させる

右折させる　　右折させない　　（　　%）

4 危険がなければ，赤信号を無視していた

無視していた　　無視していなかった　　（　　%）

5 なかなか店舗から出られない車のために減速する

減速する　　減速しない　　（　　%）

6 運転中でも，ケータイが鳴れば出ていた

出ていた　　出ていなかった　　（　　%）

7 雨の日には歩行者に水しぶきがかからないよう気をつける

気をつける　　気をつけない　　（　　%）

8 少ししか飲酒していないと思ったときには，酒気帯び運転をしていた

運転をしていた　　運転していなかった　　（　　%）

9 直ぐに終わる用事であっても，店舗前に駐車しないで，専用駐車場に駐車する

駐車する　　駐車しない　　（　　%）

10 追い越し禁止車線でも，前の車が遅いときには追い越しをしていた

追い越しをしていた　　追い越していなかった　　（　　%）

11 高速道路では，後部座席の同乗者にシートベルの着用をお願いする

お願いする　　お願いしない　　（　　%）

自分と同じ
行動の人

12 ブレーキランプの故障や半ドアの車を見かけたら教える

教える　　教えない　　（　　%）

13 一般道でも20キロオーバーのスピード違反をしていた

違反をしていた　　違反していなかった　　（　　%）

14 横断歩道ではないところを横断しようとしている歩行者のために，車を止めて，渡るのを待つ

待つ　　待たない　　（　　%）

15 前の車がとても遅いときには，あおっていた

あおっていた　　あおっていなかった　　（　　%）

16 駐車場が混雑していても車椅子マークの駐車スペースには絶対に駐車しない

駐車する　　駐車しない　　（　　%）

17 夜間など気づかれないときにはシートベルトを着けないで運転をしていた

運転をしていた　　運転していなかった　　（　　%）

18 ライトの消し忘れや付け忘れを見かけたら，合図して知らせる

知らせる　　知らせない　　（　　%）

19 後続車両がないときにはウインカーを出さずに車線変更をしていた

変更していた　　変更していなかった　　（　　%）

20 お年寄りや小さい子がゆっくり横断しているときにも，急かしたりしないで待っている

待っている　　待っていない　　（　　%）

21 自分が後部座席に同乗するとき，高速道路ではシートベルトを着用する

着用する　　着用しない　　（　　%）

22 駐車禁止の場所でも，急いでいるときは駐車をしていた

駐車をしていた　　駐車をしていなかった　　（　　%）

２．１の問題を回答するときに，「一般的に」といわれて，
どの範囲の人たちを想像して回答しましたか？
つぎの中で，一番近いものに○丸をしてください。（１つのみ）

A_ 世の中の人　　B_ 愛知県民　　C_ 自分の生活範囲内で目にする人

D_ 試験場で同じ講習を受けた人　　E_ 友人・知人といった知り合い　　F_その他（　　）

３．交通ルールやマナーに対する意識について

「1.まったくあてはまらない」～「5.よくあてはまる」の中で
一番あてはまる数字にひとつ“○”丸をつけてください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	よくあてはまる
1 交通ルールやマナーを守らないことは悪いことだと思う	1	2	3	4	5
2 交通ルールやマナーを守らない人はたくさんいる	1	2	3	4	5
3 交通ルールやマナーを守らない人がいると不快だ	1	2	3	4	5
4 自分が交通ルールやマナーを守れない状況では，自分と同じように他の人も守れない	1	2	3	4	5
5 交通ルールやマナーには従うべきだと思う	1	2	3	4	5
6 交通ルールやマナーを守れないことがあっても，しょうがない	1	2	3	4	5
7 自分は交通ルールやマナーを守る方だ	1	2	3	4	5
8 交通ルールやマナーを守ることは大切なことだと思う	1	2	3	4	5
9 自分よりも交通ルールやマナーを守らない人は多い	1	2	3	4	5

****
質問はこれで終わりです。
ご協力いただき，ありがとうございました。
****

個人情報を利用して，個人を特定するようなことはありませんので，
アンケートには，ありのままをご回答いただくことを再度お願いいたします。
お手数ですが，記入漏れがないかどうか最初のページから確認ください。

感想や質問がございましたら、ご自由に記入ください。

※アンケート用紙のご返送方法

- アンケート用紙１～４ページまでに記入漏れがないことを確認してください。
- お礼（500円分のＱＵＯカード）の送り先住所を同封の宛名シールにご記入ください。
- ご返送の締め切り

  データ処理の都合上，
  アンケート用紙は，1月31日（消印有効）までにご返送ください。
  期限内のアンケート用紙にのみ，お礼を進呈いたします。予め，ご了承ください。

■ アンケート用紙と宛名シールを同封の返信用封筒にてご返送ください。

同封のボールペンはそのままご利用いただければ幸いです。
後日，お礼と簡単な研究内容を記した用紙をお送りいたします。

宛名シールにお書きいただきました個人情報につきましては，
お礼の進呈のみに使用いたします。

お送りいただいたアンケート用紙と宛名シールは，到着しだい別々に
扱い，お礼の返送作業を進めさせていただきます。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　教授　吉田　俊和
名古屋大学大学院教育発達科学研究科　吉武　久美

4．研究4で使用した質問紙

日常生活での判断についての調査

この調査では、みなさんの日常生活でのさまざまな事柄に対する行動や判断についてのデータを収集することを目的としています。詳しい研究の内容や目的につきましては，回答に影響の出る恐れがありますので，回答用紙を回収させていただいた後に別紙にて説明させていただきます。

一人でも多くの方の回答を必要としていますので，ぜひともご協力をよろしくお願いいたします。

どうしても回答をしたくない方や，途中で回答をしたくなくなった方は，回答をやめていただいてもかまいません。

調査の結果は統計的に処理されます。個人が特定されることはありません。また、学業成績に影響することも一切ございません。正しい答えや，間違った答えもありませんので，率直にありのままをご回答ください。

ご協力，お願いします。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程2年　吉武　久美

質問に答えるときは、
つぎのように数字に〇をつけてください。

よい例　　1 — (2) — 3 — 4

悪い例　　1 (—) 2 — 3 — (4)

＊質問に回答する前につぎの事項にご記入ください。

学部名（　　）

学年（　　）

性別（　男　・　女　）　　年齢（　　歳）

質問は 右→ のページからになります。

まずは，下↓の回答方法をよく読んでください。
質問には説明をよく読んでからお答えください。

１．＊３ページと４ページの質問には，つぎのように回答してください。

■あなたは，次のことをどのように行動または判断しますか？
二つの選択肢の中から，
自分の行動や判断によりあてはまると思うほうを一つ選択し，
“○” 丸をつけてください。

■次に，他の人は自分と同じように行動・判断をすると思いますか？
自分と**同じ行動・判断**をする人と，
自分と**違う行動・判断**をする人が**合計で100%**になるように考えてください。
（「自分と同じ考えの人」＝100%－「自分と違う考えの人」）

自分と同じ考えの人のパーセント%のみを記入してください。

例1：「 よくジョギングをする 」という質問にたいして
自分は「ジョギングをする」し，
他の人も**38%**くらいが「ジョギングをする」と思い，
自分と違って「ジョギングをしない」人が**62%**だと思った場合・・・・・

「**する**」に“○”丸をつけ，
自分と同じ行動・判断の人を38%　と記入します。

自分と同じ考えの人
（＝100%－自分と違う考えの人の%）

する　　**しない**　　（　**38**　**%**）

次の事柄について、自分はどのような行動・判断をしますか？
該当する行動・判断に丸〇をつけてください。

	自分の行動・判断	
1 環境のことを考えて，エコバッグを利用する	する	しない
2 ゴミのポイ捨てをする	する	しない
3 裁判員制度は必要だと思う	思う	思わない
4 子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る	譲る	譲らない
5 授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	しゃべる	しゃべらない
6 おつりが多かったときに，それを伝える	伝える	伝えない
7 小説が好き	好き	好きではない
8 歩道を自転車で走行する	する	しない
9 見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる	教える	教えない
10 赤信号のときに横断歩道を渡る	渡る	渡らない
11 原子力発電は必要だと思う	思う	思わない
12 知らない人でも困っている人がいると助ける	助ける	助けない
13 駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める	止める	止めない
14 ボランティアに参加する	する	しない
15 メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	渡る	渡らない
16 死について考える	考える	考えない
17 バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	譲る	譲らない
18 後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	譲る	譲らない

Ｅ大学の文系の学部の学生の中に自分と同じ行動・判断の人は，どのくらいの割合でいると思いますか？

文系学部の学生で同じ行動・判断の人

（＝100%－自分と違う行動・判断の人の%）

1 環境のことを考えて，エコバッグを利用する （　　%）

2 ゴミのポイ捨てをする （　　%）

3 裁判員制度は必要だと思う （　　%）

4 子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る （　　%）

5 授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる （　　%）

6 おつりが多かったときに，それを伝える （　　%）

7 小説が好き （　　%）

8 歩道を自転車で走行する （　　%）

9 見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる （　　%）

10 赤信号のときに横断歩道を渡る （　　%）

11 原子力発電は必要だと思う （　　%）

12 知らない人でも困っている人がいると助ける （　　%）

13 駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める （　　%）

14 ボランティアに参加する （　　%）

15 メールやゲームをしながら横断歩道を渡る （　　%）

16 死について考える （　　%）

17 バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る （　　%）

18 後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る （　　%）

Ｅ大学の工学部の学生の中に自分と同じ行動・判断の人は，どのくらいの割合でいると思いますか？

工学部の学生で同じ行動・判断の人

（＝100%－自分と違う行動・判断の人の%）

1 環境のことを考えて，エコバッグを利用する （　　%）

2 ゴミのポイ捨てをする （　　%）

3 裁判員制度は必要だと思う （　　%）

4 子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る （　　%）

5 授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる （　　%）

6 おつりが多かったときに，それを伝える （　　%）

7 小説が好き （　　%）

8 歩道を自転車で走行する （　　%）

9 見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる （　　%）

10 赤信号のときに横断歩道を渡る （　　%）

11 原子力発電は必要だと思う （　　%）

12 知らない人でも困っている人がいると助ける （　　%）

13 駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める （　　%）

14 ボランティアに参加する （　　%）

15 メールやゲームをしながら横断歩道を渡る （　　%）

16 死について考える （　　%）

17 バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る （　　%）

18 後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る （　　%）

G大学の学生の中に自分と同じ行動・判断の人は，どのくらいの割合でいると思いますか？

	G大学の学生で同じ行動・判断の人
	（＝100％－自分と違う行動・判断の人の％）
1 環境のことを考えて，エコバッグを利用する	（　　％）
2 ゴミのポイ捨てをする	（　　％）
3 裁判員制度は必要だと思う	（　　％）
4 子どもを乗せている自転車が前から来たら，道を譲る	（　　％）
5 授業中，授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	（　　％）
6 おつりが多かったときに，それを伝える	（　　％）
7 小説が好き	（　　％）
8 歩道を自転車で走行する	（　　％）
9 見知らぬ人が物を落としたとき，教えてあげる	（　　％）
10 赤信号のときに横断歩道を渡る	（　　％）
11 原子力発電は必要だと思う	（　　％）
12 知らない人でも困っている人がいると助ける	（　　％）
13 駅やお店付近で，指定された場所以外に自転車やバイクを止める	（　　％）
14 ボランティアに参加する	（　　％）
15 メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	（　　％）
16 死について考える	（　　％）
17 バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	（　　％）
18 後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	（　　％）

あなたと自分の所属している学部との関係について次の質問に答えてください。
文章の「○○」には，自分の所属している学部を入れてください。
最もよく当てはまる数字をそれぞれ１つずつ選び、○で囲んでください。

1 「あなたは典型的な○○の人だね」と言われたとしたら、その表現は当たっている、つまり適切にあなたのことを表現していると思いますか？それとも、はずれている、適切でないと思いますか？	全く適切でない			どちらともいえない			非常に適切である
	1	2	3	4	5	6	7
2 あなたは他の人から、どの程度典型的な○○な人と思われていると思いますか？	全く典型的でない			どちらともいえない			非常に典型的である
	1	2	3	4	5	6	7
3 あなたは典型的な○○な人だね」と言われたら、よい感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？	非常に悪い感じ			どちらともいえない			非常に良い感じ
	1	2	3	4	5	6	7
4 あなたの○○に対する所属意識は強い方ですか、弱いほうですか？	非常に弱い			どちらともいえない			非常に強い
	1	2	3	4	5	6	7
5 あなたは○○にプライドを感じますか？	全く感じない			どちらともいえない			非常に強く感じる
	1	2	3	4	5	6	7
6 あなたにとって本当に大切な友人は○○の外、○○の内の、どちらに多くいますか？	○○の外に多い			どちらともいえない			○○の内に多い
	1	2	3	4	5	6	7
7 あなたの考えや行動に影響を与えた人が、○○内にはどれくらいいますか？	全くいない			どちらともいえない			非常に多くいる
	1	2	3	4	5	6	7
8 「自分は○○の人間なんだなあ」と実感することがありますか？	全くない			どちらともいえない			非常によくある
	1	2	3	4	5	6	7
9 あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が○○に属していることに、よくふれる方ですか、ふれない方ですか？	全くふれない			どちらともいえない			非常によくふれる
	1	2	3	4	5	6	7
10 あなたは○○にどれくらい愛着を感じていますか？	全く感じない			どちらともいえない			非常に強く感じる
	1	2	3	4	5	6	7
11 あなたは、ほかの○○のメンバーが、好きな方ですか、嫌いな方ですか？	非常に嫌い			どちらともいえない			非常に好き
	1	2	3	4	5	6	7
12 あなたは、ほかの○○のメンバーに、どれくらい親近感を感じますか？	全く感じない			どちらともいえない			非常に強く感じる
	1	2	3	4	5	6	7

これまで、E大学工学部・文系の学部・G大学について考えてもらいました。これら3つの集団に関することについてお聞きします。該当する箇所に丸〇をつけてください。

1 それぞれの学部や大学に親近感を感じますか？

工学部・・・・・・・・1. とても感じる　2. 感じる　3. まあまあ感じる　4. あまり感じない　5. 感じない　6. 全く感じない

文系の学部・・・・1. とても感じる　2. 感じる　3. まあまあ感じる　4. あまり感じない　5. 感じない　6. 全く感じない

G大学・・・・・・1. とても感じる　2. 感じる　3. まあまあ感じる　4. あまり感じない　5. 感じない　6. 全く感じない

2 自分とそれぞれの学部や大学の学生との類似性はどのくらいだと思いますか？

工学部・・・・・・1. とても似ている　2. 似ている　3. まあまあ似ている　4. あまり似ていない　5. 似ていない　6. 全く似ていない

文系の学部・・1. とても似ている　2. 似ている　3. まあまあ似ている　4. あまり似ていない　5. 似ていない　6. 全く似ていない

G大学・・・・1. とても似ている　2. 似ている　3. まあまあ似ている　4. あまり似ていない　5. 似ていない　6. 全く似ていない

3 ３つの集団を想像して、自分と同じ行動・判断の人の割合を推定してもらいました。それぞれの学部や大学をイメージするときに、性別によるイメージから割合を推定しましたか？

工学部・・・・・・・1. 性別によるイメージでは推定していない　2. 女性集団のイメージ　3. 男性集団のイメージ

文系の学部・・・1. 性別によるイメージでは推定していない　2. 女性集団のイメージ　3. 男性集団のイメージ

G大学・・・・・1. 性別によるイメージでは推定していない　2. 女性集団のイメージ　3. 男性集団のイメージ

4 普段、それぞれの学部や大学に通う学生の知り合いや友だちとどのくらい接触しますか？

工学部・・・・・・1. よく接触する　2. 接触する　3. ときどき接触する　4. ほとんど接触しない　5. 接触しない　6. 全く接触しない

文系の学部・・1. よく接触する　2. 接触する　3. ときどき接触する　4. ほとんど接触しない　5. 接触しない　6. 全く接触しない

G大学・・・・1. よく接触する　2. 接触する　3. ときどき接触する　4. ほとんど接触しない　5. 接触しない　6. 全く接触しない

5 それぞれの学部や大学のことを好きだと思いますか？

工学部・・・・・・・1. とても好き　2. 好き　3. まあまあ好き　4. あまり好きではない　5. 嫌い　6. とても嫌い

文系の学部・・・1. とても好き　2. 好き　3. まあまあ好き　4. あまり好きではない　5. 嫌い　6. とても嫌い

G大学・・・・・1. とても好き　2. 好き　3. まあまあ好き　4. あまり好きではない　5. 嫌い　6. とても嫌い

****
質問はこれで終わりです。 長時間，ご協力いただき， ありがとうございました。
****

お手数ですが，記入漏れがないかどうか最初のページから確認をお願いいたします。
感想や質問がございましたら、ご自由に記入してください。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科　前期課程2年　吉武　久美

5. 仮想的有能感尺度version 2（Hayamizu et al,　2004）

1 今の日本を動かしている人の多くは，たいした人間ではない
2 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は，周りに少ない
3 自分の周りには気のきかない人が多い
4 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い
5 他の人に対して，なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
6 他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる
7 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い
8 世の中には，常識のない人が多すぎる
9 世の中には，努力しなくても偉くなる人が少なくない
10 私の意見が聞き入れてもらえなかった時，相手の理解力が足りないと感じる
11 話し合いの場で，無意味な発言をする人が多い

6. 集団同一視尺度（Karasawa, 1991）

1 「あなたは典型的な〇〇の人だね」と言われたとしたら、その表現は当たっている、つまり適切にあなたのことを表現していると思いますか？それとも、はずれている、適切でないと思いますか？
2 あなたは他の人から、どの程度典型的な〇〇な人と思われていると思いますか？
3 あなたは典型的な〇〇な人だね」と言われたら、よい感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？
4 あなたは〇〇に対する所属意識は強い方ですか、弱いほうですか？
5 あなたは〇〇にプライドを感じますか？
6 あなたにとって本当に大切な友人は〇〇の外、〇〇の内の、どちらに多くいますか？
7 あなたの考えや行動に影響を与えた人が、〇〇内にはどれくらいいますか？
8 「自分は〇〇の人間なんだなあ」と実感することがありますか？
9 あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が〇〇に属していることに、よくふれる方ですか、ふれない方ですか？
10 あなたは〇〇にどれくらい愛着を感じていますか？
11 あなたは、ほかの〇〇のメンバーが、好きな方ですか、嫌いな方ですか？
12 あなたは、ほかの〇〇のメンバーに、どれくらい親近感を感じますか？